

一般国道1号関バイパス建設事業に伴う

小野城跡発掘調査報告

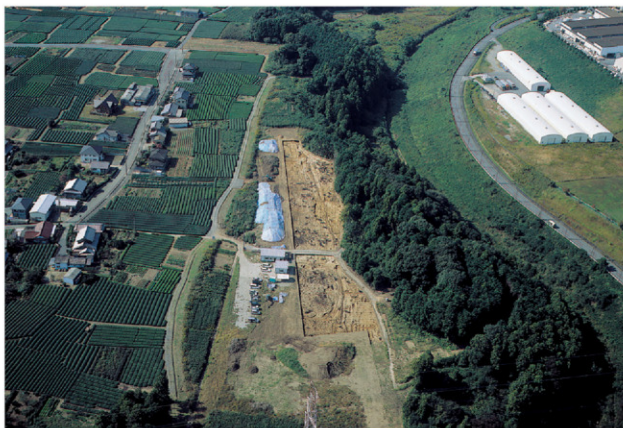
— 第4・5・6次調査 —

2010（平成22）年3月

三重県埋蔵文化財センター



第4次調査区遠景（北東上空から）



第5次B・C地区全景（東上空から）



第5次B・C地区全景（南上空から）



第6次調査区全景（東上空から）



第4次SR4018 (西から)



第6次SR6012 (西から)



第5次C地区SR5141 波板状凹凸遺構（南から）



第5次B地区SH5074 煙道（北から）

序

亀山市は、鈴鹿山脈南端部の南東に位置し、鈴鹿山脈の急峻な峰々や溪谷から、鈴鹿川、中ノ川流域周辺の平地まで、様々な景観が見られます。鈴鹿山脈は伊勢・近江の国境を画し、古来よりこれを越えるためのいくつかの道が開かれ、多くの人々が行き交いました。その中でも鈴鹿峠は、古代からわが国の東西を結ぶ主要道として大きな役割を果たしてきました。亀山市関地区は、古代には三関のひとつとして鈴鹿関が設置され、近世には東海道・大和街道・伊勢別街道の結節点の宿場として栄えるなど、陸上交通の要衝として重要な場所でありました。現在でも、一般国道1号やJR関西本線が通過する交通の要衝です。

今回報告する小野城跡では、一般国道1号の慢性的な渋滞を解消するために計画された関バイパス建設に伴い、遺跡の現状保存が困難な部分について緊急発掘調査が行われました。小野城跡は、鎌倉幕府に対し平氏の残党が反乱を起した「三日平氏の乱」の首謀者である若菜五郎の居城とも、室町・戦国時代に北勢地域に勢力を誇った関氏の与力である小野氏の居城とも言われています。また、小野城跡の北東約1.5kmには関氏の山荘であり、連歌師宗長による「宗長日記」に記述が見られることで著名な国史跡正法寺山荘跡が位置します。今回の発掘調査の結果、整備された道路跡や溝で区画された屋敷地が確認され、鎌倉時代から戦国時代にかけての集落の様子を明らかにすることが出来ました。

このように小野城跡の一端を知ることが出来ましたが、残念ながら発掘調査を行った部分は消滅してしまいます。この部分については、本書を通して皆様方に知っていただき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

末筆となりましたが、調査にあたりましては、多大なるご協力をいただきました地元の皆様ならびに関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 河北秀実

例 言

- 1 本書は、三重県亀山市小野町に所在する小野城跡（遺跡番号210a123）第4・5・6次調査にかかる発掘調査報告書である。また、附編として、亀山市関町鷺山に所在する大冷ヶ遺跡（遺跡番号210b71）、亀山市関町会下りに所在する走り下遺跡（遺跡番号210b73）・長田遺跡（遺跡番号210b72）の第1次調査についても収録している。
- 2 本書にかかる発掘調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所より委託を受けて、平成19～21年度に一般国道1号関バイパス建設事業に伴って実施した。現地調査は、平成19～21年度に実施し、整理・報告書作成業務は平成21年度に実施した。調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。
- 3 発掘調査は三重県教育委員会を調査主体とし、下記の体制で実施した。

平成19年度（小野城跡第4次調査）
調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課
課長：田村陽一、主査：竹田憲治、主事：勝山孝文
発掘作業・調査補助受託 安西工業株式会社

平成20年度（小野城跡第5・6次調査、大冷ヶ遺跡第1次調査）
調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課
課長：田村陽一、主幹：長谷川哲也、主事：勝山孝文、技師：水谷豊、業務補助員：酒井弘子
発掘作業・調査補助受託 株式会社島田組（小野城跡第5・6次調査）
空中写真測量受託 株式会社アコード（小野城跡第5次調査）
発掘作業受託 株式会社アート（大冷ヶ遺跡第1次調査）

平成21年度（走り下遺跡・長田遺跡第1次調査）
調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課
課長：田村陽一、主幹：長谷川哲也、主査：菌部英幸、技師：水谷豊、業務補助員：酒井弘子
発掘作業受託 朝日商会株式会社
- 4 本書の執筆は長谷川哲也・竹田憲治・勝山孝文・水谷豊が担当した。また、構構写真撮影は各現地調査担当者が行い、遺物写真撮影は勝山孝文・水谷豊が担当した。全体の編集は長谷川哲也が行った。
- 5 室内での整理作業及び報告書作成業務は、調査研究Ⅱ課が行い、業務補助員として酒井弘子が補助した。
- 6 自然科学分析のうち、鎔冶関連遺物の金属学的調査は株式会社九州テクノリサーチに、金属製品（煙管雁首・青銅小皿）の蛍光X線分析による材質同定等の金属学的調査は財団法人元興寺文化財研究所にそれぞれ委託して行った。
- 7 発掘調査においては、亀山市小野町、関町会下・鷺山在住の方々や亀山市及び亀山市教育委員会にご協力いただいた。記して感謝致します（順不同、敬称省略、所属は当時）。
久野友彦・村澤亮（亀山市産業建設部）、嶋村明彦・森川幸雄・亀山隆・山際文則・藤岡直子（亀山市教育委員会）
- 8 調査や報告書作成に当たっては、下記に示す諸氏・団体から様々なご教示とご助言を頂いた。記して感謝いたします（順不同、敬称省略、所属は当時）。
藤澤良祐（愛知学院大学）、中井均（NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長）、寒川旭（独立行政法人産業技術総合研究所招聘研究員）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、榎村寛之・松田珠美（斎宮歴史博物館）、第25回全国城郭研究者セミナー実行委員会（代表 三重大学教授藤田達生）
- 9 本報告書に関連した小野城跡の調査成果については、概報・発掘調査ニュース等で随時報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。
- 10 本報告書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡 例

〈地図類〉

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、亀山市都市計画図1/2,500である。
- 2 本書で示す座標・方位は世界測地系を用い、座標北を示している。なお、磁針方位は西偏約6°50'である。
(平成14年)

〈遺構類〉

- 3 土層図は、層の区分を実線で、遺構検出面となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 4 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版）を用いた。
- 5 当報告書での遺構番号は、下記のようにし、それぞれ通番としている。
第4次調査4001～ 第5次調査A地区5001～ B地区5031～ C地区5101～ 第6次調査6001～
- 6 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、見通し図となっている。
- 7 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
SA：柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：カマドなど SH：堅穴住居
SK：土坑 SR：道路状遺構 SZ：不明遺構など Pit：ピット、柱穴

〈遺物類〉

- 8 当報告での遺物実測図類の縮尺は実寸の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度表記している。
- 9 東海系無軸陶器については、碗を「山茶碗」、小皿を「山茶碗 小皿」、片口鉢を「山茶碗 片口鉢」とした。
- 10 遺物観察表は、以下の要領で記載している。
報告番号 … 挿図掲載番号である。
実測番号 … 実測段階の登録番号である。
種類 … 遺物の大分類したものを示す。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄製品等。
器種等 … 種類を細分した器種・器形等を示す。
グリッド … 調査時に設定した地区名を示す。
出土遺構・出土層位 … 遺物の出土した遺構や層名を記した。
法量 … 遺物の法量を示す。口径は口縁部径、器高は遺物の高さ、底径は底部径を示す。
調整技法の特徴 … 遺物観察時に確認した主な調整技法等を記した。外は外面、内は内面を示す。
胎土 … 小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
焼成 … 焼成時の状態を「良～不良」で区分した。
色調 … その遺物の代表となる色調を記載した。但し、大きく色調が異なるものは部位も表記している。外は外面、内は内面を示す。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存 … 残存度を主な部位を示した上で分数表記した。残存がわずかなものは小片、全体が残っているものは完存と記した。
備考 … 遺物の特徴となる事項を記した。

〈写真図版〉

- 11 写真図版の遺物番号は、挿図掲載番号と対応している。
- 12 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

第1章 前言	(長谷川哲也・竹田憲治・水谷豊)	1
第2章 位置と環境	(勝山孝文・水谷豊)	11
第3章 小野城跡を巡る研究史と事前調査	(長谷川哲也・竹田憲治・勝山孝文)	15
第4章 検出した遺構	(水谷豊)	29
第5章 出土遺物	(水谷豊)	77
第6章 自然科学分析		99
第1節 鍛冶滓の金属学的調査	(熊本九州テクノロジーリサーチ・TACセンター)	99
第2節 金属製品の分析	(熊本元興寺文化財研究所)	104
第7章 結語	(水谷豊)	111
附編 第1次調査	(勝山孝文・水谷豊)	125

図版目次

第1図 一般国道1号関バイパス計画路線内遺跡位置図	2
第2図 地形図	4
第3図 大地区割図	8
第4図 調査区位置図	8
第5図 小地区割図	9
第6図 周辺の遺跡位置図	13
第7図 小野城跡周辺の地籍図	20
第8図 実地踏査による復元図	21
第9図 大日本帝国陸地測量部による地形図	22
第10図 亀山市都市計画平面図	22
第11図 地籍図の検討成果図	23
第12図 区画図	24
第13図 発掘調査前地形図	25
第14図 発掘調査前遺構図	25
第15図 発掘調査前横断面図	25
第16図 遺構配置図	27~28
第17図 第4次南壁、第5次B・C地区南壁土層断面図	30
第18図 第5次C地区南壁、第6次南壁土層断面図	31
第19図 第4次西壁、第5次B地区西壁、第5次C地区中央土層断面図	32
第20図 第5次C地区西壁、第6次西壁、第5次A地区トレンチ土層断面図	33
第21図 第5次A2地区遺構平面図	36
第22図 第4次、第5次A1地区遺構平面図・断面図	37~38
第23図 第4次、第5次B・C地区遺構平面図・断面図	39~40
第24図 第5次C地区、第6次遺構平面図・断面図	41~42
第25図 第6次遺構平面図	43~44
第26図 SH5074遺物出土状況図・断面図	45
第27図 SR5010平面図・断面図	46
第28図 SD4013・4014、SR4018平面図・断面図	47
第29図 SR4018平面図・断面図	49

第30図	S D5150、S R5141平面図・断面図	49
第31図	S R6012平面図・断面図	50
第32図	S R6006、S D6029平面図・断面図	51
第33図	S A5003・5005、S D5004・5012・5013平面図・断面図	51
第34図	S D4029・4030・5053・5062平面図・断面図	53
第35図	S D5032・5040・5051・5057平面図・断面図	54
第36図	S B4001・4002、S A5014平面図・断面図	55
第37図	S B4023・4025・4026・4027平面図・断面図	57
第38図	S A5082・5080・5079、S B5083・5081平面図・断面図	58
第39図	S B5084平面図・断面図	59
第40図	S B5151・5152平面図・断面図	61
第41図	S B5153・5154平面図・断面図	62
第42図	S B6028、S D6017、S K6015・6017・6018平面図・断面図	63
第43図	S K5063・5046焼土・粘土検出状況平面図・断面図	63
第44図	S K5046・5049・5063、S F5077平面図・断面図	65
第45図	S K5042・5047・5067・5068・5069、S F5076平面図・断面図	66
第46図	S F5077平面図・断面図、S F5076断面図	66
第47図	S D5036・5031、S K5038平面図・断面図	67
第48図	S K5140・5109平面図・断面図	68
第49図	S K4007・4009・4016・4017・4024平面図・断面図	69
第50図	S D6010、S K6007・6015・6023・6024、S R6012平面図・断面図	70
第51図	S D6009・6011平面図・断面図	71
第52図	出土遺物実測図1	82
第53図	出土遺物実測図2	83
第54図	出土遺物実測図3	84
第55図	出土遺物実測図4	85
第56図	出土遺物実測図5	86
第57図	出土遺物実測図6	87
第58図	出土遺物実測図7	88
第59図	出土遺物実測図8	89
第60図	出土遺物実測図9	90
第61図	碗形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果	102
第62図	鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果	103
第63図	煙管の測定箇所	106
第64図	煙管接合部分1拡大図	106
第65図	煙管接合部分2拡大図	106
第66図	煙管本体部分拡大図	106
第67図	煙管接合部分1のXRF測定結果	107
第68図	煙管接合部分2のXRF測定結果	107
第69図	煙管本体のXRF測定結果	107
第70図	青銅小皿の測定箇所	108
第71図	青銅小皿金属光沢部分拡大図	108
第72図	青銅小皿接合部分拡大図	108
第73図	青銅小皿金属光沢部分のXRF測定結果	108

第74図	青銅小皿接合部分のXRF測定結果	108
第75図	青銅小皿金属本体のXRF測定結果	109
第76図	青銅小皿の黒色付着物採取箇所	109
第77図	青銅小皿黒色部分拡大図	109
第78図	採取した黒色付着物拡大図	109
第79図	黒色付着物のXRF測定結果	110
第80図	黒色付着物のATR-FTIR測定結果	110
第81図	黒色付着物アセトン抽出のATR-FTIR測定結果	110
第82図	山茶碗型式別(残存)	115
第83図	山茶碗型式別(破片)	115
第84図	第5型式尾張・渥美比率	115
第85図	第6型式尾張・渥美比率	115
第86図	尾張・渥美総数比率	115
第87図	常滑型式別	115
第88図	常滑時期世記別	115
第89図	常滑甕時期世記別(破片数)	116
第90図	常滑鉢型式別(破片数)	116
第91図	陶器鉢産地別	116
第92図	陶器壺甕産地別	116
第93図	陶器類産地別	116
第94図	瀬戸美濃型式別(破片数)	116
第95図	瀬戸美濃器種構成	116
第96図	土師器皿類	116
第97図	土師器鍋類	116
第98図	出土土器組成	116
第99図	北勢地域の鉢の産地別比率	122
第100図	北勢地域の瀬戸美濃製品出土状況	122
第101図	大冷ケ遺跡出土遺物実測図	127
第102図	大冷ケ遺跡トレンチ位置図	128
第103図	長田遺跡トレンチ位置図	128
第104図	走り下遺跡トレンチ位置図	128

表 目 次

第1表	一般国道1号関バイパス埋蔵文化財発掘調査経過	2
第2表	一般国道1号関バイパス埋蔵文化財発掘調査一覧	3
第3表	三日平氏の乱関連記事	17
第4表	三日平氏の乱関連記事(原文1)	18
第5表	三日平氏の乱関連記事(原文2)	19
第6表	三日平氏の乱その他関連記事(原文と訳文)	19
第7表	過去の小野城跡の発掘調査一覧	22
第8表	掘立柱建物一覧表	72
第9表	遺構一覧表1	73
第10表	遺構一覧表2	74
第11表	遺構一覧表3	75
第12表	遺構一覧表4	76
第13表	遺物観察表1	91
第14表	遺物観察表2	92
第15表	遺物観察表3	93
第16表	遺物観察表4	94
第17表	遺物観察表5	95
第18表	遺物観察表6	96
第19表	遺物観察表7	97
第20表	遺物観察表8	98
第21表	供試材の履歴と調査項目	101
第22表	供試材の化学組成	101
第23表	煙管のXRF測定結果まとめ	107
第24表	青銅小皿のXRF測定結果	109
第25表	黒色付着物のXRF測定結果	110
第26表	区画別・道路遺物出土状況表1	118
第27表	区画別・道路遺物出土状況表2	119
第28表	区画別・道路遺物出土状況表3	120
第29表	大冷ケ遺跡出土遺物観察表	127
第30表	大冷ケ遺跡第1次調査結果一覧表	128
第31表	長田遺跡第1次調査結果一覧表	128
第32表	走り下遺跡第1次調査結果一覧表	128

写真図版目次

巻頭写真図版1	第4次調査区遠景(北東上空から)	第5次調査B・C地区全景(東上空から)	
巻頭写真図版2	第5次B・C地区全景(南上空から)	第6次調査区全景(東上空から)	
巻頭写真図版3	第4次SR4018(西から)	第6次SR6012(西から)	
巻頭写真図版4	第5次C地区SR5141波板状凹凸遺構(南から)	第5次B地区SH5074煙道(北から)	
写真図版1	航空写真		129
写真図版2	第4次調査 調査前(西から)	全景(西から)	130
写真図版3	第4次調査 中央部(北から)	SB4001(西から)	131
写真図版4	第4次調査 SB4002(南から)	SB4023・4025(南東から)	132
写真図版5	第4次調査 SB4023(北から)	SB4027(南から)	133
写真図版6	第4次調査 SK4016他(北から)	SK4017完掘(南から)	134
写真図版7	第5次調査 A2地区西部(東南から)	A2地区南部(北西から)	135
写真図版8	第5次調査 A1地区全景(西から)	A2地区作業風景(南から)	
	A2地区SA5005(西から)	A2地区SA5003、SD5004(西から)	
	A1地区SR5010道路状遺構(南から)		136
写真図版9	第5次調査 B地区全景(東から)	B地区西部(南から)	137
写真図版10	第5次調査 B地区SR5058(東から)	B地区SD5057(東から)	138
写真図版11	第5次調査 B地区SH5074煙道(西から)		
	B地区SH5074煙道(北から)	B地区SD5051(南から)	
	B地区SD5032(西から)	B地区SD5051(南から)	139
写真図版12	第5次調査 B地区SF5077(南から)	B地区SD5062(北から)	
	B地区SK5042(南から)	B地区SK5047貼床(南から)	
	B地区SK5046炭・焼土(南から)	B地区SK5046炭・焼土(西から)	
	B地区SK5063(西から)	B地区SK5038(西から)	140
写真図版13	第5次調査 C地区全景(西から)	C地区西部(南から)	141
写真図版14	第5次調査 C地区SD5104道路状遺構(東から)		
	C地区SD5104道路状遺構(東から)		142
写真図版15	第5次調査 C地区SR5141(南から)	C地区SB5153・5154(南から)	143
写真図版16	第6次調査 調査前(東から)	全景(東から)	144
写真図版17	第6次調査 西部(南東から)	北東部(南から)	145
写真図版18	第6次調査 SR6012(東から)	SR6025硬化面(東から)	146
写真図版19	第6次調査 SD6003他(西から)	SD6009(東から)	SD6009土層断面図(東から)
	SR6012土層断面(西から)	SR6012硬化面除去後(東から)	147
写真図版20	出土遺物1		148
写真図版21	出土遺物2		149
写真図版22	出土遺物3		150
写真図版23	出土遺物4		151
写真図版24	出土遺物5		152
写真図版25	出土遺物6		153
	写真図版26	出土遺物7	154
	写真図版27	出土遺物8	155
	写真図版28	出土遺物9	156
	写真図版29	出土遺物10	157
	写真図版30	出土遺物11	158
	写真図版31	出土遺物12	159

第1章 前 言

第1節 一般国道1号関バイパスの概要

一般国道1号は、古くは畿内と東国を結ぶ道に起源を持つが国陸上交通の重要路線である。特に今回、事業が行われることになった亀山市神辺地区から関地区にかけては、古代には鈴鹿関が置かれ、江戸時代には東海道・伊勢街道・大和街道の結節点である関宿が置かれた所であり、現在も人や物の往来が連絡と続いている地域である。

1960年代に入ると、高度成長のうねりの中で、名神高速道路・東名高速道路、東名阪自動車道・西名阪自動車道等の高規格幹線道路開設が急ピッチで進められていった。しかし、これらの高速道路の利用にあたっては料金面からの抵抗が大きく、そのため、一般国道を利用する車両は増加の一途を辿り、各地で交通渋滞が発生していた。亀山・関地域は、道路幅が狭い上に、一般国道1号・25号、東名阪自動車道などの幹線道路の結節点であることから、特に亀

山インターチェンジ付近は、交通量の増加と車両の大型化への対応が迫られるようになってきていた。

国土交通省（当時は建設省）は、この要望に応えるため、一般国道1号のバイパス工事に着手した。1995年には、亀山市川合町から同市太岡寺町を結ぶ全長6.34kmの一般国道1号と25号の亀山バイパスが開通した。

しかし、近年、工場の進出等により、工業団地に入る通勤渋滞や物流交通による新たな渋滞も発生していることから、亀山市太岡寺町から同市関町香掛を結ぶ一般国道1号関バイパス（以下、「関バイパス」と記述）を建設することを決定した。関バイパスはすでに供用されている鈴鹿峠バイパス（亀山市関町から滋賀県甲賀市土山町を結ぶバイパス、昭和57年開通）と亀山バイパスを直結するもので、総延長は約7.1kmの道路である。

第2節 調査に至る経過

関バイパスについては、平成元年に国土交通省（当時は建設省）から三重県教育委員会に路線内の埋蔵文化財の有無に関する照会があり、その取扱いに関する協議が開始された。県教育委員会では関係市町との情報交換を行うとともに、平成4年5月に全路線の埋蔵文化財の有無・現況を調査し、『関バイパス埋蔵文化財分布調査報告』を提出した。その後は、工区ごとに詳細な埋蔵文化財の有無確認とその保護のための協議を行うことになった。

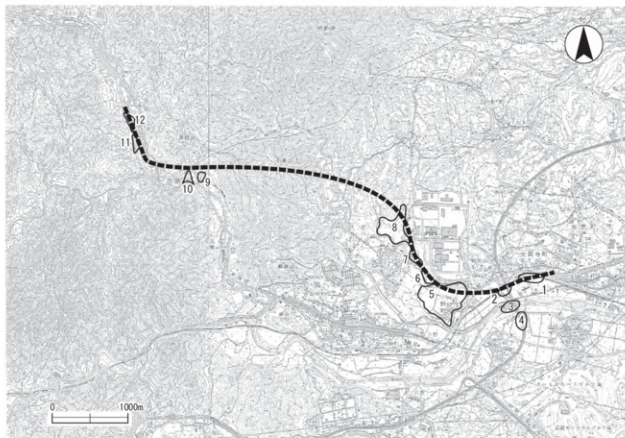
平成7年度

亀山市太岡寺町～小野町間（1工区）において、菟内遺跡、於登志遺跡、木下町A遺跡、下川原遺跡が確認された。三重県教育委員会は、平成14年度から亀山市教育委員会とともに保護協議を行い、範囲確認調査、本調査を亀山市教育委員会が行った。

その後の経過については、下記のとおりである。

平成14年度

- ・発掘調査体制について、三重県教育委員会と亀山市教育委員会が協議を行い、亀山市教育委員会は、県職員の派遣等、県の支援を前提として、発掘調査を行うことを承諾した。
 - ・国土交通省、亀山市教育委員会、三重県埋蔵文化財センターが協議を行い、平成14年度から亀山市教育委員会主体で調査を実施し、調査体制は社団法人中部建設協会を導入する三者体制で調整することで合意した。
 - ・国土交通省、亀山市間で「協定書」を締結し、同時に国土交通省、亀山市、社団法人中部建設協会で「一般国道1号関バイパス埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結した。両協定とも、施行箇所は1工区までで、平成19年度までで発掘調査を終了する予定であった。
- 4遺跡のうち、本調査に至ったのは、於登志遺跡



第1図 一般国道1号関バイパス計画路線内遺跡位置図(1:50,000)
(国土地理院 1:25,000『亀山』『鈴鹿峠』から)

工区	遺跡名	所在地	調査年度	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	備考
1 工区	1 下川原遺跡	亀山市太岡寺町	1次調査 本調査	290 0								亀山市教育 委員会調査
	2 敷内遺跡	亀山市太岡寺町	1次調査 本調査									調査対象地 から除外
	3 木下町A遺跡	亀山市山下町	1次調査 本調査		32 0							亀山市教育 委員会調査
	4 於登志遺跡	亀山市山下町	1次調査 本調査		0 450	0 110						亀山市教育 委員会調査
2 工区	5 小野城跡	亀山市小野町	1次調査 本調査						0 2,315	0 5,965		
	6 走り下遺跡	亀山市関町 会下字走り下	1次調査 本調査								520	
	7 長田遺跡	亀山市関町 会下字長田	1次調査 本調査								280	
3 工区	8 大冷ク遺跡	亀山市関町 鷺山字大冷ク	1次調査 本調査							1,200 0		
	9 上新田遺跡	亀山市関町 市瀬上新田	1次調査 本調査									
	10 権現沖遺跡	亀山市関町 市瀬権現沖	1次調査 本調査									
	11 沓掛遺跡	亀山市関町 沓掛	1次調査 本調査									
	12 西焼地蔵遺跡	亀山市関町沓掛 西焼地蔵瀬出し	1次調査 本調査									

単位 m²

第1表 一般国道1号関バイパス埋蔵文化財発掘調査経過

のみで、平成15・16年度に実施した。平成16年度末には報告書が刊行され、1工区の発掘調査は完了した。

平成15～17年度

国土交通省から亀山市教育委員会に対し、2工区についても事業化する旨の連絡が入り、調査が本格化する際に協定変更を行うことで合意し、協議を進めた。2工区には小野城跡が所在し、当時の協議では関バイパス事業地内だけで約26,000㎡の調査が必要であると回答していた。亀山市では、バイパス建設促進の立場から平成17年度当初予算を計上したが、諸般の事情によって、国土交通省から工事着手スケジュール等が提示されず、平成17・18年度の発掘調査は休止の状態であった。

平成18年度

国土交通省から急遽、関バイパスに関わる発掘調査を、3ヶ年で完了してほしい旨の提案があった。しかし、亀山市教育委員会は、調査面積が大きいこと、協定締結時から状況が変化していることから、単独で調査を受託することが困難であると思いを表示した。これを受けて、工事の進捗状況を確認し、平成19年度以降の発掘調査体制について、国土交通省、

三重県教育委員会社会教育・文化財保護室、亀山市教育委員会、三重県埋蔵文化財センターの4者で協議し、小野城跡の発掘調査については、三重県教育委員会が調査主体、三重県埋蔵文化財センターが調査担当で行い、亀山市教育委員会が最大限支援するということが合意がなされた。

さらに、亀山市の分布調査によって、事業工区内に新たに走り下遺跡（2工区）、長田遺跡（2工区）、大冷ヶ遺跡（3工区）の3遺跡が存在することが確認された。

平成19～21年度

国土交通省、三重県土木整備部高速道路企画室、三重県高速道推進北勢プロジェクト、三重県教育委員会社会教育・文化財保護室、三重県埋蔵文化財センターの5者による協議により、新たに確認された遺跡と今後の扱いについても、上記の体制で実施することになった。

小野城跡については、平成19年度に第4次調査、平成20年度に第5・6次調査を実施した。また、平成20年度に大冷ヶ遺跡の第1次調査を、平成21年度に走り下遺跡、長田遺跡の第1次調査を実施した。

工区	遺跡名	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	調査完了
1工区	1 下川原遺跡	4,900	290	2003.2.10～ 2003.2.17	—	—	—	遺物・遺構なし。 調査終了。	
	2 藪内遺跡	2,500	—	—	—	—	—	調査対象地 から除外。	
	3 木下町A遺跡	900	32	2003.8.7	—	—	—	遺物・遺構なし。 調査終了。	
	4 於登志遺跡	700	450 110	2003.10.1～ 2003.12.25 2004.7.26～ 2004.8.11	弥生 中前期	方形周溝墓 5基、土 土坑、溝 柱穴	縄文土器 弥生土器 須恵系 石器	周溝内一拵出土の 優秀な土器群。 調査終了。	
2工区	5 小野城跡	26,000	2,315	2007.8.9～ 2008.1.31	古代 ～ 中世	惣穴住居 1棟 掘立柱建物 道路跡、土坑	土師器 陶器、磁器 石製土 縄文土器 弥生土器 弥生土器 石器	平成21年度 事業中断 残り17,720	
			4,830	2008.5.20～ 2008.12.15					
			1,135	2008.11.12～ 2009.2.19					
	6 走り下遺跡	9,500	520	2009.6.24～ 2009.9.9	中世	—	陶器	遺構なし。 調査終了。	
7 長田遺跡	5,500	280	2009.6.24～ 2009.9.9	中世	—	土師器 山茶碗	遺構なし。 調査終了。		
3工区	8 大冷ヶ遺跡	12,000	1,200	2008.10.6～ 2008.11.28	中世	—	土師器 陶器、磁器	遺構なし。 調査終了。	
	9 上新田遺跡								
	10 権現舟遺跡								
	11 香掛遺跡								
	12 西院地蔵遺跡								

第2表 一般国道1号関バイパス埋蔵文化財発掘調査一覧

第3節 発掘調査の経過（小野城跡）

1 発掘調査概要

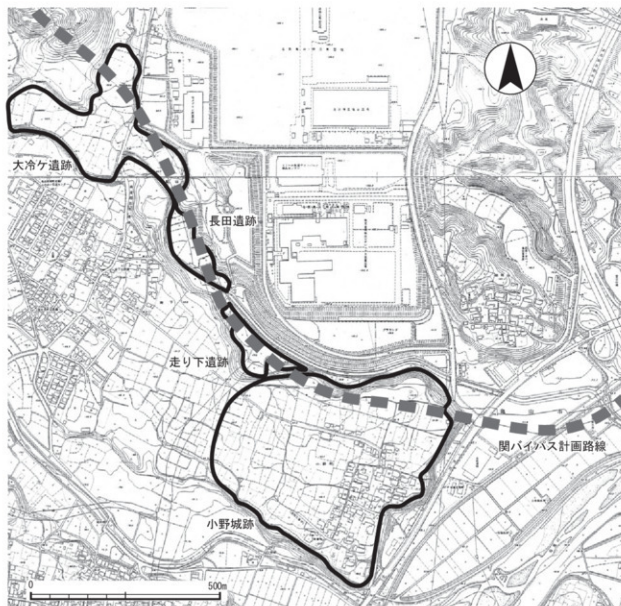
小野城跡のような現地表面で遺構が確認できる遺跡では、発掘調査の前に地表面を観察し、土塁や堀、斜面の状況を確認しておく必要がある。発掘調査前の平成19年4月26日に、亀山市教育委員会の協力を得て城跡全域の地表面観察を行った。その成果をもとに平成19年8月から平成20年1月に事業地内の事前測量を行い、1/500、1/1,000の「地形図」（地目・構造物・地割と等高線を記載した図）、「遺構図」（「地形図」に土塁や堀などの遺構を記載した図）及び「横断面」を作成した。

（「地形図」に土塁や堀などの遺構を記載した図）及び「横断面」を作成した。

第4次調査は、平成19年8月9日から平成20年1月31日まで実施した。調査面積は、2,315㎡である。

第5次調査は、平成20年5月20日から平成20年12月15日まで実施した。調査面積は4,830㎡である。

第6次調査は、平成20年11月12日から平成21年2月19日まで実施した。調査面積は1,135㎡である。



第2図 地形図（1：10,000）（『亀山市都市計画図2』『亀山市都市計画図3』1：2,500から）

2 調査日誌(抄)

第4次調査

平成19年

- 8月16日 現地協議。
- 9月3日～11日 茶木伐採。
- 9月13日 表土から開元通宝出土。現地基地搬入。表土掘削開始。
- 10月1日 人力掘削を東から開始。攪乱多数。
- 10月9日 根石を持つ掘立柱建物1棟検出。
- 10月10日 中世前期掘立柱建物検出。
- 10月11日 約半分の掘削終了。柱穴多数検出。
- 10月15日 風倒木跡から石鍬出土。
- 10月17日 調査区北側で道路状遺構(波板状凹凸遺構)検出。
- 10月23日 道路状遺構南側の溝から山茶碗出土。
- 10月24日 道路状遺構内の波板状凹凸遺構直上にて中世後期土師器羽釜出土。
- 10月30・31日 全景写真撮影。
- 11月1日～22日 遺構実測。
- 11月22日 現地説明会準備。
- 11月24日 現地説明会開催(80名参加)。
- 11月27日 ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影。
- 11月28日～12月7日 埋め戻し。

第5次調査

平成20年

- 4月22日 小野城跡基準杭確認。
- 5月28日 現地協議。
- 6月4日 現地測量開始。伐採開始。
- 6月9日 A2地区人力による表土掘削開始。B地区、重機による表土掘削開始。
- 6月17日 B地区表土掘削終了。地区杭設置。A2地区人力表土掘削終了。
- 6月18日 A1地区重機表土掘削終了。A1・2地区壁掃除。
- 6月19日 昨年度調査区と重なる部分掘削、西壁・南壁トレンチ掘削。下層から黄色粗砂、黄色粘質土、黒色土となることを確認。C地区伐採開始。
- 6月23日 B地区南壁トレンチ掘削。西より遺構検出開始。

- 6月25日 A2地区遺構検出開始。柱穴を確認。
- 6月30日 A2地区北部の土層状の高まりと堀状の落ち込みを掘削。B地区、方形の土坑を複数確認した。
- 7月1日 C地区茶木伐採終了。
- 7月4日 A2地区遺構検出終了。
- 7月9日 A2地区遺構掘削終了。南から写真撮影(11日まで)。
- 7月11日 B地区の中央部で検出した甕(土器)は堅穴住居の煙道になると思われる。
- 7月14日 C地区表土掘削開始。
- 7月17日～18日 A2地区実測。
- 7月23日 A1地区遺構検出終了。
- 7月24日 A1地区道路状遺構掘削。底部で部分的に硬化面が見られる。斜面のため流失したと思われる。
- 7月25日 C地区表土掘削終了。
- 7月29日 A1地区掘削終了。
- 7月30日 A1地区、写真撮影。
- 8月1日 B地区道路状遺構掘削。柱穴ではなく木の根と思われるものも多い。
- 8月4日 城郭研究者セミナー見学(約70名)。
- 8月5日 B地区焼土土坑写真撮影。
- 8月7日 B地区の当初堅穴住居と考えていた遺構が、床面のある土坑であることが判明。底と考えていた粘土質の土の下から山茶碗が出土。
- 8月8日 B地区土坑の呼び直し、完掘写真撮影。
- 8月11日 B地区写真撮影。
- 8月13日 小野城跡の今後の調査の進め方についての中間検討会。
- 8月18日 A地区埋め戻し終了。C地区東から遺構検出開始。C地区、調査区の北西部立木部分重機による表土掘削開始。
- 8月20日 立木部分表土掘削終了。遺構検出、遺構掘削。
- 9月8日 溝と思われた遺構から小瓶やビン底などガラス製品が出土し、攪乱であることが判明。
- 9月11日 南に延びる道路状遺構の底部で、側溝と波板状凹凸面、硬化面を検出。硬化面を

切って波板状凹凸面が造られている。

- 9月16日 C地区遺構検出終了。
9月17日 遺構掘削終了。10月6日まで作業中断。
9月29日 株式会社アコードと打ち合わせ。
10月6日 作業再開。
10月7日～21日 B地区、C地区写真撮影。
10月21日 ヘリコプターによる空中写真測量。
10月22日 現地説明会記者発表。新聞社現地取材(毎日・読売・中日・伊勢)。
10月25日 現地説明会準備。
10月26日 現地説明会開催(70名参加)。
10月27日 現地説明会后片付け。補足調査開始。
10月30日 人力掘削後段階確認。作業終了。
11月5日 株式会社アコード、空中写真測量補足作業。
11月13日～20日 空中写真測量図面現地校正。
11月21日～12月13日 B地区・C地区埋め戻し。
12月15日 現地発掘調査完了。

第6次調査

- 平成20年
11月14日 現地協議。
11月17～19日 調査区伐採作業。
11月25日 表土掘削開始。表土直下で地山の黄色粘質土へ粗砂となる。約20cm。
11月28日 表土掘削終了。
12月2日 地区杭設定。
12月3日 人力掘削開始。
12月8日 遺構検出終了。午後から遺構掘削開始。
12月11日 調査区北東部の溝がV字に掘られていることを確認。掘切か。
12月16日 溝は深いものが多く、掘削に時間がかかる。
12月19日 遺構掘削終了。
12月24日 全景写真撮影。
12月25日 ラジオコントロールヘリコプターによる写真撮影。

平成21年

- 1月5日 残りの箇所写真撮影。撮影後実測用の3mメッシュ設置。
1月6日 実測開始。
1月16・19日 補足作業。
1月23日 噴砂が疑われた箇所断ち割り(寒川旭氏より、後日、噴砂とは考えにくいのご教示を受ける。)
1月26日～1月28日 埋め戻し。
2月9日 現地にて、中井均氏にご教示を受ける。
2月10日 整理所にて、藤澤良祐氏にご教示を受ける。
2月13日 現地発掘調査完了。
5月26日 整理所にて、中野晴久氏にご教示を受ける。

3 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法関係の諸通知は、以下のとおりである。

- 1 発掘通知(三重県文化財保護条例第48条第1項、国土交通省→三重県教育長)
平成19年6月1日付け 国部整北調第28号
- 2 発掘調査の実施報告(文化財保護法第99条、三重県埋蔵文化財センター所長→三重県教育長)
第4次調査
平成19年9月7日付け 教理第208号
第5次調査
平成20年5月23日付け 教理第84号
第6次調査
平成20年11月18日付け 教理第326号
- 3 文化財発見・認定通知(遺失物法、三重県教育長→亀山警察署長)
第4次調査
平成20年1月8日付け 教委第12-4-14号
第5次調査
平成21年3月10日付け 教委第12-4431号
第6次調査
平成21年3月10日付け 教委第12-4432号

第4節 記録と保存の方法

1 地区設定について

(1) 大地区設定 (第3図)

小野城跡は、52,000㎡と広大な面積を有することから、今後の発掘調査も加味して、亀山市教育委員会と協議し、100m四方の大地区を設定した。世界測地系第VI系のY=36,900m、X=-126,600mを基点(A北西隅)として、城跡の北西隅から南東端までを網羅する100m×100mの大地区(A～さ)を設定した。

(2) 小地区設定 (第5図)

発掘作業に当たっては、大地区割内を、4m四方の升目で区切ることにによって小地区(グリッド)を設定している。南北方向は北から算用数字、東西方向は西からアルファベットとし、北西隅の交点の頭に大地区を付与してその小地区の符号とした(AA1など)。

(3) 調査区設定 (第4図)

小野城跡は、亀山市教育委員会により3回の発掘調査が行われており、平成19年度の調査は、第4次調査となる。平成20年度に行った第5次調査では、調査区内に現道が含まれていることから、A1・A2・B・C地区と便宜上区別して行った。A1地区は第4次調査区から現道まで、A2地区は現道より北側、B地区はA1地区・第4次調査区の西から現道まで、C地区は現道より西の部分である。なお、第6次調査は年度途中で急遽行う必要が生じたため、C地区の西側、現道までを範囲として調査を行った。

2 掘削

表土掘削は、第5次調査A2地区は人力で行い、その他は重機(バックホウ)を用いた。遺構検出・遺構掘削は人力で行った。

3 遺構カード・遺構略測図

遺構カードは、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを記録している。遺構番号については、溝・土坑・道路状遺構などについては遺跡全体の通し番号とした。小野城跡では、亀山市教育委員会が過去に3回の発掘調査を行っており、平成19年度からの県埋蔵文化財

センターの発掘調査は第4次調査からになる。そこで市教委調査分には1～4000、県埋蔵文化財センター調査分には、第4次調査は4001番から、第5次調査はA地区は5001番から、B地区は5031番から、C地区は5101番から、第6次調査は6001番から使用した。Pitについては、遺物が出たものについて小地区ごとに1番から番号をつけた。

4 遺構実測図

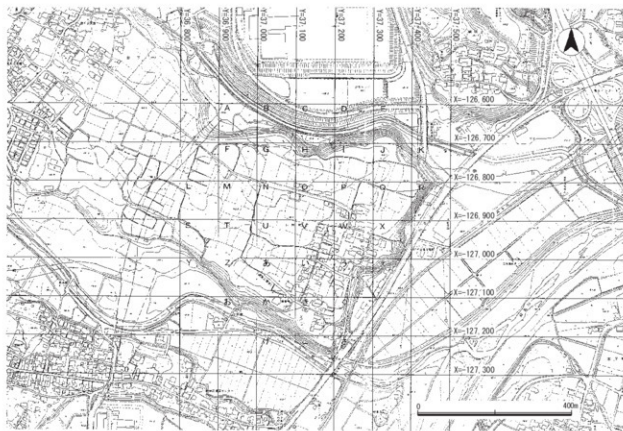
第5次調査B・C地区の遺構実測には、空中写真測量を実施し、縮尺1/50、1/100の遺構図・等高線図・遺構平面図を作成した。この場合、「遺構図」には遺構のみを、「等高線図」には遺構と等高線を、「遺構平面図」には遺構、等高線と標高を記載した。第4次調査区、第5次調査A地区、第6次調査区については、1/20で手描き実測を行った。また、各土層断面図は1/20で作成した。特に重要と思われる遺構については、個別に1/10、1/20の実測図を作成した。

5 遺構写真

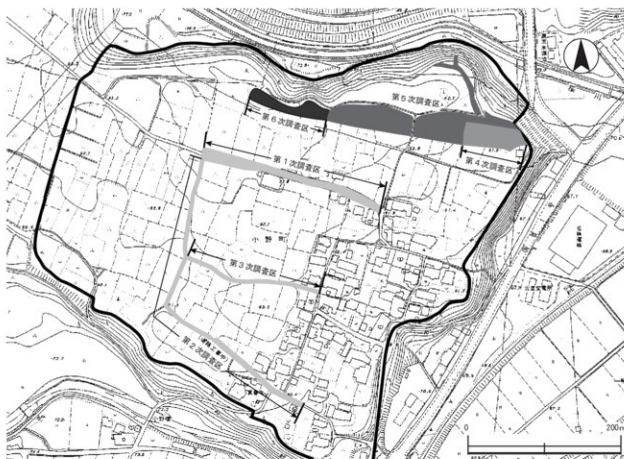
遺構検出状況や掘削完了状況などについては、モノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm判、ブローニ判(6×9cm)、4×5インチ判を使用した。さらに、第5次調査B・C地区は、4×5インチ判・ブローニ判(6×6cm)を使用して、ヘリコプターによって空中写真撮影を行った。第4次調査区と第6次調査区は、ブローニ判(6×6cm)を使用して、ラジオコントロールヘリコプターによって空中写真撮影を行った。

6 整理作業

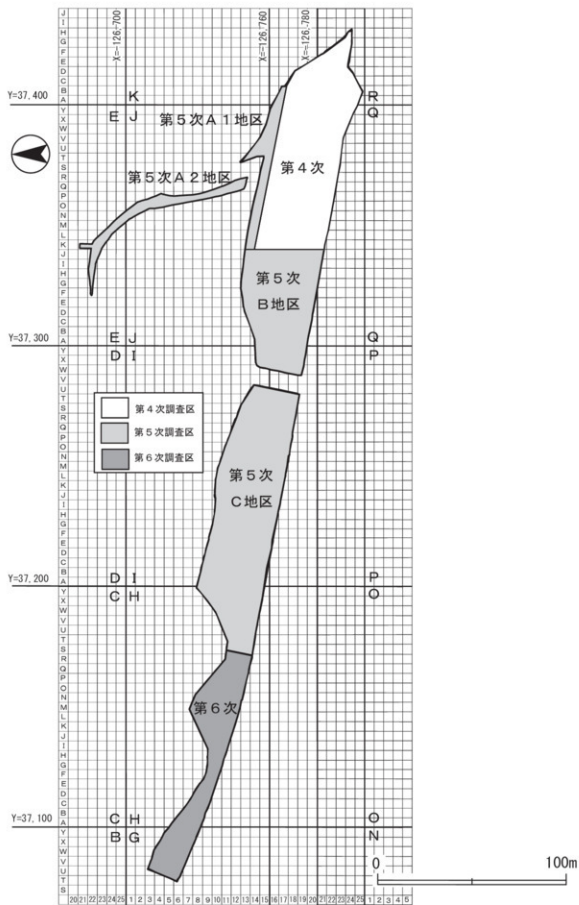
調査で出土した土器類は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄、乾燥、注記接合等の1次整理作業を行った。1次整理作業後、遺物の選別作業を行い、遺物実測を行った。実測図等が完成した遺物は、報告書作成のためのレイアウトを作成し、報告書番号順で保管・管理作業を進めた。遺物実測を行わなかったものは、出土遺構ごとに、包含層等はグリッド毎にまとめ、遺物整理箱に番号を付し、保管・管理作業を行った。



第3図 大地区割図 (1 : 10,000) (『亀山市都市計画図3』1 : 2,500から)



第4図 調査区位置図 (1 : 5,000) (『亀山市都市計画図3』1 : 2,500から)



第5图 小地区割图 (1 : 2,000)

報告書掲載の遺物写真については、主に6×9cm判のモノクロネガフィルムを使用して撮影した。

鉄製品は調査現場で取り上げ後、速やかに付着した土を除去し、可能な限り密閉状態にして一時保管した。これらの遺物のうち可能なものは実測を行い、特に残存度の良好なものは4×5インチ判又は6×9cm判で写真撮影を行った。

発掘調査に関連する資料類には、図面（平面図・

土層断面図・空中写真測量図面など）、遺構カード（1/40）、調査日誌、写真類などがある。また、整理段階で作成された遺物実測図、遺物写真などがある。これらは所定の番号を付け、当センターにて保管している。

また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管している。

第5節 公開普及

発掘調査に伴う公開普及活動としては、現地説明会の開催、小野城跡発掘調査ニュース・国道1号関バイパス発掘調査ニュースの発行などを行った。

現地説明会は、小野城跡第4次調査と第5次調査で行い、小野城跡発掘調査現場で遺跡の中を歩き、出土した遺物を間近で見ていただいた。第4次調査は平成19年11月24日に、第5次調査は平成20年10月26日に行った。参加者数は、第4次調査が約80名、第5次調査が約70名であった。また、平成20年8月4日には、第25回全国城郭研究者セミナーの見学会

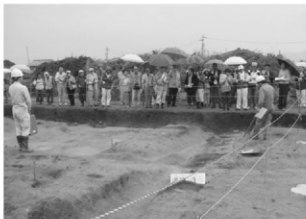
があり、約70名の研究者が訪れた。

地元の方々や関係者に発掘調査の成果の速報を知っていただくために、小野城跡発掘調査ニュースを随時作成・配布した。平成19年度は、第1～7号と、発掘調査に合わせて特別号を配布した。平成20年度は、第8・9号と、発掘調査に合わせて特別号2を配布した。国道1号関バイパス発掘調査ニュースは、平成19年3月に№1を、平成20年3月に№2を発行した。

（長谷川哲也・竹田憲治・水谷豊）



第4次調査 現地説明会の様子



第5次調査 現地説明会の様子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

位置 小野城跡(1)の所在する亀山市は、北勢地方の南西端に位置し、東は鈴鹿市、南は津市、西は伊賀市、北は鈴鹿山脈を境に滋賀県と接する。鈴鹿山脈の東麓に位置するこの地域は、古くから、東国から畿内への玄関口として重要な位置を占めており、現在においても、主要な国道や高速道路、鉄道などが交差・連結している交通の要衝である¹⁾。

地形 鈴鹿山系に源を発した鈴鹿川は、いくつかの支流と合流しながら東流し、伊勢湾に注いでいる。特に上・中流域には河岸段丘が発達しており、多くの遺跡が段丘上に立地する。今回発掘調査を行った小野城跡も、鈴鹿川左岸の河岸段丘の中位面²⁾に立地する。段丘面の標高は92m前後で、段丘崖の高さは25m程である。段丘の北には桜川、南には小野川が流れ、両河川と鈴鹿川とで城跡の三方を囲む形となっている。

活断層 亀山市内には、布引山地東縁断層帯西部が通っている。この断層帯は、白木断層・明星ヶ岳断層・椋木断層などの個別断層の集合である。段丘面は本来、河川の流下方向と同じ向きに傾斜するものであるが、小野城跡の立地する中位段丘面は、この方向とは逆に、西向きに傾斜している。この傾斜は段丘の西側を通る白木断層の変位によって生じたものと考えられている³⁾。

土地利用 小野城の所在する中位段丘上は黒ボクが発達しており、中位段丘上を覆っている。水利面で水田耕作には不向きであるが、反面、排水性や通気性が良く、日照も良好なことから、近世以降、この地域でも茶の栽培が行われるようになり、小野城跡を含む周辺一帯は、現在も茶畑が一面に広がっている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 亀山市内では、現在のところ遺跡は確認されていない。

縄文時代 縄文時代に関しては、早期では押型文土器の出土している大鼻遺跡⁴⁾(5)や条痕文土器の出土している北瀬古遺跡(6)・忍山遺跡⁵⁾(7)・於登志遺跡⁶⁾(8)がある。中期～後期では沢遺跡⁷⁾(9)があり、晩期の突帯文土器は大鼻遺跡や忍山遺跡・於登志遺跡から出土している。このような状況を見ると、縄文時代のこの地域では、鈴鹿川兩岸の中位段丘面に、ある程度まとまりを持った集落の存在が想定できる。しかし、小野城跡より上流域では、現在のところ縄文時代の遺跡は確認されていない。

弥生時代 於登志遺跡で、前期新段階のいわゆる亜流遠賀川系土器を中心とする遺物が確認されている。中期では、大鼻遺跡で11基の方形周溝墓が検出されている。また、木崎遺跡(10)・小野遺跡(11)・

古坂遺跡(12)で弥生土器の細片が採集されているが、時期は不明である⁸⁾。

古墳時代 この地域でも多くの古墳が造られている。鈴鹿川右岸には、裏之山古墳(13)・切山古墳(14)・木下古墳(15)・宮ノ前古墳群(16)・金附古墳(17)・山人古墳群(18)・菱尾谷古墳群(19)・山下古墳群(20)・山下古墳(21)・大垣内古墳(22)・於登志古墳(23)があり、左岸には、町南古墳(24)・関台古墳(25)・小野古墳群(26)・引地古墳(27)・太岡寺古墳群(28)・布気古墳(29)・忍山古墳(30)がある。このうち、引地古墳は小野城跡と同じ台地にあり、昭和48年(1973)、畑の耕作中に石室の一部と須恵器平瓶が見つかった。開壟により墳丘は消滅しているが、小野川沿いで確認された唯一の古墳である⁹⁾。

集落遺跡としては、大鼻遺跡で堅穴住居が66棟検出されている。

古代 この地域は律令制下では鈴鹿郡に属していた。『和名類聚抄』²⁾によれば、鈴鹿郡には、英多・高宮・長世・鈴鹿・牧田・神戸・柳家の7郡が存在したようであるが、郡衙の所在地は不明である。

古代において、官道としての東海道と、それを塞ぐ鈴鹿関が整備されたことは、この地域の歴史を特色づけるものである。

東海道 東西の交通路としての様相は、縄文時代から見られ、亀山市内出土の縄文土器には、西日本に軸足を置きながらも、東日本の影響が見られるものが多数あり、駿豆地方からの輸入品と見られる土器も数点報告されている³⁾。おそらくこの地域には、官道が整備される以前から、その元となる交通・交易路が存在していたものとみられる。

古代官道としての東海道は、当初は伊賀の柘植から加太峠を越えてこの地に至るルートであったが、仁和2年(886)以降は伊賀を通らず、直接近江から鈴鹿峠を越えてこの地に至るルートに変更されている⁴⁾。しかし、この地域内での具体的な経路については、鈴鹿駅家と鈴鹿川右岸に残る地名「古既」との関係を含め、諸説あり、明らかになっていない⁵⁾。また、中世における東海道は、『吾妻鏡』等の記述から、小野城跡のある台地上を通っていた可能性も考えられる⁶⁾。その後は、天正年間(16世紀末)に関盛信によって改修が行われ、小野城跡の台地には上らず、台地の下をかすめて鈴鹿川沿いを亀山に向かう経路に変更されたとされる⁷⁾。近世になると、東海道47番目の宿場として関宿が整備され、さらに、西の追分で大和街道が、東の追分で伊勢別街道がそれぞれ分岐しているため、参勤交代や伊勢参りなどの交通の拠点として繁栄した。

鈴鹿関 古代三関の1つとして東海道を塞いだ鈴鹿関であるが、詳細な位置は明らかではない。諸説あるが、大別すると、①鈴鹿川左岸とする説⁸⁾、②鈴鹿川右岸とする説⁹⁾、③兩岸とする説¹⁰⁾の3説が存在する。そのような中で、平成18年(2006)に亀山市教育委員会が行った発掘調査では、鈴鹿川左岸の台地上に「西城築地痕跡」(31)と重園文軒丸瓦が確認されている¹¹⁾。築地の南側延長線上には、重園文軒平瓦が出土した縄文沖遺跡¹²⁾(32)があり、関の範囲や位置を想定する上で重要である。また、

切山瓦窯跡¹³⁾(33)から出土した重園文軒丸瓦は、鈴鹿関「西城築地痕跡」から出土した瓦と同型とみられることから、関の瓦の供給元と考えられる¹⁴⁾。

中世 集落跡では、大鼻遺跡¹⁵⁾で平安時代末から室町時代にかけての掘立柱建物跡が42棟確認されており、そのうち、南東隅土坑を伴うものが8棟ある。さらに、遺跡中央部を南北に走る溝群(S D20~27)の中で検出されている「柱列」SA4は、「波板状凹凸面」とみられることから、これらの溝は道路状遺構の可能性が高いものと考えられる。

中世城館では、新所城跡(34)・関忠実館跡(35)・於登志館跡・走り下城跡(36)・高飛館跡(37)がある。また、沢遺跡では堀跡と思われる溝が検出されており、城館跡の可能性が指摘されている¹⁶⁾。上記の内、走り下城跡は、桜川を挟んで小野城跡を見下ろす位置に立地している。昭和63年(1988)に亀山市教育委員会により発掘調査が行われている。遺物がほとんどみられないこと、広い平坦地の一部にのみ直線的な区画が造られていること、構築物の規模が小さいことなどの特徴がみられ¹⁷⁾、亀山氏はこれらの特徴から、走り下城を小野城の「出城」と想定し¹⁸⁾、中井均氏は高飛館城跡と同様に、「障城」の可能性を指摘している¹⁹⁾。

中世寺院では、正法山荘跡(38)と瑞光寺跡(39)がある。このほか、『宗長日記』²⁰⁾によると現在、所在は不明であるが、正法寺の近辺に「大龍寺」と「興禅寺」のあったことが記されており、小野川沿いに中世寺院が集中していたことが分かる。なお、現在、関町木崎にある瑞光寺は後に関盛信によって再建されたものである。

三日平氏の乱 小野城跡に関する歴史の中で最も大きな事件のひとつが三日平氏の乱である。元久元年(1204)3月²¹⁾、若菜五郎をリーダーとする伊勢平氏が伊賀・伊勢両国の守護であった山内首藤経俊を襲い、逃亡させるという事件が起こった。若菜らは、数日のうちに伊賀・伊勢両国を制圧し、鈴鹿関や八峯山(八風峠か)を塞いだという。幕府から追討を命じられた京都守護の平賀朝雅は、鈴鹿関が塞がれていたため、美濃を回って伊勢に入り、各地を転戦した。若菜五郎は日永、若松、南村、高角、関小野などに「城郭」を構えて対戦したが、関小野に

て命を亡くしたという。この「関小野」が、小野城跡であるとされている。戦いは4月10日～12日までの、ほぼ三日間で決したことから、この一連の戦いを「三日平氏の乱」と呼んでいる。

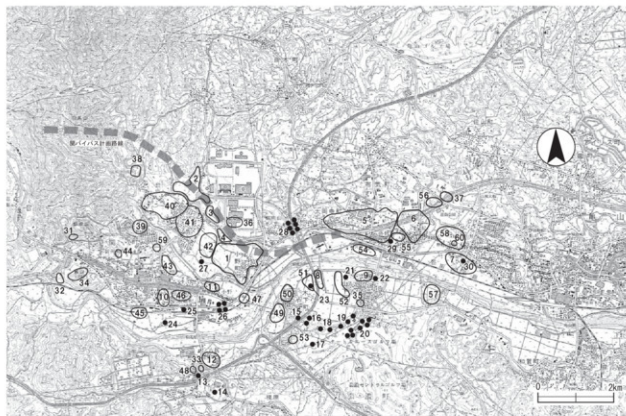
しかし、以上の『吾妻鏡』の記述をもって、直ちに小野城跡の遺構と若菜五郎とを結びつけるには様々な問題のあることが、すでに指摘されている。

小野氏 室町時代にこの地域を治めた関氏の有力家臣として小川・白木・小野の三氏があり、しばし

ば「三与力」などと呼ばれている。

享保年間（18世紀前半）成立の『九々五集』²¹には、小野に残る「古屋敷跡」は小野氏の「住所」と記されている。また、前述の瑞光寺には16世紀を中心とした『瑞光寺文書』が残されており、「小野殿」や「小野又三郎」など、小野氏に関する記述があり貴重である²²。

（勝山孝文・永谷豊）



- | | | | | |
|----------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1 小野城跡 | 13 裏の山古墳 | 25 関台古墳 | 37 高飛館跡 | 49 西台遺跡 |
| 2 大冷ヶ道跡 | 14 切山古墳 | 26 小野古墳群 | 38 正法寺山荘跡 | 50 木下里中遺跡 |
| 3 長田道跡 | 15 木下古墳 | 27 引地古墳 | 39 瑞光寺跡 | 51 木下町A遺跡 |
| 4 走り下道跡 | 16 宮ノ前古墳群 | 28 太閤寺古墳群 | 40 余下A道跡 | 52 山下町A遺跡 |
| 5 大鼻道跡 | 17 金附古墳 | 29 布気古墳 | 41 余下B道跡 | 53 勢武谷遺跡 |
| 6 北瀬古道跡 | 18 山入古墳群 | 30 忍山古墳 | 42 大堀道跡 | 54 山之下遺跡 |
| 7 忍山道跡 | 19 菱尾谷古墳群 | 31 西城壁築地痕跡 | 43 関神社周辺道跡 | 55 布気神社遺跡 |
| 8 於登志道跡（於登志館跡） | 20 山下古墳群 | 32 観音沖道跡 | 44 関中学校西道跡 | 56 上野堀内遺跡 |
| 9 沢道跡 | 21 山下古墳 | 33 切山瓦窯跡 | 45 大日森道跡 | 57 和歌道跡 |
| 10 木崎道跡 | 22 大堀内古墳 | 34 新所城跡 | 46 木崎B道跡 | 58 野村道跡 |
| 11 小野道跡 | 23 於登志古墳 | 35 関忠実館跡 | 47 下門田道跡 | 59 赤坂頓宮跡 |
| 12 古堀道跡 | 24 町南古墳 | 36 走り下城跡 | 48 浦ノ山中世墓 | 60 野村一里塚 |

第6図 周辺の遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院 1：25,000『龜山』から）

註

- 1 主な交通網として、亀山市内で国道1号・25号（名阪国道）・東名阪自動車道・新名神自動車道・伊勢自動車道が交差・結接し、鉄道ではJR関西本線と紀勢本線が亀山駅で接続している。
- 2 『土地条件図 四日市』（国土地理院、1969年）による。なお、小野城跡の立地する中位面は、桜川によって上位面である朝明山丘陵とは切り離されているため、河岸段丘とはいうものの、景観上は台地状を呈している。
- 3 亀山市史編さん推進委員会『編さん成果報告<自然>』
- 4 『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）
- 5 『忍山遺跡』（亀山市教育委員会、1994年）
- 6 『於登志遺跡』（亀山市教育委員会、2005年）
- 7 『沢道跡Ⅰ』（亀山市教育委員会、1988年）および、『沢道跡発掘調査報告書Ⅱ』（亀山市教育委員会、1990年）
- 8 『関町史 上巻』（関町教育委員会、1977年）
- 9 『関町史 上巻』（関町教育委員会、1977年）
- 10 京都大学附属図書館所蔵『和名類聚抄』
- 11 『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）、『沢道跡Ⅰ』（亀山市教育委員会、1988年）など
- 12 古代交通研究会編『日本古代道路事典』（八木書店、2004年）
- 13 東海道に関する諸問題については、本書の第3章第2節にまとめた。
- 14 本書の第3章第2節を参照
- 15 山田木水『亀山地方郷土史』第一巻（三重県郷土資料刊行会、1970年）
- 16 木下良『三関跡考定試論』『人文地理学論叢』（織田武雄先生追悼記念事業会編、1979年）など
- 17 藤岡謙二郎『都市と交通路の歴史地理学的研究』（大

- 明堂、1960年）など
- 18 足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」（上田正昭編『探訪 古代の道 第二巻』法蔵館、1988年）など
- 19 『鈴鹿関跡 第1次発掘調査概報』（亀山市教育委員会、2007年）
- 20 『観音沖遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2003年）
- 21 『切山瓦窯跡・涌ノ山中世墓発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）
- 22 『鈴鹿関跡 第1次発掘調査概報』（亀山市教育委員会、2007年）
- 23 『沢道跡Ⅱ』（亀山市教育委員会、1990年）
- 24 『走り下城跡』（亀山市教育委員会、1983年）
- 25 前掲『走り下道跡』による。
- 26 NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長中井均氏に小野城跡を実現していただいた際に、ご教示いただいた。
- 27 『続群書類従』第十八巻下「宗長日記」（続群書類従完成会、1957年）によると、宗長は大永4年（1524）4月22日に亀山を訪れている。滞在中は数回、正法寺山荘で連歌興行や飲酒している。
- 28 『国史大系第三十二巻「吾妻鏡 前編」』（吉川弘文館、1932年）
- 29 本書の第3章第2節を参照。
- 30 『関町史 上巻』（関町教育委員会、1977年）
- 31 『九々五集』（亀山市教育委員会、1986年）
- 32 本書の第3章第2節に詳述。

第3章 小野城跡を巡る研究史と事前調査

第1節 近世から近代の地誌的研究

近世の地誌類には、城の由緒に関する記述が多くみられるが、城が機能していたころから数百年後に作られた編纂物であること、城や城主の由緒に関して作法的なものが少なからず存在することなどから、史料価値はそれほど高くない。しかし当時の小野城に関する何らかの状況やとらえ方を伝えるものとしてあえて記載することにする。

まず、享保年間（18世紀前半）に成立したとされる『九々五集』¹⁾の小野村の条には「古屋敷跡 六拾間四方 但古小野大藪の上北ニ有、間敷与力小野筑前守住所一郷ノ給人由也」という記述がある。

宝暦13年（1763）に成立したとされる『三国地志』²⁾では、「小野堡」として『吾妻鏡』の三日平氏関連の記事を引いた上で、「按小野村ノ西ニアリ関氏家臣小野筑前守居」とする。

天明年間（19世紀末）に成立した『伊勢国誌』³⁾は若菜五郎の三日平氏の乱に関連した「古小野村ニ城跡」という記述がある。

天保4年（1833）に成立したとされる『勢陽五鈴遺響』⁴⁾には、「小野砦址」として、「古小野村ノ良位ニアリ、元久元年四月平氏ノ余党若菜五郎戦死ノ地ナリ」とあり、その後『吾妻鏡』の記述を載せている。同様の記述は明治7年に書かれた『地誌物産 九重雑志』⁵⁾にも見える。

嘉永4年（1851）に成立したとされる『勢国見聞集』⁶⁾には、小野村の城跡として若菜五郎との関連を記述する。

江戸時代末期に成立したとされる『伊勢一国旧城跡附』⁷⁾には、村名と城主を載せているが、「小野村」には「小野筑前守」の名が見える。

明治22年（1889）に成立したとされる『伊勢名勝志』⁸⁾には「若菜城址」として、「小野村字殿ノ内及び大堀ニ連ル 今耕地藪地等トナレリ 深老丈幅三間長五拾間之至百間ノ濠地ヲ存ス」とした上で、吾妻鏡・勢陽五鈴遺響などからの三日平氏の乱の記事を載せる。ほぼ同内容の記述は、昭和初年に書さ

れた『神辺小学校郷土教育資料』⁹⁾や昭和10年代に書写された『神辺小学校郷土資料』¹⁰⁾にもみえる。

明治年間に成立したとされる『大日本国誌 伊勢国』¹¹⁾には、「若菜城址」として、「鈴鹿郡小野村字殿内大堀に在リ」とし「外濠ノ地存ス」という記述がある。

大正15年（1926）に刊行された『鈴鹿郡野史』¹²⁾は、三日平氏の乱で「若菜盛高」が、「関小野ニ陣リ鈴鹿峠ヲ掘シタ」と記し、「若菜盛高及其一党ノ陣リシ城ハニッ所アリ 甲ハ神辺村大字小野字殿ノ内及大堀ニ跨リ 今ハ耕地成ハ竹林トナレリ 乙ハ関町大字木崎町ノ西北隅字三日城ニシテ今僅カニ丘陵ノミ」とある。

昭和45年（1970）に刊行された『龜山地方郷土史』¹³⁾には、三日平氏の乱に関連して、「若菜五郎盛高は本郡小野古里の東北高地字殿の内及大堀の地に居城を構えて特機した」、「全城址は関町木崎にあつて三日城という字名をのこしている」、「首魁若菜五郎盛高なお小野に在つてこれに抗した」という記述が、関氏の与力と重臣の小野氏の項で、「本郡小野村に住み小野村一円高約七百石を領有して小野筑前守と称した。」という記述がある。また、各城塞の若菜城の項に「一名小野古城旧神辺村大字小野字殿内に在つた。元久中平氏の余党若菜五郎の拠つた所、平賀朝雅の為に攻略せられ五郎戦死して廢城となつた」、小野城の項に「全村大字大藪に在つた。小野筑前守の居城であつた」、三日城山の項に、「関町大字木崎字三日城にあつた。元久中平氏の余党若菜五郎の築いたところ、平賀朝雅の為に攻められ、三日平氏の名を止めて滅亡した。そのためこの名がある」との記述がある。

なお、小野氏関連としては、『勢陽五鈴遺響』には、山本村の「本邑ノ内字八田名瀬ト云処ニ小野筑前守宅址」があるとの記述が、『伊勢名勝志』には、「山下村字南鍋田」に「小野氏宅址」があるとの記述があり、『龜山地方郷土史』には「山下城」の文安中の城主として小野正信の名が見える。

以上を要約すると、近世から近代の地誌類からは、

- ① 城跡は、小野村の字殿ノ内、大堀、大蔵にあった。
- ② 『九々五集』が成立した享保年間には「六拾間四方」の屋敷跡が、『伊勢名勝誌』が成立した明治22年には「深さ壱丈」、「幅三間」、「長五拾間乃至百間」の堀が残存していた。
- ③ 成立時期が比較的古い『九々五集』や『三国

地志』では城主を小野氏としているのに対し、近世末から近代の地誌類では、小野城跡を三日平氏の乱の若菜五郎の居城とするものが多いこと。最も新しい『亀山地方郷土史』のみが、小野村の「殿内」にあるものを「若菜城」、「大蔵」にあるものを「小野城」としている。などの情報を引き出すことができる。

第2節 文献史学・歴史地理学の成果

1 「東海道」を巡る問題

関宿跡から小野城跡の立地する台地の下をかすめて亀山へ至る近世東海道は、天正年間までは木崎から北上し、小野の台地上を通過していたという説がある¹⁴。それが現在の経路に変更されたのは、天正年間に亀山城主であった関盛信による改修の結果であるという¹⁵。亀山隆氏はそれを「鈴鹿川畔に縄手(太岡寺塚)を築き、通行の利を計ったものであろうか」と、推測している¹⁶。

古代の東海道 古代の官道として、東海道がこの地域を通過していたが、その経路には変遷がある。通説では、9世紀後半までは伊賀の柘植から加太峠を越えて鈴鹿駅に至るルートであったが、仁和2年(886)に「阿須波道」が開かれると、伊賀を bypass せず、直接近江から鈴鹿峠を越えるルートに変化したとされる¹⁷。しかし、加太峠を越えて鈴鹿駅に至る具体的な経路については、現在のところ諸説あり、明らかにされていない状態である。鈴鹿川右岸に残る地名「古厩」の解釈を含めて、いくつかの経路が想定されており、詳細は省くが、おおむね、A：加太峠から古厩を経て、鈴鹿川右岸を通るルート¹⁸と、B：加太峠から現在の西の追分を経て、鈴鹿川左岸を通るルート¹⁹の2つに大別できる。また、「阿須波道」開通以後の経路は、鈴鹿峠から下って現在の西の追分に至り、鈴鹿川の左岸を通るルートが想定されている²⁰。

中世の東海道 後述する「三日平氏の乱」において、「張本」の一人である若菜五郎は、「関の小野」に「城郭」を構えて関を塞ぐ。中世前期の「城郭」の多くは交通路を遮断するための施設を指すという説があり²¹、中世前期の東海道が小野を通過した

可能性がある。

小野城跡を通過していたとされる「東海道」とその時期について、発掘調査で検証する必要がある。

2 三日平氏の乱と小野城跡

文献史学から小野城跡に関する研究は、三日平氏の乱に関連した研究成果が主となる。乱の経過については、近世の地誌以来、『吾妻鏡』の記事に基づいた説明がなされている。しかし勝山清次氏は、『明月記』・『仲資御記』・『三長記』などの記録と、『吾妻鏡』の記述を検討し、乱の経過に関する『吾妻鏡』の記事は何らかの作為が加えられており、到底そのままでは信用できない²²としている²³。ただし『吾妻鏡』の記事中にみえる平氏一族の人名と関連する地名には作為の手は加わりなく、「相対的に信頼性が高い」とし、反乱の張本人であった若菜五郎は、三重郡(四日市市)から川曲郡(鈴鹿市)周辺に広く一族郎党が存在し、最後の拠点としたのが関の小野であったことから、鈴鹿関に関わりを持った人物であるとしている。また近世の地誌類にみえる若菜五郎の実名「盛高」は、同時代史料は確認できないとしている²⁴。

近世の地誌類以来、三日平氏の乱で若菜五郎が「小野」を拠点とし戦ったことを根拠に、小野城跡の遺構と若菜五郎を直ちに結びつけることには問題がある。川合康氏は、文献史料により想定できる中世前期の「城郭」の多くは、「館」を指すのではなく、堀や逆茂木による交通路遮断のためのバリエードのようなものであるとしている²⁵。川合氏の説によるならば、『吾妻鏡』にみえる若菜五郎の城郭が、東海道交通を遮断するための施設である可能性がある。

品 名 目	知 照 書	原 典 目	全 訳 目 録	川 原 氏 の 訳
巻四(一) (110頁) 注 11頁14行中	巻四のくち巻巻四の巻四のくち 巻四の巻四の巻四の巻四の巻四 巻四(巻四) 巻四			
巻五(一) (110頁) 注 11頁15行	巻五の巻五の巻五の巻五の巻五 巻五(巻五) 巻五			
巻六(一) (110頁) 注 11頁16行	巻六の巻六の巻六の巻六の巻六 巻六(巻六) 巻六			
巻七(一) (110頁) 注 11頁17行	巻七の巻七の巻七の巻七の巻七 巻七(巻七) 巻七			
巻八(一) (110頁) 注 11頁18行	巻八の巻八の巻八の巻八の巻八 巻八(巻八) 巻八			
巻九(一) (110頁) 注 11頁19行	巻九の巻九の巻九の巻九の巻九 巻九(巻九) 巻九			
巻十(一) (110頁) 注 11頁20行	巻十の巻十の巻十の巻十の巻十 巻十(巻十) 巻十			
巻十一(一) (110頁) 注 11頁21行	巻十一の巻十一の巻十一の巻十一の巻十一 巻十一(巻十一) 巻十一			
巻十二(一) (110頁) 注 11頁22行	巻十二の巻十二の巻十二の巻十二の巻十二 巻十二(巻十二) 巻十二			
巻十三(一) (110頁) 注 11頁23行	巻十三の巻十三の巻十三の巻十三の巻十三 巻十三(巻十三) 巻十三			
巻十四(一) (110頁) 注 11頁24行	巻十四の巻十四の巻十四の巻十四の巻十四 巻十四(巻十四) 巻十四			
巻十五(一) (110頁) 注 11頁25行	巻十五の巻十五の巻十五の巻十五の巻十五 巻十五(巻十五) 巻十五			
巻十六(一) (110頁) 注 11頁26行	巻十六の巻十六の巻十六の巻十六の巻十六 巻十六(巻十六) 巻十六			
巻十七(一) (110頁) 注 11頁27行	巻十七の巻十七の巻十七の巻十七の巻十七 巻十七(巻十七) 巻十七			
巻十八(一) (110頁) 注 11頁28行	巻十八の巻十八の巻十八の巻十八の巻十八 巻十八(巻十八) 巻十八			
巻十九(一) (110頁) 注 11頁29行	巻十九の巻十九の巻十九の巻十九の巻十九 巻十九(巻十九) 巻十九			
巻二十(一) (110頁) 注 11頁30行	巻二十の巻二十の巻二十の巻二十の巻二十 巻二十(巻二十) 巻二十			
巻二十一(一) (110頁) 注 11頁31行	巻二十一の巻二十一の巻二十一の巻二十一の巻二十一 巻二十一(巻二十一) 巻二十一			
巻二十二(一) (110頁) 注 11頁32行	巻二十二の巻二十二の巻二十二の巻二十二の巻二十二 巻二十二(巻二十二) 巻二十二			
巻二十三(一) (110頁) 注 11頁33行	巻二十三の巻二十三の巻二十三の巻二十三の巻二十三 巻二十三(巻二十三) 巻二十三			
巻二十四(一) (110頁) 注 11頁34行	巻二十四の巻二十四の巻二十四の巻二十四の巻二十四 巻二十四(巻二十四) 巻二十四			
巻二十五(一) (110頁) 注 11頁35行	巻二十五の巻二十五の巻二十五の巻二十五の巻二十五 巻二十五(巻二十五) 巻二十五			
巻二十六(一) (110頁) 注 11頁36行	巻二十六の巻二十六の巻二十六の巻二十六の巻二十六 巻二十六(巻二十六) 巻二十六			
巻二十七(一) (110頁) 注 11頁37行	巻二十七の巻二十七の巻二十七の巻二十七の巻二十七 巻二十七(巻二十七) 巻二十七			
巻二十八(一) (110頁) 注 11頁38行	巻二十八の巻二十八の巻二十八の巻二十八の巻二十八 巻二十八(巻二十八) 巻二十八			
巻二十九(一) (110頁) 注 11頁39行	巻二十九の巻二十九の巻二十九の巻二十九の巻二十九 巻二十九(巻二十九) 巻二十九			
巻三十(一) (110頁) 注 11頁40行	巻三十の巻三十の巻三十の巻三十の巻三十 巻三十(巻三十) 巻三十			
巻三十一(一) (110頁) 注 11頁41行	巻三十一の巻三十一の巻三十一の巻三十一の巻三十一 巻三十一(巻三十一) 巻三十一			
巻三十二(一) (110頁) 注 11頁42行	巻三十二の巻三十二の巻三十二の巻三十二の巻三十二 巻三十二(巻三十二) 巻三十二			
巻三十三(一) (110頁) 注 11頁43行	巻三十三の巻三十三の巻三十三の巻三十三の巻三十三 巻三十三(巻三十三) 巻三十三			
巻三十四(一) (110頁) 注 11頁44行	巻三十四の巻三十四の巻三十四の巻三十四の巻三十四 巻三十四(巻三十四) 巻三十四			
巻三十五(一) (110頁) 注 11頁45行	巻三十五の巻三十五の巻三十五の巻三十五の巻三十五 巻三十五(巻三十五) 巻三十五			
巻三十六(一) (110頁) 注 11頁46行	巻三十六の巻三十六の巻三十六の巻三十六の巻三十六 巻三十六(巻三十六) 巻三十六			
巻三十七(一) (110頁) 注 11頁47行	巻三十七の巻三十七の巻三十七の巻三十七の巻三十七 巻三十七(巻三十七) 巻三十七			
巻三十八(一) (110頁) 注 11頁48行	巻三十八の巻三十八の巻三十八の巻三十八の巻三十八 巻三十八(巻三十八) 巻三十八			
巻三十九(一) (110頁) 注 11頁49行	巻三十九の巻三十九の巻三十九の巻三十九の巻三十九 巻三十九(巻三十九) 巻三十九			
巻四十(一) (110頁) 注 11頁50行	巻四十の巻四十の巻四十の巻四十の巻四十 巻四十(巻四十) 巻四十			
巻四十一(一) (110頁) 注 11頁51行	巻四十一の巻四十一の巻四十一の巻四十一の巻四十一 巻四十一(巻四十一) 巻四十一			
巻四十二(一) (110頁) 注 11頁52行	巻四十二の巻四十二の巻四十二の巻四十二の巻四十二 巻四十二(巻四十二) 巻四十二			
巻四十三(一) (110頁) 注 11頁53行	巻四十三の巻四十三の巻四十三の巻四十三の巻四十三 巻四十三(巻四十三) 巻四十三			
巻四十四(一) (110頁) 注 11頁54行	巻四十四の巻四十四の巻四十四の巻四十四の巻四十四 巻四十四(巻四十四) 巻四十四			
巻四十五(一) (110頁) 注 11頁55行	巻四十五の巻四十五の巻四十五の巻四十五の巻四十五 巻四十五(巻四十五) 巻四十五			
巻四十六(一) (110頁) 注 11頁56行	巻四十六の巻四十六の巻四十六の巻四十六の巻四十六 巻四十六(巻四十六) 巻四十六			
巻四十七(一) (110頁) 注 11頁57行	巻四十七の巻四十七の巻四十七の巻四十七の巻四十七 巻四十七(巻四十七) 巻四十七			
巻四十八(一) (110頁) 注 11頁58行	巻四十八の巻四十八の巻四十八の巻四十八の巻四十八 巻四十八(巻四十八) 巻四十八			
巻四十九(一) (110頁) 注 11頁59行	巻四十九の巻四十九の巻四十九の巻四十九の巻四十九 巻四十九(巻四十九) 巻四十九			
巻五十(一) (110頁) 注 11頁60行	巻五十の巻五十の巻五十の巻五十の巻五十 巻五十(巻五十) 巻五十			

第3表 三日平氏の乱関連記事(訳文)

品 名	品 名 漢 字	品 名 漢 字	品 名 漢 字	品 名 漢 字
品名1 (110品) 品名1(14)品	品名1(110品) 品名1(14)品	品名1(110品) 品名1(14)品	品名1(110品) 品名1(14)品	品名1(110品) 品名1(14)品
品名2 (110品) 品名2(14)品	品名2(110品) 品名2(14)品	品名2(110品) 品名2(14)品	品名2(110品) 品名2(14)品	品名2(110品) 品名2(14)品
品名3 (110品) 品名3(14)品	品名3(110品) 品名3(14)品	品名3(110品) 品名3(14)品	品名3(110品) 品名3(14)品	品名3(110品) 品名3(14)品
品名4 (110品) 品名4(14)品	品名4(110品) 品名4(14)品	品名4(110品) 品名4(14)品	品名4(110品) 品名4(14)品	品名4(110品) 品名4(14)品
品名5 (110品) 品名5(14)品	品名5(110品) 品名5(14)品	品名5(110品) 品名5(14)品	品名5(110品) 品名5(14)品	品名5(110品) 品名5(14)品
品名6 (110品) 品名6(14)品	品名6(110品) 品名6(14)品	品名6(110品) 品名6(14)品	品名6(110品) 品名6(14)品	品名6(110品) 品名6(14)品
品名7 (110品) 品名7(14)品	品名7(110品) 品名7(14)品	品名7(110品) 品名7(14)品	品名7(110品) 品名7(14)品	品名7(110品) 品名7(14)品
品名8 (110品) 品名8(14)品	品名8(110品) 品名8(14)品	品名8(110品) 品名8(14)品	品名8(110品) 品名8(14)品	品名8(110品) 品名8(14)品

第4表 三日平氏の乱関連記事（原文1）

一方、津市雲出島貫遺跡、川北城跡などでは、大規模な堀を備えた中世前期にさかのぼる「館」が確認されている。これらは中世前期の館であると考えられており、小野城跡がこのような館になる可能性もある。

小野城跡に残る遺構が川合氏の言うような交通遮断施設であるのか、中世前期の館であるのかは、発掘調査による検討が不可欠である。

3 中世後期の小野氏について

中世後期の史料にみえる小野氏は、その名からも小野城跡との関連が想起される。笠井賢治氏は、『端光寺文書』を検討し、関氏の有力被官で、「中間又三郎」などの被官人を持っており、身内には「ユウキリ」、「藤壺」などの女性がおり（女性名は『源氏物語』に因んだものか）、公方年貢など得分権化した諸職を集積し、独自の経済活動を行っていたとしている³⁾。小野城跡が中世後期のものならば、小野氏との関係が問題となり、主郭部分が小野氏の

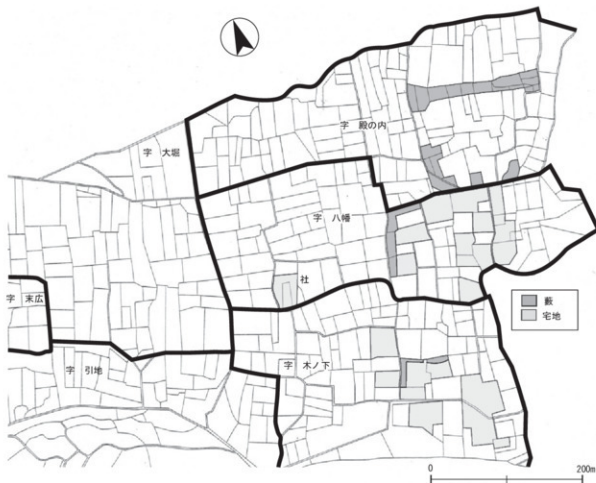
もの、周辺の区画が同名や被官の屋敷地という構造が想定できよう。

4 地籍図からみた小野城跡

亀山市教育委員会には、明治6年(1873)作成の地籍図が保管されている。笠井賢治氏はこの図と現地での地表面観察をもとに、①明治初期の小野集落は、段丘の南東側にあること、②字殿の内の北・西・南に「藪」とされる細長い地割が存在し、土塁の存在が想定できること、③集落内には「L字」状に折れる細長い地割や溜池が存在することを指摘している⁴⁾(第7図)。

山際文則氏は、地籍図の地番付与の順により、地籍調査の状況と土塁・堀などの障害物の存在を想定し、小野城跡第1次発掘調査の知見を踏まえた上で景観復元を行っている⁵⁾(第8図)。

笠井・山際両氏とも、城内に土塁や堀に囲まれた複数の区画の存在を提起しており、発掘調査では、その可否を実証する必要がある。



第7図 小野城跡周辺の地籍図(1:5,000)(註25より)

第3節 過去の発掘調査成果

小野城跡ではこれまで亀山市教育委員会により3度の発掘調査が行われている。調査の概略は次表の通りである。本節では、過去の発掘調査成果の概要を述べる。

1 第1次調査

第1次調査は平成元年（1989）に行われた¹⁶。掘立柱建物1棟、多数の区画溝、土坑、竈跡などを検出した。出土遺物には古代の須恵器蓋、中世前期の瓦器皿、山茶碗、陶器小皿（山皿）、陶器片口鉢、中世後期の土師器羽釜、常滑製品の片口鉢、近世の陶器・磁器が出土した。特に石組を持つ土坑内から出土した瀬戸美濃製品の志野向付は、17世紀初頭のもので、遺跡はこの時点まで存続していたとする。

この発掘調査での最大の成果は、単に発掘調査区内のみの検討にとどまらず、周辺の微地形の観察を行い、小野城跡が段丘端部の主郭のみから構成される城ではなく、字「オオホリ」までを一連の城として捉え、城域内に土塁や堀に囲まれた区画が存在する可能性を

指摘したことである。この指摘は前述した笠井・山際両氏の地籍図による検討にも影響を与えている。

小野城跡に関係する文献史料の集成も行っており、以後の小野城跡研究の基軸を設定するものであった。中世の東海道が、小野地内を通過する可能性も指摘している点も注目すべきである。

2 第2次調査

第2次調査は平成8・9年度に行われた¹⁷。古代・中世の多数の柱穴（大型で方形の掘形のものを含む）、道路跡、土坑、区画溝を検出し、土師器、須恵器、緑釉陶器、山茶碗、鉄滓が出土した。

3 第3次調査

第3次調査は平成14年度に行われた¹⁸。調査区が狭小であり、遺構の状況が把握しづらいものの、道路跡・土坑を確認し、須恵器、山茶碗、常滑製品の甕、青磁碗などが出土した。

（竹田憲治・勝山孝文）



第8図 実地踏査による復元図（1：5,000）（註16より）

次數	調査主体	調査原因	調査面積	調査地	調査期間
第1次	亀山市教育委員会	市道拡幅	1,490㎡	小野町字殿の内・八幡	1989.12.2～1989.12.20
第2次	亀山市教育委員会	市道拡幅	2,986.2㎡	小野町字大堀・八幡・木の下	1996.11.18～1997.6.13
第3次	亀山市教育委員会	市道拡幅	850㎡	小野町字八幡	2002.11.15～2003.2.28

第7表 過去の小野城跡の発掘調査一覧

第4節 旧地形図・航空写真・地籍図の検討

1 旧地形図

(1) 大日本帝國陸地測量部による地形図

(第9図)

図示したものは明治25年(1892)に測量が行われ、明治27年に製版した地形図である。これによると、小野城跡が立地する段丘が、関西鉄道の線路近くまで延びていることが観察できる。この尾根は、現在は消滅しているが、この東に延びる突端部分にも曲輪や堀切などの城の遺構が存在していた可能性が高い。

(2) 亀山市都市計画平面図(第10図)

図示したものは昭和47年に測量が行われ、昭和60年に修正が加えられた地形図である。これによると、明治期の地形図で確認できた東に延びる突端部がこの時点では完全に姿を消している。一般国道1号による開削や土取り、崩落によって、この突端部は消滅したと思われる。



第9図 大日本帝國陸地測量部による地形図
(1:20,000) 亀山

2 航空写真(写真図版1)

昭和22年～23年頃に米軍が撮影した航空写真である。これによると、東に延びる突端部は存在している。そして、東の突端部のつけねあたりに、東北部の平地から小野城跡の所在する段丘に向けて、尾根づたいに登ってくる道が確認できる。また、現在、小野集落の北部で東西方向の大規模な土塁が確認できるが、この写真からは、それが西側にかけてかなり長い範囲にわたって存在していたことが確認できる。さらに、城跡西側には、南北方向に延びる大規模な土塁と堀が確認できる。

3 地籍図の検討(第11図)

地籍図に関しては、第3章で述べた笠井賢治氏、山際文則氏の成果があるが、それを踏まえた上で検討を加える。まず笠井氏は、宇殿の内の①の部分に東西方向の細長い地割が存在し、その地割は②で南に折れ、③で東に折れ、④に続くことから、これを

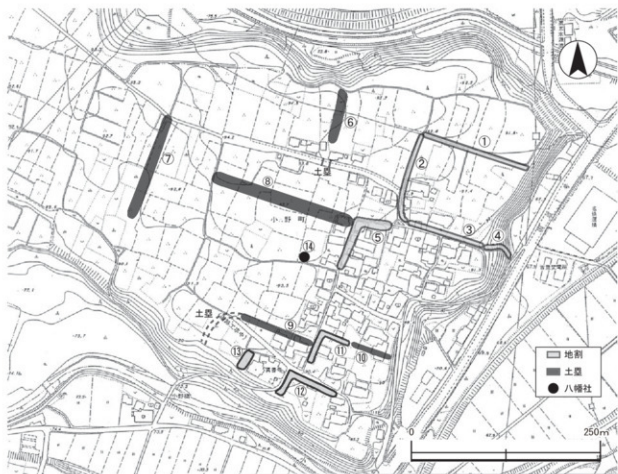


第10図 亀山市都市計画平面図 (1:5,000)

主郭の土塁とする。また、西の⑥の部分には、「L字」形の地割があり、この部分にも土塁が想定できるとする。

山際氏は、地籍図の地番付与の順と第1次調査の知見から、⑥・⑦・⑧・⑩・⑪の地点に土塁もしくは堀の存在を想定する。

両氏の検討により、小野城跡内の基本的な区画のラインはほぼ明らかになっている。城域の南部では、細長い地割（⑪・⑫・⑬）を何ヶ所か確認できる。これらの地割がどこまで遡るのかは明らかではないが、小規模な土塁が存在した可能性も想定しておく。



第11図 地籍図の検討成果図（1：5,000）

第5節 地表面観察・事前調査

1 城郭調査・事前測量

古墳や城跡など、地表に遺構が露出している遺跡では、発掘調査の事前に地表面を観察し、土塁や堀、斜面の状況を確認しておく必要がある。

三重県埋蔵文化財センターでは発掘調査前の平成19年4月26日に亀山市教育委員会の協力を得て城跡全域の地表面観察を行い（第12図）、平成19年9月から平成20年1月に事業地内の事前測量を行った（第13図・第14図）。

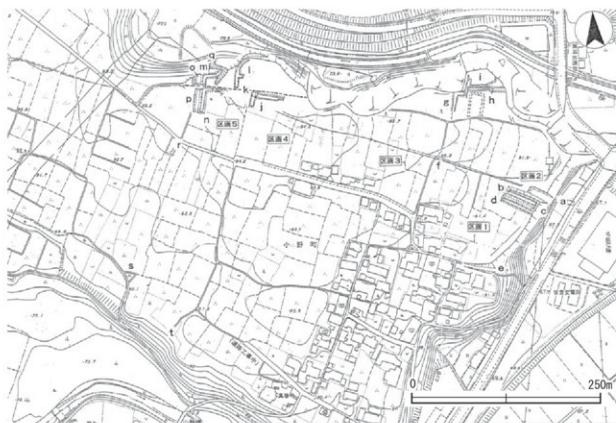
区画1 城跡の中心は、段丘端部の区画1である。区画の北側には幅10m、深さ3.5～4.0mの堀aがある。堀の東側は道により壊されているが、東側斜面には堀の痕跡があり、堀aは斜面に向けて東に伸びていた可能性が高い。堀aの南には上端幅2.0m、下端幅8.0m、高さ1.8mの土塁bがある。土塁bの南側は一段低くなっており、この部分が犬走りである可能性がある。土塁bの南には幅4.0～5.0m、深さ1.5mの堀cが、さらに南には上端幅1.0m、下端

幅4.0m、高さ1.1mの土塁dがある。土塁b・d、堀cは、斜面に当たる部分が道により壊されているが、南に折れるような痕跡はみられず、東側は開口していた可能性が高い。区画1の南には、段丘崖を下る道eがある。この道が堀の痕跡であった可能性がある。

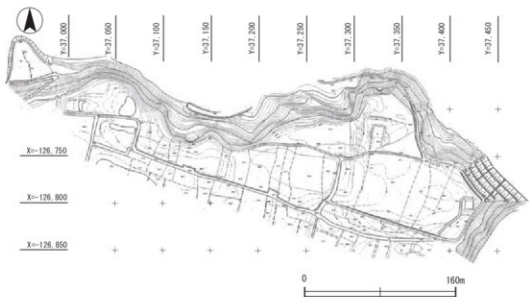
前節の地籍図・航空写真の検討結果でも述べたように、堀a・c、土塁b・dとも西に伸び、f地点まで続いていた可能性が高い。さらに地籍図で確認できた集落内の③地点、④地点の土塁痕跡により、区画1は西・南・北の三方に土塁を持つ方形であった可能性が高い。

区画2 区画1の北には、区画2がある。現状では、この地点は台地の先端になっているが、前節の旧地形図の検討で、台地がさらに東に伸びていたことが確認できている。

この区画の南半は茶畑となっており、地表面観察で旧状を知ることはできない。北半部には土塁g・



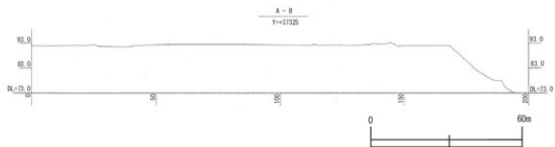
第12図 区画图 (1:5,000)



第13図 発掘調査前 地形図 (1 : 4,000)



第14図 発掘調査前 遺構図 (1 : 4,000)



第15図 発掘調査前 横断面 (1 : 1,500)

hに囲まれた区画がある。土塁gは土塁bほどではないものの、幅5.0m、高さ2.5mの大規模なもので、さらに南に延びる可能性がある。土塁hや堀iは区画内をさらに画するためのものと考えられる。

区画2からは、段丘崖を下り桜川を渡って朝明山に向う道がある。

区画3・4 区画2の西から土塁jまでの間も茶畑となっており、旧状を知ることはできない。ただし地籍図からは④地点に土塁か堀の痕跡と思われる細長い地割がある。そこで④地点の東を区画3、西を区画4としておく、区画4の西には幅3.0m、高さ2.5mの土塁jがある。この土塁の規模は区画2の土塁gに似たものである。土塁jは道kに沿って東に折れている。道kの北には土塁lがある。

区画5 区画4の西にはやや規模が小さな区画5がある。区画の西から北にかけては幅2.5m、高さ1.2mの土塁m、幅3.0m、高さ1.8mの土塁n、幅10m、深さ3.0mの堀o・p、幅7.5m、深さ1.8mの堀qがある。ただし堀qは段丘崖を下る道になるかもしれない。

土塁mは土塁jと同様に道kに沿って東に折れる。堀o・p間の道kは土橋となっている。この部分の土塁・堀は非常に大規模であり、城域の虎口である可能性がある。

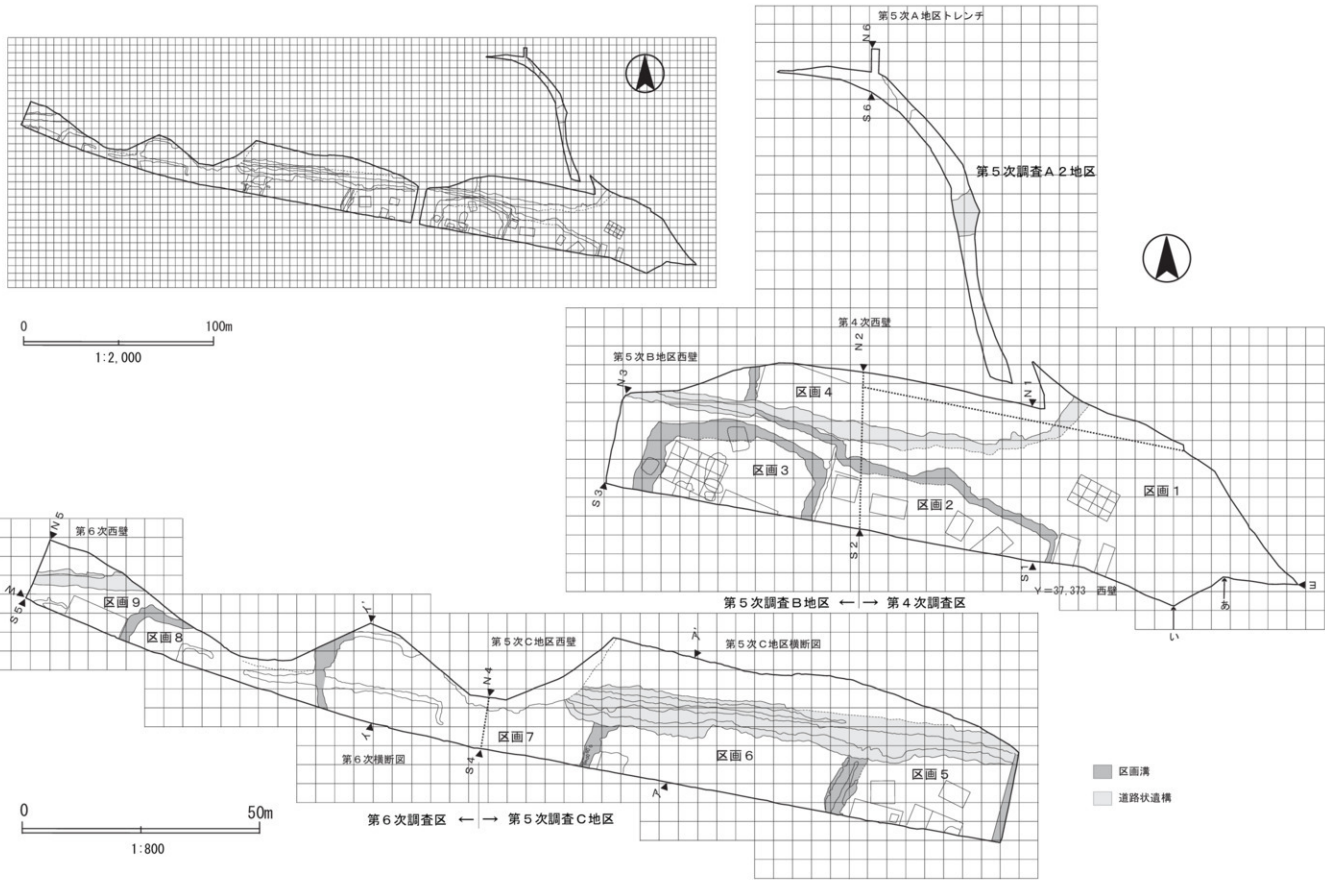
城域南部 台地の南半部は、北半部よりさらに耕地化が進み、残存状況が悪い。会下集落から、小野集落に向う道は、r地点で折れる。地籍図からは、④地点付近には土塁か堀の痕跡と思われる細長い地割りが確認できる。またs地点には土塁痕跡の可能性がある高まりがある。これらを総合すると、土塁m・n、堀o・pと⑦地点、s地点を結ぶ大土塁・大堀があった可能性がある。やや東に向ったt地点には、土塁の痕跡らしい高まりがある。この地点は土塁jに関連する可能性がある。

周辺斜面 城域は河岸段丘上にあり、東・南・北は段丘崖に囲まれている。城が機能していた時期には、これらの斜面には切岸が施されていた可能性があるが、東斜面の北半部では土取りが行われ、北斜面では桜川の浸食に伴う大規模な崩落が起こり、旧状を知ることができない。

(長谷川哲也・竹田憲治)

註

- 『九々五集』（亀山市教育委員会、1986年）
- 『定本三國地志』（上古古文献刊行会、1987年）
- 『伊勢国誌』（三重県郷土資料刊行会、1972年）
- 『勢陽五鈴遺響』（三重県郷土資料刊行会、1976年）
- 『稲田清砂氏所蔵文書』（亀山市歴史博物館ホームページ内亀山市史編纂による）
- 『勢国見聞集』（『松阪市史』第8巻 史料編 地誌1、1979年）
- 『伊勢一國旧城跡附』（三重県郷土資料刊行会、1975年）
- 『伊勢名勝志』（明治22年、1974年三重県郷土資料刊行会から復刊）
- 『神辺小学校 郷土教育資料』三（三重県立図書館蔵）
- 『神辺小学校 郷土資料』一・五（三重県立図書館蔵）
- 『大日本国誌 伊勢国』第4巻（ゆまに書房、1989年）
- 『鈴鹿郡野史』（大正15年、1973年名著出版から復刊）
- 山田本水『亀山地方郷土史』第一巻（三重県郷土資料刊行会、1970年）
- 前掲『亀山地方郷土史』第一巻による。
- 前掲『亀山地方郷土史』第一巻による。
- 『亀山市文化財調査報告7 小野城跡』（亀山市教育委員会、1991年）
- 『日本古代道路事典』古代交通研究会編（八木書店、2004年）
- 藤本利治『伊勢国』（藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅰ』大明堂、1978年）、足利健亮『平安京から伊勢神宮への古代の道』（上田正昭編『探訪 古代の道 第二巻』法蔵館、1988年）、山中章『鈴鹿関と三関～聖武天皇と鈴鹿関～』（三重大学人文学部考古学研究室 伊勢湾・熊野地域研究センター、2006年）
- 八賀晋『伊勢国鈴鹿関に関する基礎的研究 研究成果報告書』1992年
- 前掲の藤本氏および足利氏論文による。
- 川合康『源平合戦の虚像を剥く』（講談社、2005年）
- 『四日市市史』第16巻 中世編 第一章 第三節（四日市市、1995年）
- 前掲『四日市市史』第16巻 中世編 第一章 第三節による。
- 川合氏前掲書による。
- 笠井賢治『中世鈴鹿郡の小領主の一事例 ―小野城跡と小野氏について―』（『伊勢の中世』第63号、伊勢中世史研究会、2001年）
- 笠井氏前掲論文による。
- 山藤文則『地籍図を利用した歴史的景観の復元―特に地番に着目して―』（『伊勢の中世』第103号、伊勢中世史研究会、2004年）
- 『平成9年度 三重県埋蔵文化財年報』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）
- 『平成14年度 三重県埋蔵文化財年報』（三重県埋蔵文化財センター、2003年）



第16図 遺構配置図

第4章 検出した遺構

第1節 基本層序

調査区の基本層序は、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：耕作土、第Ⅲ層：黒色土、第Ⅳ層：地山である黄橙色粘質土である。第Ⅳ層は全体に見られるのではなく、その下層である第Ⅴ層：黄橙色砂礫層が見られるところもある。この砂礫層は中位段丘を形成する層であり、第Ⅳ層はその上部に堆積したものである。

第Ⅰ層・第Ⅱ層は、調査区が茶畑として利用されていたため、区別できないところも多い。第Ⅲ層は第Ⅳ層が土壌化した、いわゆる黒ボクであり、南部を中心に広がる。第Ⅲ層は削平によりまったく見られないところもあり、安定しない。小野城跡と同一丘陵で、西部に位置する会下地区では、始良・丹沢火山灰が確認されており¹、黒ボク土壌の形成はその影響によるものと考えられる。

遺構は第Ⅲ層上面から切り込まれているが、第Ⅲ層が全面に見られないこと、場所によって第Ⅲ層と遺構埋土の区別が困難であることから、第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面で遺構検出を行ったところもある。第5次調査B地区南部においては、黒ボクの大半を削り込んで検出しており、遺構上面を削りこんでしまったため、遺構外で多数の遺物を取り上げている。そ

の中には比較的破損の少ない遺物が含まれており、本来はいずれかの遺構に伴うものであったと考えられる。また、C地区は南東部で黒ボクが見られるものの大半が表土直下でⅣ・Ⅴ層となる。立木部分であった一段高い北西部で黒ボクが見られることから、本来の地盤はこの高さに近いのではないかと考えられる。およそ0.3～0.4mの削平が推定される。

遺構検出面（第Ⅲ層上面及び第Ⅳ・Ⅴ層上面）の標高は、第4次調査区西部では91.4m、中央部では92.2m、第5次調査B地区西端で93.2m、C地区は93.6m、第6次調査区は94.0mである。

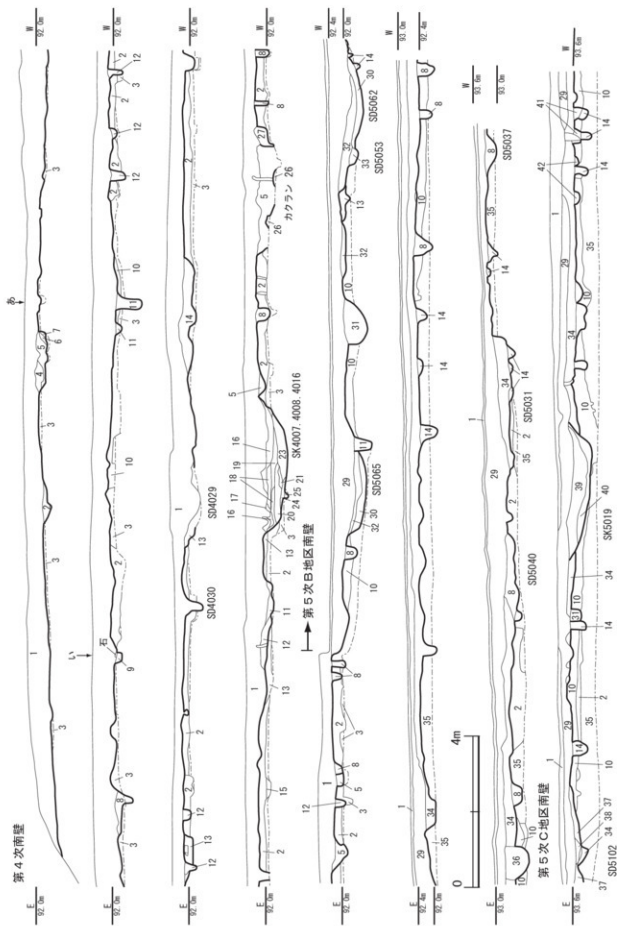
溝等の大きな規模の遺構では、埋土の大半が耕作土と考えられる遺構が見られた。これは、遺構が掘削された後埋められることなく放置（利用？）され、畑として利用される際に埋まったためと考えられる。そのため、第5・6次調査では明らかに攪乱と考えられるもの以外は、耕作土が埋土となっているものについても、基本的に遺構として取り扱っている。第4次調査では攪乱として扱った遺構もあるが、明らかに遺構と考えられるものについては、遺構に変更した。

第2節 古代の遺構

今回の調査では、縄文時代早期からの遺物が出土しているが、古代以前と考えられる遺構は古代の堅穴住居が1棟検出されたのみで、それ以前の遺構は確認されなかった。

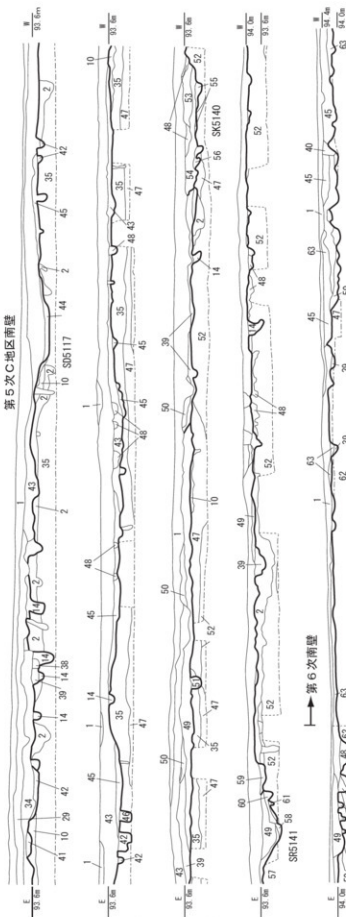
堅穴住居 S H 5074（第26図） 第5次調査B地区西部で検出した遺構である。表土掘削時にすでに横たわった状態で土管状土製品が見つかったため、本来よりも上部は削平された状態であると考えられる。土管状土製品は、黒色土に埋設する形で見つかったが、黒色土上では遺構の切込みが判断できなかった。また、黒色土を掘り込んでしまったため、遺物取り上げ時には上部の土器片は取り除いた状態

となっている。S H 5074では、柱穴や壁周溝、竈などは確認できなかった。S D 5044により削平されているため正確な規模は不明であるが、東西4.5m、南北5.0mを測り、残存する深さは0.05～0.1m程度である。土管状土製品は、東辺中央部で4個体が重なって出土している。いずれも口縁部を西側（S H 5074側）に向け、口縁部の中に底部を入れ込む形であった。周囲は炭化物・焼土が少量見られることから、煙道であった可能性が考えられるが、土管状土製品はS H 5074の中央部から東に向かって並んでおり、疑問も残る。



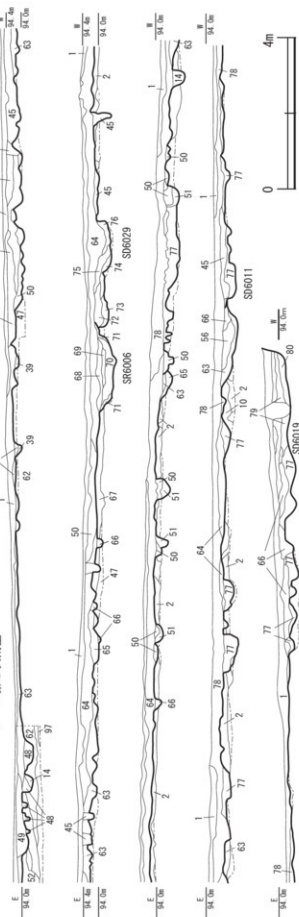
第17图 第4次南壁、第5次B・C地区南壁土層断面图 (1:100)

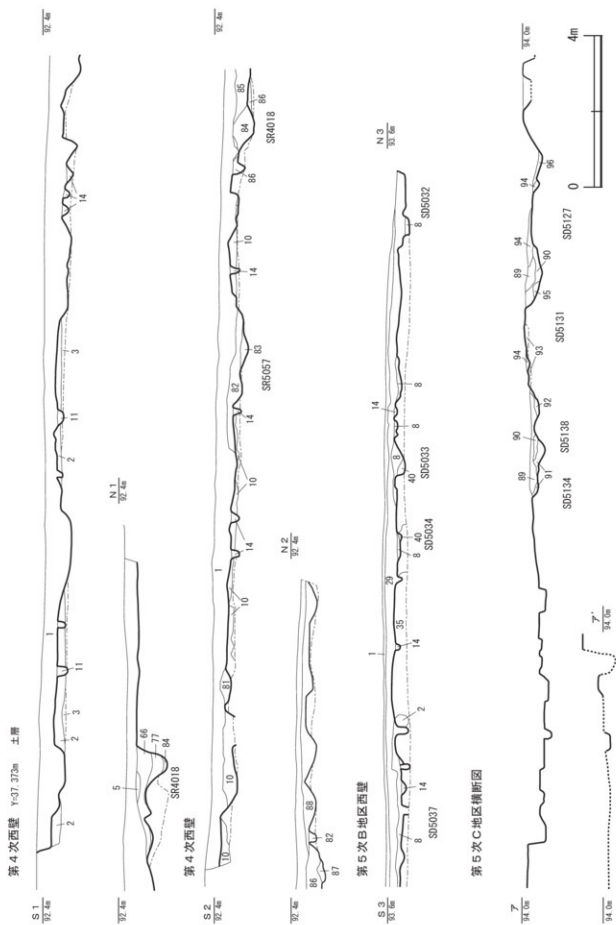
第5次C地区南壁



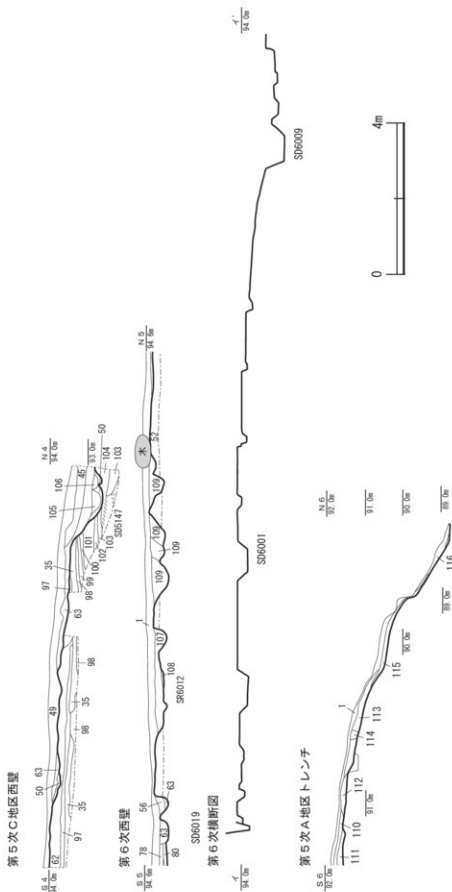
第5次C地区南壁 第6次南壁土层断面图 (1:100)

第6次南壁





第19图 第4次西壁、第5次B地区西壁、第5次C地区中央土層断面图 (1:100)



第20図 第5次C地区西壁、第5次A地区トレンチ、第6次西壁、第6次横断面図 (1:100)

- 1 5YR3/2 暗赤褐色土 (表土)
- 2 5YR2/1 黒褐色土 (黒ボク)
- 3 7.5YR8/6 黄褐色土 (地山)
- 4 5YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
- 5 5YR4/2 灰褐色土
- 6 5YR4/2 灰褐色土 (地山ブロックわずかに含む)
- 7 5YR4/2 灰褐色土
- 8 5YR3/1 黒褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 9 5YR3/1 黒褐色土
- 10 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (地山ブロック含む)
- 11 5YR3/1 黒褐色土
- 12 5YR3/2 暗赤褐色土 (地山ブロック含む)
- 13 5YR1.7/1 黒色土 (細かい地山ブロック含む)
- 14 5YR3/1 黒褐色粘質土 (12混、地山ブロック多く含む)
- 15 5YR3/2 暗赤褐色土 (風倒木)
- 16 7.5YR2/2 黒褐色土 (7.5YR5/4 にぶい褐色土ブロックを含む)
- 17 7.5YR2/2 黒褐色土 (7.5YR5/4 にぶい褐色土ブロックを多く含む)
- 18 7.5YR7/6 棕色土 (7.5YR2/2 黒褐色土ブロック含む、よくしまる)
- 19 5YR2/1 黒褐色土 (7.5YR7/6 棕色粘土ブロックをわずかに含む)
- 20 7.5YR3/1 黒褐色土 (7.5YR7/6 棕色粘土ブロック含む)
- 21 7.5YR7/6 棕色土
- 22 7.5YR4/1 褐灰色土 (7.5YR8/6 浅黄褐色土ブロック含む)
- 23 7.5YR3/1 黒褐色土 (7.5YR8/6 浅黄褐色土ブロック含む)
- 24 7.5YR2/1 黒色土 (7.5YR7/6 棕色ブロック土わずかに含む)
- 25 5YR3/1 黒褐色土 (7.5YR8/6 黄褐色土混じる)
- 26 5YR5/2 灰褐色土 (風倒木)
- 27 5YR5/3 にぶい赤褐色土
- 28 5YR4/2 灰褐色土
- 29 5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック含む、耕作土)
- 30 5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック多く含む)
- 31 5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック、29・30をブロック状に含む)
- 32 7.5YR4/3 褐色礫混砂質土 (地山ブロック少量含む)
- 33 7.5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック少量含む、礫多く含む)
- 34 5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック少量含む、しまりあり)
- 35 7.5YR7/6 棕色礫～粗砂 (地山)
- 36 攪乱
- 37 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 38 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
- 39 7.5YR4/1 灰褐色粘質土
- 40 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 41 10YR2/1 黒色粘質土
- 42 34と2の混土
- 43 7.5YR3/1 黒褐色礫混粘質土
- 44 43に地山ブロック多く含む
- 45 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (地山ブロック多く含む、よくしまる)
- 46 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (地山の礫を多く含む)
- 47 10YR6/6 明黄褐色シルト (地山)
- 48 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (地山ブロック少量含む、生痕か)
- 49 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (地山ブロック含む)
- 50 10YR4/2 灰黄褐色礫混砂質土
- 51 地山ブロック多く含む61
- 52 礫層
- 53 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭少量含む)
- 54 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (炭を多く含む)
- 55 7.5YR6/6 棕色粘質土 (炭を含む、粘床)
- 56 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
- 57 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 58 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
- 59 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (地山ブロック含む)
- 60 7.5YR4/1 灰褐色粘質土 (地山ブロック含む、よくしまる)
- 61 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (地山ブロック含む、よくしまる)
- 62 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 63 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 64 63よりやや砂質
- 65 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 66 地山ブロック大を含む65
- 67 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 68 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 69 10YR4/4 褐色粘質土
- 70 地山ブロック含む69
- 71 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (地山ブロック多く含む)
- 72 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (地山ブロック多く含む)
- 73 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 74 7.5YR4/3 褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 75 7.5YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 76 7.5YR4/3 褐色砂質土 (地山ブロック多く含む)
- 77 10YR3/1 黒褐色粘質土 (地山ブロック多く含む)
- 78 10YR4/1 褐灰色礫混粘質土
- 79 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 80 7.5YR5/4 褐色礫多く混じる砂質土
- 81 5YR7/6 棕色土 (5YR5/3 にぶい赤褐色土混)
- 82 5YR4/1 褐灰色土 (地山ブロックわずかに含む)
- 83 5YR4/1 褐灰色土 (地山ブロック多く含む)
- 84 7.5YR4/1 褐灰色土
- 85 5YR6/3 にぶい棕色土
- 86 7.5YR5/3 にぶい褐色土
- 87 7.5YR4/3 にぶい棕色土 (小礫多く含む、よくしまる)
- 88 5YR4/1 褐灰色土 (地山ブロック多く含む)
- 89 7.5YR4/2 灰褐色砂質土 (根を多く含む)
- 90 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
- 91 7.5YR4/2 灰褐色粗砂混砂質土
- 92 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 93 7.5YR5/6 明褐色礫混粘質土
- 94 7.5YR4/3 褐色粘質土
- 95 7.5YR7/8 黄褐色礫混粘質土 (地山)
- 96 攪乱
- 97 10YR6/6 明黄褐色細砂
- 98 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 99 10YR6/6 明黄褐色細砂質シルト
- 100 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 101 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂～中粒砂 (ラミナ)
- 102 10YR6/6 明黄褐色中粒砂
- 103 10YR6/6 黄褐色シルト
- 104 砂礫層と103のラミナ
- 105 7.5YR5/6 黄褐色シルト
- 106 地山ブロック含む63
- 107 7.5YR4/3 褐色砂質土
- 108 7.5YR4/3 褐色砂質土 (礫含む、よくしまる)
- 109 10YR5/4 にぶい黄褐色礫混粘質土
- 110 10YR4/2 灰黄褐色礫少混粘質土
- 111 10YR6/6 明黄褐色礫混粘質土 (しまりなし)
- 112 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土 (しまりなし)
- 113 10YR5/4 にぶい黄褐色礫多混砂質土 (しまりなし)
- 114 113よりしまりのない同質土
- 115 7.5YR6/6 棕色礫少混粘質土 (しまりなし)
- 116 10YR6/6 明黄褐色粘質土 (地山)

第3節 中世以降の遺構

検出した中世の遺構には、道路状遺構、掘立柱建物、土坑、溝などがある。以下、主なものについて述べる。なお、遺物の編年については、第V章のとおりである。

1 道路状遺構

道路状遺構は、調査区北部で確認された東西方向のものと、そこから派生したと考えられる南北方向のものがある。

SR4018 第4次調査区・第5次調査区A2地区・B地区・C地区で東西約200m以上の長さで検出した遺構である。当初は、上層埋土が耕作土であるため、攪乱と考えていたが、付属する側溝や硬化面、波板状凹凸遺構が確認されたため、道路状遺構とした。SR4018については、削平が著しく、攪乱されている。また、部分的に改修や掘り直しのためか深さが一定しないところもあり、複数の遺構名を付与している。東側より述べていく。

SR5010 (第27図) 第5次調査区A2地区で検出した道路状遺構である。SR4018から続く溝状に掘り下げた遺構で、北側は現在の水道管があるため掘削できなかったが、北に向かつて深くなることが確認できた。丘陵斜面を昇降する道路と考えられる。南では幅1.5m、深さ0.6m、北では幅は攪乱により不明であるが深さ約1.6mである。溝の底部には厚さ0.1m程の砂利が敷かれた硬化面が残存しているが、斜面に位置するため大部分は流失している。

第4次調査区東部 (第22図) 第4次調査区東部では、北側が攪乱溝により削平されており不明瞭であるが、幅約3.0m、深さ約0.6mの溝状遺構として検出されている。

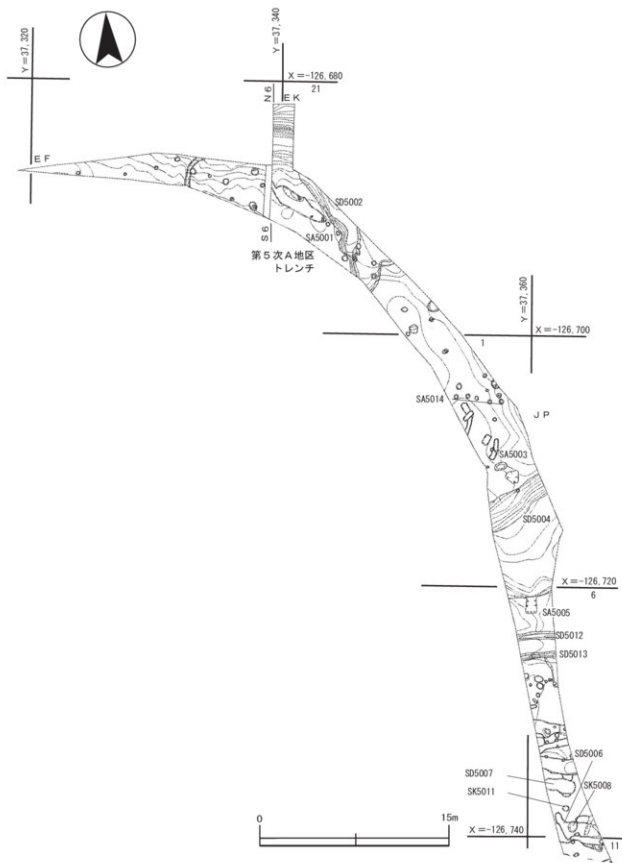
第4次調査区西部 (第23図) 幅約3.6~4.0m、深さ約0.7mの溝状遺構として検出される。南側には深さ約0.15m、北側には深さ約0.1mの側溝があり、底部は幅1.5~2.0mの平坦面が造られている。この部分を道路として利用していたと考えられる。南端ではSD4013・4014が検出され、底部では波板状凹凸遺構が確認されている。第5次調査区B地区のSR5058は同じ遺構である。

SD4013・4014 (第28図) 第4次調査区の西端で検出した遺構である。共に幅約0.3m、深さ約0.2mの細い溝で、SR4018の南端に沿って検出された。SD4013とSD4014は、約2.0m途切れており、南側に折れ曲がるように検出されたことから、出入口と考えられる。また、両者とも溝底は小穴が並んで検出されており、櫛か生垣のようなものがあつた可能性も考えられる。

波板状凹凸遺構 (第29図) 第4次調査区で検出された。西側は後世の攪乱により確認できないが、長さ0.5~0.6m、幅0.2mの不整形の小穴が4~5個、0.3~0.5m間隔で並んでおり、波板状凹凸遺構と考えられる。これらは、地山である砂礫層上で検出されており、明確な掘り込みを持たず、圧痕として確認された。

第5次調査B地区 (第23図) SD5032とSR5058としている。SR5058はSD5032が1段深くなり、SR4018と接続するところである。側溝がSR5058の周囲を巡って一続きとなっており、SD5032へと続かないことから、再掘削されたと考えられる。SD5032は幅約3.0m、深さ約0.1mの幅広い浅い落ち込み状を呈し、側溝などは見られない。調査は工程上第4次調査からの続きではなく西側から行ったため、SR4018と接続するか不明であったことから、SD5032として道路状遺構を掘削している。また、当初耕作土が埋土であったため、攪乱である可能性も考え、深くなる部分についても一連のものとして掘削してしまっている。そのため、最終的に埋没した時期はSD5032が一番新しいのは明らかなものの、掘り直しや区画溝との切り合い関係などは確認できなかった。SD5032は、区画溝と考えられるSD5051やSD5040などを切り込んでおり、埋没時期は新しいが、埋土は耕作土と同様で、近世以降の遺物も含んでいることから、近世以降まで利用、または放置されていたものと思われる。

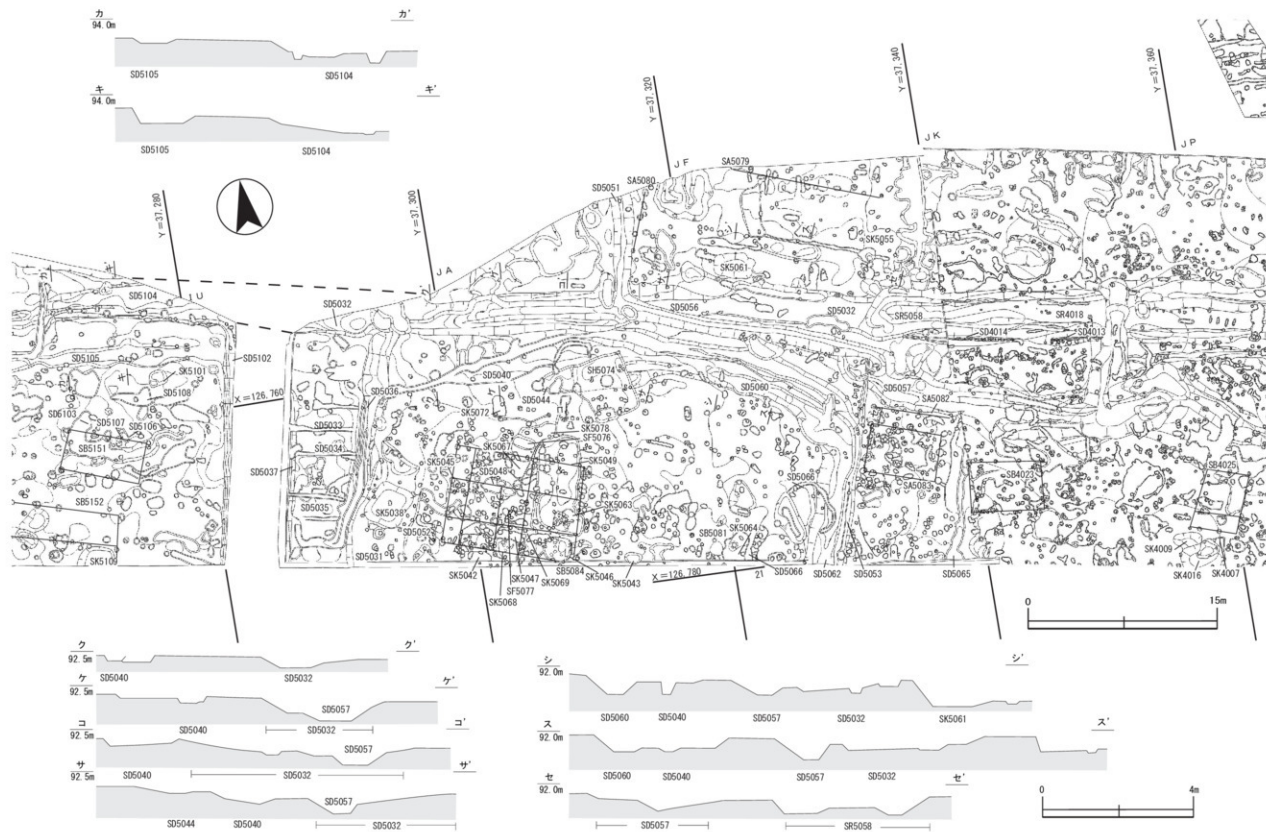
第5次調査C地区東部 (第23・24図) C地区東部(JKまで)では、SD5104とその南側で幅約1.5m、深さ約0.3mの溝状遺構であるSD5105を検



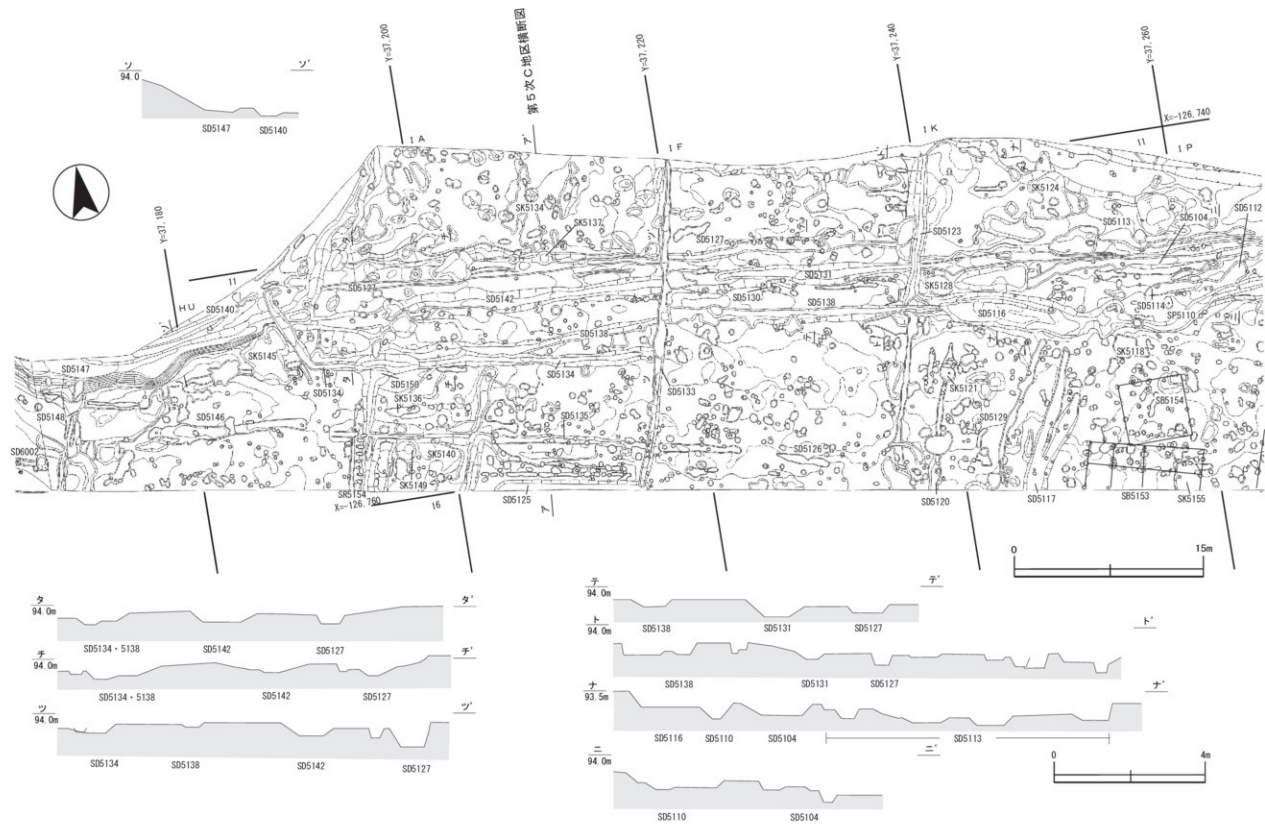
第21図 第5次A地区遺構平面図 (1 : 300)



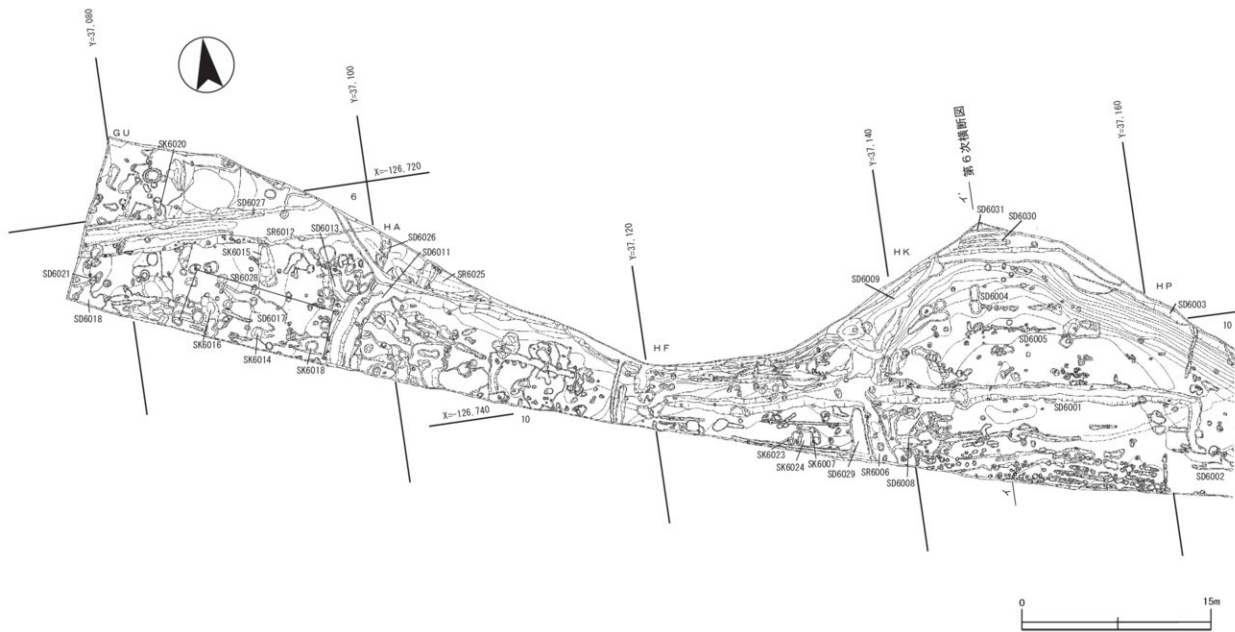
第22図 第4次、第5次A1地区遺構平面図(1:300) 断面図(1:100)



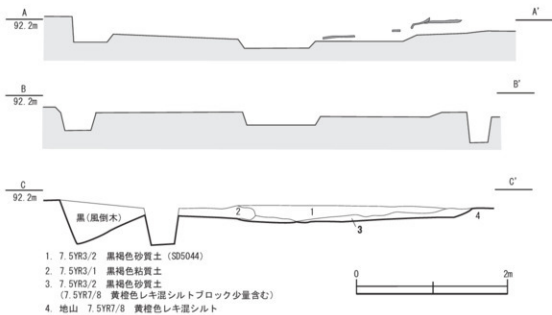
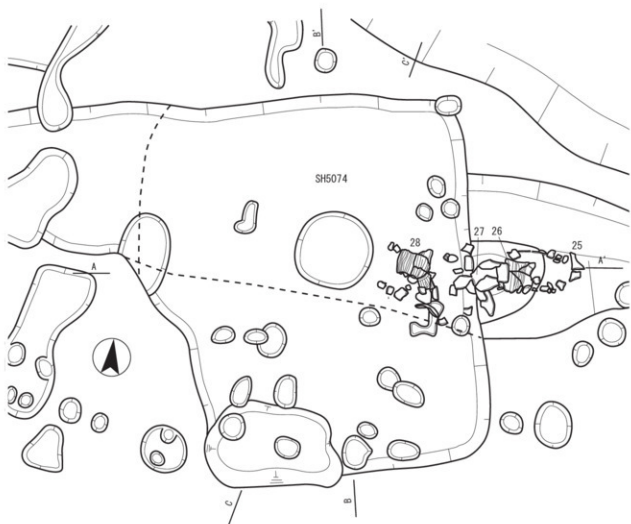
第23図 第4次、第5次B・C地区遺構平面図（1：300） 断面図（1：100）



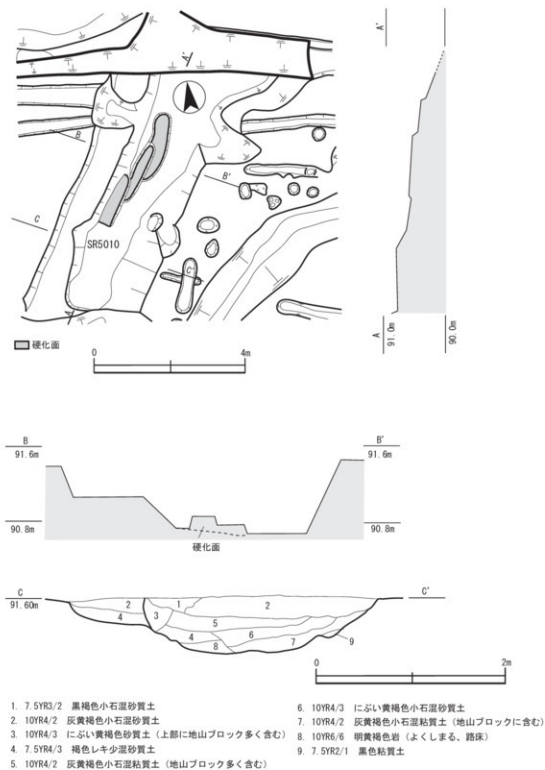
第24図 第5次C地区、第6次遺構平面図 (1 : 300) 断面図 (1 : 100)



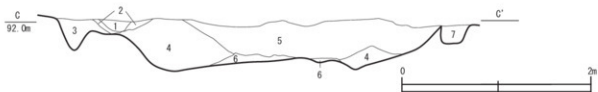
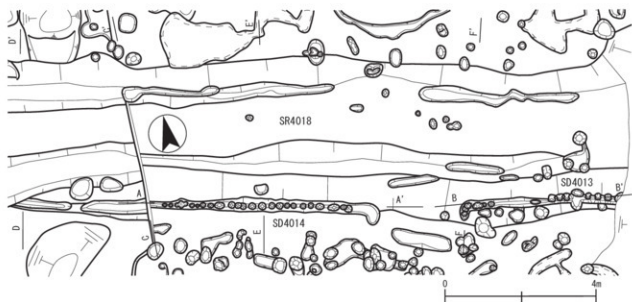
第25図 第6次遺構平面図 (1 : 300)



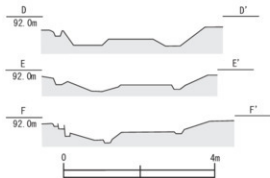
第26図 SH5074 遺物出土状況図・断面図 (1 : 50)



第27図 SR5010 平面図・断面図 (A-A' 1:100) 断面図 (1:40)



1. 表土
2. 5YR6/3にぶい橙色土
3. 7. 5YR4/1褐灰色土、シマリなし
4. 7. 5YR5/3にぶい褐色土 (SR4018埋土)
5. 5YR4/2灰褐色土シマリなし (耕作土)
6. 7. 5YR6/4にぶい橙色土 (小レキ多く含む。硬化面)
7. 5YR4/1灰褐色土



第28図 SD4013・4014、SR4018 平面図 (1:100) 断面図A~C (1:40) 断面図D~F (1:100)

出した。S D5104は北側を削平されており、調査区東端ではS D5032と類似する幅広い落ち込み状を呈するが、北側が擾乱されているため明らかではないが、10mほど西からは、幅約0.8m、深さ約0.2m程度の側溝状となる。S D5105との間は幅約2.0～2.5m程度で平坦であり、この部分が道路状遺構と考えられる。S D5105はJ P付近で切り合い関係の不明なS D5112と重なり南へ蛇行する。このため、それより西についてはS D5110とした。J P付近では溝の間隔は最も離れて約4.8mとなり、J KラインまでS D5110は蛇行して両溝は接近し、幅約3.0mとなる。

第5次調査C地区中央部（第24図） S D5123以西では、北側に新たに幅0.8～1.2m、深さ0.2mのS D5127がある。S D5123は西側がテラス状になっており、そのテラス部とS D5127が接続する可能性があるが、後世の遺構により不明である。またS D5104の延長をS D5131、S D5110の延長を新たにS D5138として調査を行った。S D5131は幅0.9m、深さ0.1～0.3mで、S D5127とS D5131間は約1.5mである。S D5138は幅0.8m、深さ0.3mで、S D5131とS D5127の間は約2.0mである。どちらの間も第V層である砂礫層であり、非常に硬化している。S D5131とS D5142は途切れ、約1.8mの空間地がある。出入りが想定される。

第5次調査C地区西部（第24図） S D5133以西では、S D5138の南側で新たにS D5134が検出された。S D5133から分岐する溝の可能性はあるが、切り合い関係は不明である。S D5134は切り合いからS D5138より新しい溝である。S D5127とS D5142の間は約1.0～1.5m、S D5142とS D5138の間は約2.0mである。これら道路状遺構は、S D5147に向かい不明となる。なお、S D5127はJ Eより西では立木があり一段高くなる所との境を走る。この部分は、高いものの黒ボクが見られ、本来の地表面はこの高さ以上であったと思われる。0.2m以上の削平がされていると推測される。

その他の道路状遺構

S R5141（第30図） C地区中央南部で検出した遺構である。西側はS D5150により削平されている。波板状凹凸遺構、硬化面、側溝を確認した。溝状に掘削されており、幅1.4m以上、深さ約0.3mである。

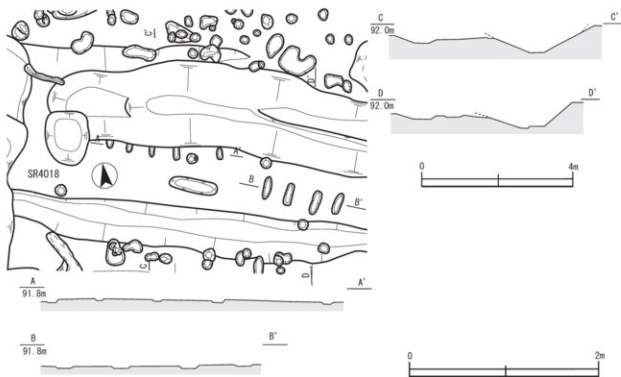
硬化面は部分的に2面確認された。上層・下層の硬化面とも全体には見られず、上層との関係は確認できていないが、波板状凹凸遺構は下層の硬化面に切り込んで検出された。波板状凹凸遺構は長さ0.4～0.6m、幅0.3m程度の楕円形を呈し、0.3m間隔で平行して並ぶ。深さは0.1～0.4mほどである。埋土は砂利や小石であるが、明確な掘り込みは無く、圧痕として検出されている。地山は粘質の軟弱な地山であり、硬化面を敷設する必要があったと考えられる。側溝は幅0.4m、深さ0.2mを測るが、溝の西端にあり、排水の役割は果たしていない。

S R6012（第31図） 第6次調査区西部で検出した東西方向の遺構である。幅約2.8m、深さは西側で0.2m、東端で0.3mとなる溝状を呈する。西部では北側に幅0.6m、深さ0.2m、南に幅1.2m、深さ0.1mの側溝があり、その間の幅約1.0mには砂利が敷かれて硬化面となっている。東側では硬化面ははつきりしないが、底が礫層になって硬く締まっているため、そもそも硬化面が造られなかったものと考えられる。東西ともに調査区外となるため不明であるが、溝底は西側で標高約94.3m、東端で標高約92.9mであり、崖に向かい低くなっており、斜面を昇降する道路となると考えられる。

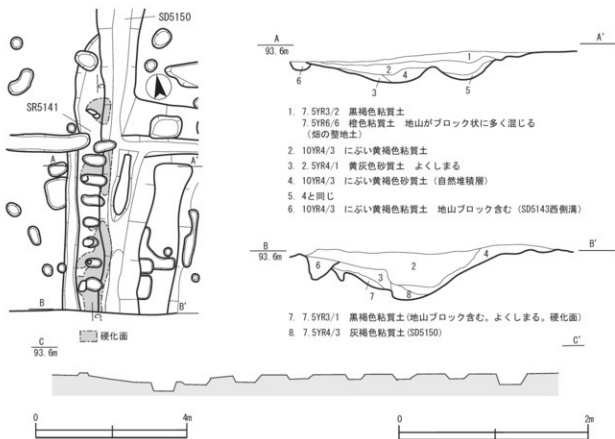
S R6006（第32図） 第6次調査区中央南部で検出した南北方向の遺構である。幅1.4～2.4m、深さ0.5mで、底は1.0～1.2mの幅で平坦であり、部分的に厚さ0.05m程度の砂利が敷かれて硬化している。波板状凹凸遺構の可能性のある浅いビット状の落ち込みも見られることから、道路状遺構と考えられる。東西方向の遺構であるS D6001から分岐しているものと考えられる。

S R6025（第25図） 第6次調査区西部北端で検出した遺構である。溝状を呈さず側溝も確認できないが、幅0.5mで砂利が敷かれており硬化面となっていることから、道路状遺構と考えられる。

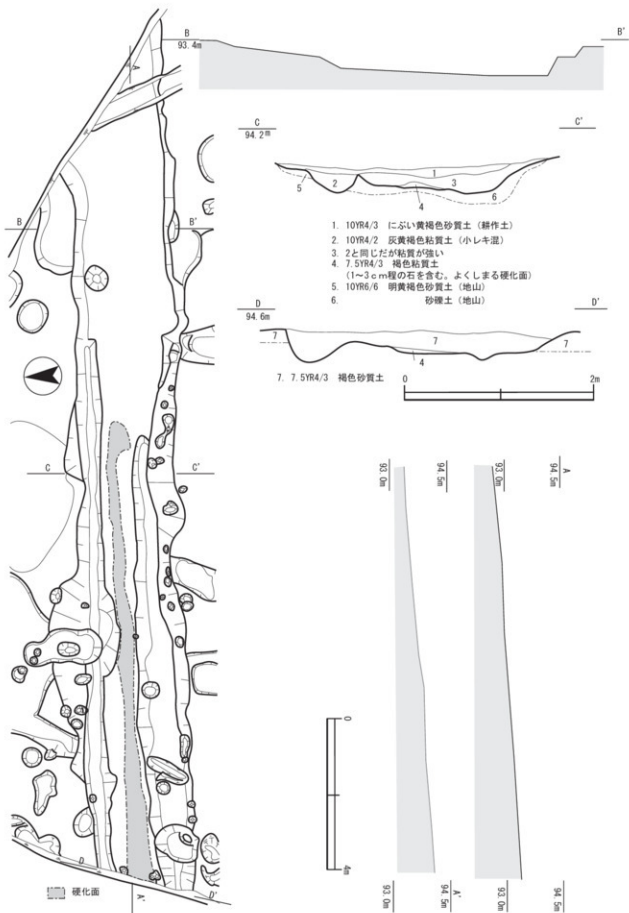
S D5004（第33図） 第5次調査区A2地区で検出した遺構である。調査区西側に土塁の痕跡が残り、方向をほぼ揃えることから、堀の可能性も考えられる。しかし、幅約8.0～9.5m、深さ約0.6mで、崖に向かって広がる幅広い落ち込み状を呈していることから、道路状遺構の可能性も考えられる。狭い



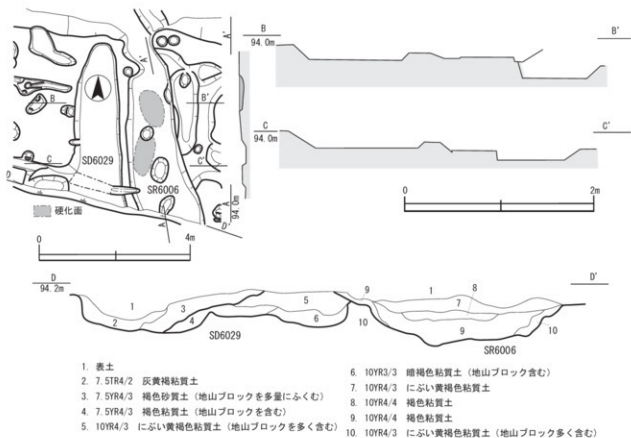
第29図 SR4018 平面図・断面図 (1:100)、断面図 (1:40, A-A', B-B')



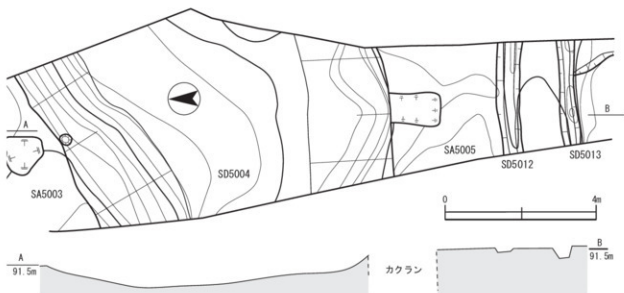
第30図 SD5150 SR5141 平面図 (1:100)、断面図 (1:40)



第31図 SR6012 平面図・断面図 (1:100, A-A') 断面図 (1:40)



第32図 SR6006、SD6029 平面図・断面図 (A-A' , 1:100) 断面図 (1:40)



第33図 SA5003・5005、SD5004・5012・5013 平面図・断面図 (1:100)

範囲の調査のため、詳細は不明である。

S D 4028・5015 (第23図) S D 4028は幅0.4～0.6m、深さ0.1m、S D 5015は幅0.3m、深さ0.2mの溝である。S D 5015はS R 5010を切っており、より新しい遺構である。両者は約5.0m離れて平行しており、米軍による航空写真や古い都市計画図などに見られる旧道の名残である可能性がある。

2 区画溝

掘立柱建物や土坑の検出位置については、道路状遺構・区画溝により区画された区画地で示す(第16図)。S D 4029東側の明瞭な区画を伴わない区画1、S D 5057・4029で囲まれた区画2、S D 5031・5040・5053で囲まれた区画3、東西道路状遺構S D 5032北側で、S D 5051を西溝とする区画4、第5次調査C地区西端のS D 5102～S D 5117までの区画5、S D 5117～S R 5141・S D 5150までの区画6、S R 5141・S D 5150～S R 6006までの区画7、S R 6006～区画溝S D 6011までの区画8、区画溝S D 6011以西の区画9である。区画2は東西約50m、区画3は東西約33m、区画5は東西約33m、区画6は東西約50m、区画7は東西約55m、区画8は東西約40mである。

S D 5031・5040・5062・5053 (第24・47・34図) 区画3に伴う区画溝である。区画内は東西約33mである。S D 5031は幅約4.5m、深さは西で0.4m、東は0.2mである。西壁は垂直に近く掘り込まれており、肩部には幅約1.2m、深さ約0.3mのS D 5036が巡る。西側は砂礫層で、東側は黒ボク層である。S D 5031の埋土除去後S K 5038を検出した。北溝はS D 5040があるが、西側では幅0.3～3.0m、深さ約0.1mの不整形であり、直線的な遺構ではない。また、S H 5074を切るS D 5044もS D 5040と同一のものである可能性がある。東側では幅3.0m、深さ0.3mの溝となり、S D 5062とつながる。直線的ではなく曲線的である。南側のS D 5062は深さ0.4mで、S D 5040掘削後に検出した遺構であるが、同一のものである可能性がある。西溝S D 5062は、土層から幅約4.4m、深さ約0.6mの溝であり、S D 5031と類似する。S D 5053は幅0.5m、深さ0.1～0.2mで、S D 5062がある程度埋没した後掘削された遺構であり、S D 5062に伴うものである可能性があるが、S D 5062のように屈曲せず、まっすぐ伸びる溝

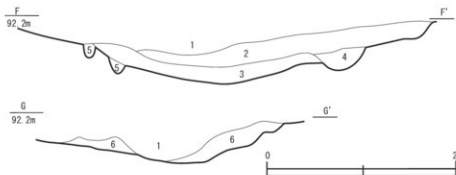
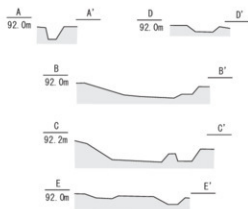
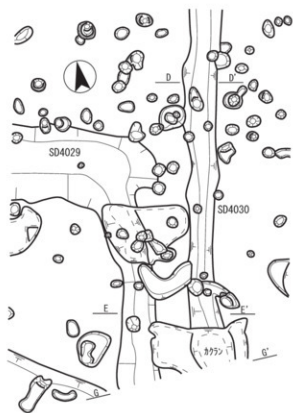
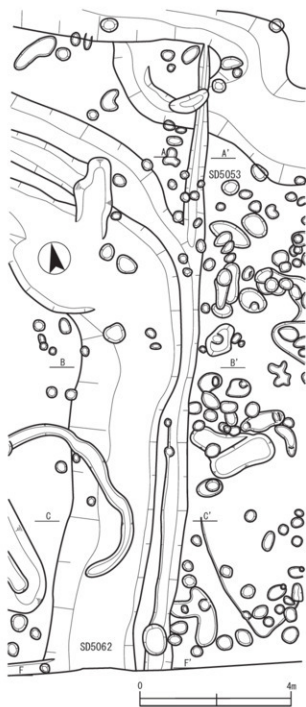
である。このような関係は、区画2のS D 4029・4030でも確認できる。

S D 5057・4029・4030 (第23・24・34図) 区画2に伴う区画溝である。S D 5057はS D 5056と接続する溝であるが、区画3と接する辺りで屈曲し、1段深くなることから、S D 5076とは異なる溝とした。埋土が耕作土のため、第4次調査では攪乱溝としており、詳細は不明である。J U 21で屈曲しS D 4029となる。S D 4029は検出段階では幅約1.0m、深さ約0.3mであるが、土層からは幅約2.4m、深さ約0.5mと考えられる。S D 4030は攪乱溝の可能性はあるが、S D 5062・5053と同様の形状であることから、S D 5062に関わる遺構の可能性はある。

S D 5051 (第24・35図) 区画溝と想定したが、東には対応する溝が検出されず、西は調査区外となるため不明である。断面は葉研状を呈し、幅約2.4mで緩やかに深くなった後、幅約1.5mで急激に深くなる。深さ約0.6mである。土層断面図では西側の溝を切るが、この溝は急激に浅くなり北へは続かない。埋土は地山のブロックを多量に含んでおり、人為的に埋められたと考えられる。南へは伸びないことから、S D 5056と接続しているものと思われる。S D 5051のような断面形状の溝は他になく、人為的に埋められたことが明らかで溝も他には見られない。道路状遺構S D 5032に切られており、道路敷設時に埋められた可能性がある。また調査区外ではあるが、北側の墓地の土塁状の高まりと方向を描えており、関連する遺構である可能性がある。

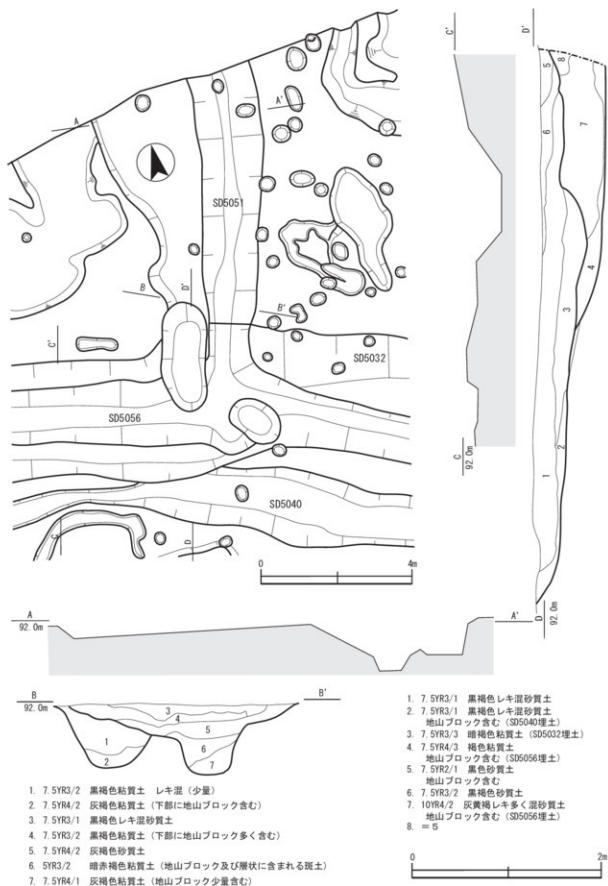
S D 5037・5102・5117 (第24・25図) S D 5037は第5次調査B地区西端で、S D 5102は第5次調査東端で検出した遺構である。両者の間隔は外側で約5.5m離れて平行している。現道と重なっているため調査はできていないが、この現道は地籍図でも確認されることから、道路の側溝であると思われる。S D 5037の西側は、S D 5036との間で約5.0mの空地となる。この空地は近世の溝と思われるもの以外は遺構が確認できず、調査区外の北に位置する土塁の延長の可能性はあるが、盛土の痕跡は見られなかった。

S D 5117はS D 5102の西約33mに位置する遺構で、S D 5117とS D 5102で区画5を形成している。S D

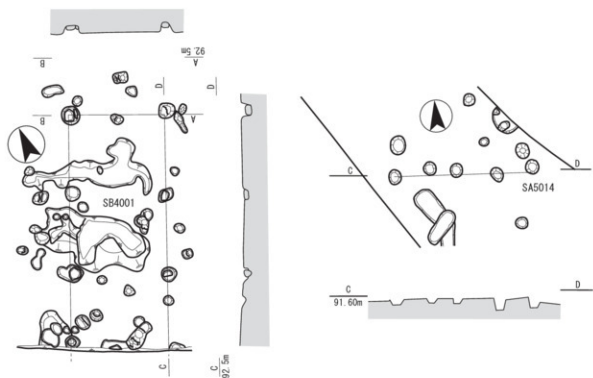


1. 表土
2. 7. 5YR4/3 褐色レキ混砂質土
(地山ブロック少量含む)
3. 5YR3/1 黒褐色粘質土
(地山ブロック含む)
4. 7. 5YR4/3 褐色レキ多く混砂質土
(地山ブロック多く含む)
5. 5YR3/1 黒褐色粘湿度
(地山ブロック含む)
6. 5YR2/1 黒褐色土
(地山ブロック含む)

第34図 SD 4029・4030・5053・5062 平面図・断面図 (A~E 1:100) 断面図 (1:40)



第35図 S D5032・5040・5051・5056 平面図 (1:100)、断面図 (1:40)



第36图 SB4001・4002、SA5014平面图・断面图（1：100）

5117は深さ0.1mの落ち込み状の遺構であるが、底がほぼ平坦であり、道路状遺構とも考えられる。東西方向の道路状遺構側溝SD5110が走行する地点に向かっており、関連がある可能性がある。

S R5154・S D5150 (第25・30図) ほぼ同一地点のため、どちらが区画溝の役割を果たすのか不明であるが、区画6の西溝及び区画7の東溝となる遺構である。S R5140よりS D5150のほうが新しい。S D5150は幅約1.0～1.3m、深さ約0.4mの溝で、S D5134に切られており、埋設時期はS D5134より古い。しかしS D5134より北には伸びておらず、S D5134かS D5138に接続すると考えられる。

S R6006・S D6031 (第26・32図) どちらが区画溝の役割を果たすのか不明であるが、区画7の西溝及び区画8の東溝となる遺構である。他の区画溝とは方位が異なりほぼ磁北方向に沿うが、自然地形に沿うものと考えられる。S D6029は幅約1.5m、深さ約0.4mであり、S R6006より古い遺構である。

S D6011 (第26・51図) L字に屈曲する溝で、区画8の西・北溝になる遺構である。北溝は攪乱溝とほぼ一致して削平されており、肩部が確認できたのみである。西溝は幅約1.2～1.4m、深さ0.4～0.5mである。

3 掘立柱建物・柵

S B4001 (第36図) 区画1で検出した遺構である。桁行3間以上(北から2.0m、2.0m、2.0m)、梁行2間(西から1.2m、1.2m)の側柱建物である。建物方位はN20°Eである。検出した8基のPitのうち5基で根石が見られる。古瀬戸後II期の卸皿(84)が出土している。

S B4002 (第36図) 区画1で検出した遺構である。桁行4間(西から2.4m、2.4m、2.5m、2.2m)、梁行3間(北から2.1m、2.1m、2.0m)の総柱建物である。建物方位はN25°Eである。小破片だが、尾張型第5型式の山茶碗などが出土している。

S B4023 (第37図) 区画2で検出した遺構である。桁行3間(西から2.0m、1.8m、2.0m)、梁行2間(2.0m、1.8m)の側柱建物である。建物方位はN5°Eである。南側は攪乱のため柱の並びが悪い。山茶碗片、土師器片が出土したのみである。

S B4025 (第37図) 区画2で検出した遺構である。桁行4間(北から1.2m、1.1m、1.1m、1.2m)梁行2間(西から1.6m、1.5m)の側柱建物で、桁行の柱間が狭い特徴がある。南側1間が底になるか、さらに長い建物になる可能性がある。建物方位はN20°Eである。遺物は尾張型第7型式の山茶碗が出土している。

S B4026 (第37図) 区画1で検出した遺構である。桁行4間以上(北から1.3m、1.4m、1.4m、1.5m)、梁行2間(西から2.0m、2.0m)の側柱建物で、S B4025同様桁行の柱間が狭い。建物方位はN18°Eである。南側は攪乱があり、調査区外になるため南北規模は不明である。遺物は出土していないが、S B4001とほぼ棟方向を揃えており、同時期の建物と考えられる。

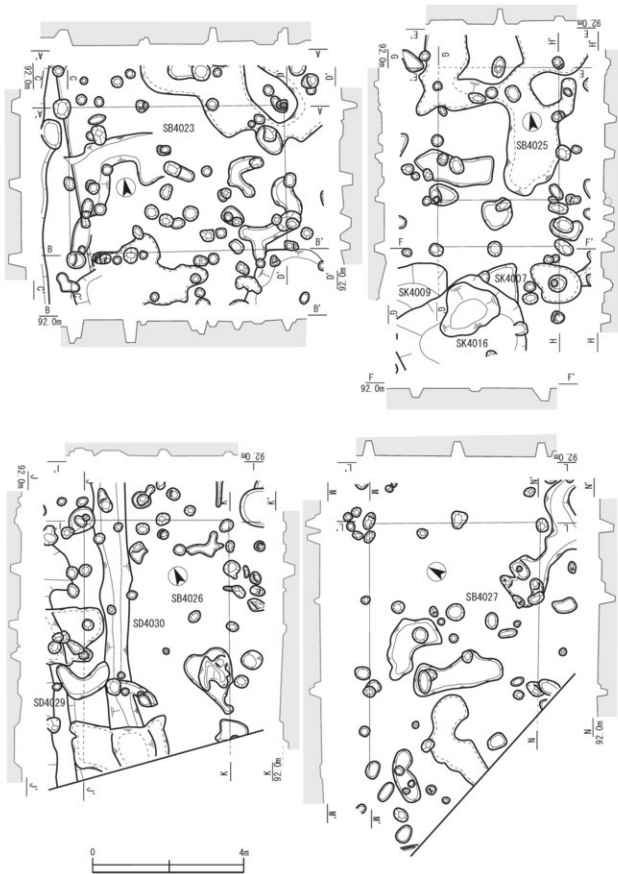
S B4027 (第37図) 区画2で検出した遺構である。桁行3間以上(北から2.0m、2.4m、2.0m)、梁行2間(2.2m、2.2m)の側柱建物で、桁行は調査区外となるためさらに延びる可能性がある。建物方位はN57°Eで、他の建物とは大きく方位が異なる。遺物は出土しておらず、周囲に類似する方向の掘立柱建物が存在しないため、時期不明である。

S A5014 (第36図) 5次調査A1地区で検出した遺構である。狭い調査区であり、柱間も西から1.0m、0.5m、1.0m、0.8mと一定しないため柵かどうか疑問が残る。

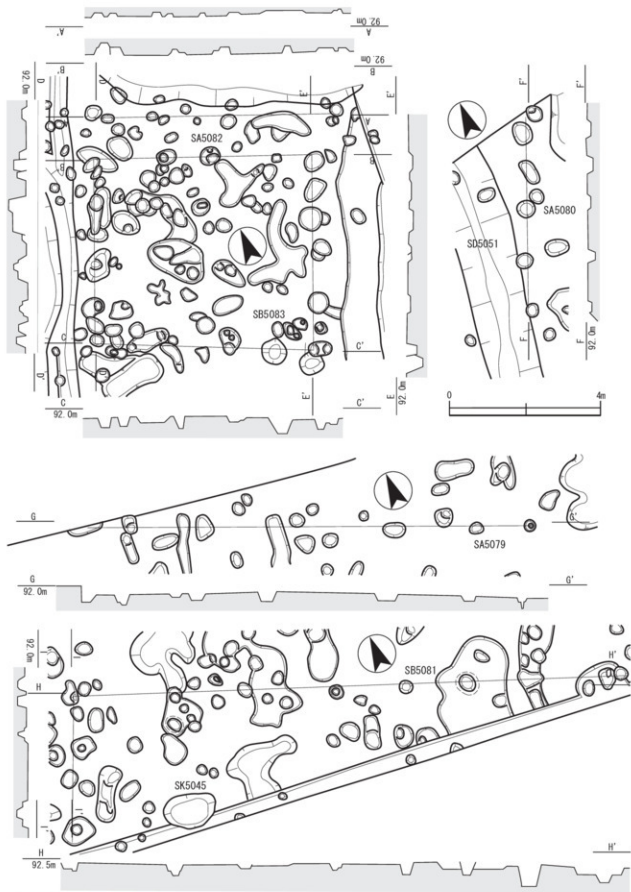
S A5079 (第38図) 区画4で検出した遺構である。北側は調査区外となることから、本来は掘立柱建物であった可能性がある。柱間は6間確認したが1.0m、1.8m、2.3m、2.5m、2.2m、1.3mと不揃いであり、複数の遺構が切り合う可能性も考えられる。方向はN70°Wである。遺物は出土していない。

S A5080 (第38図) 区画4で検出した遺構である。柱間4間(1.0m、1.0m、1.4m、1.4m)で、方位はN20°Eである。遺物は出土していないが、切り合いから、S D5051より新しい遺構である。

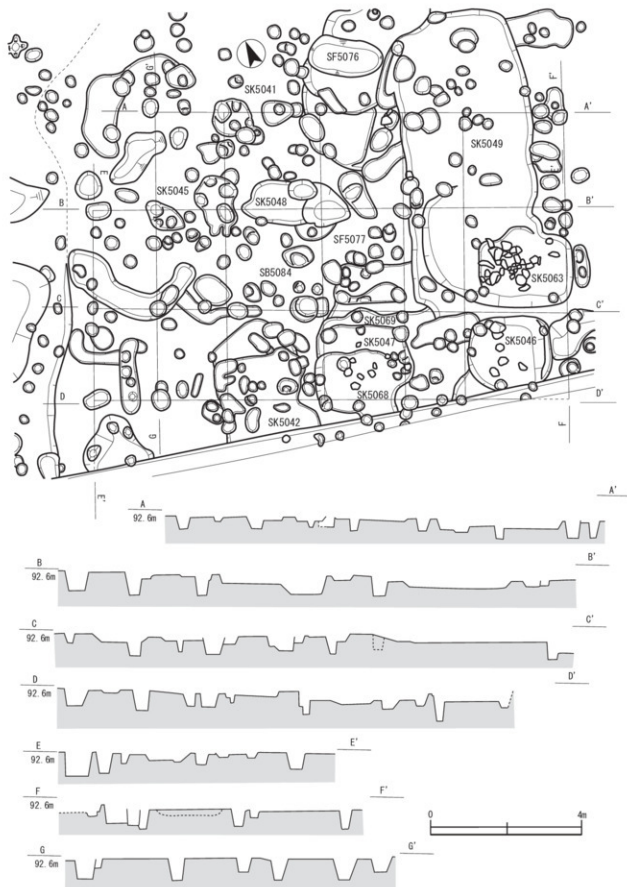
S B5081 (第38図) 区画2で検出した遺構である。南側が調査区外であり、柵の可能性もあるが、掘立柱建物とした。確認した柱間は7間で、西から2.5m、1.7m、2.4m、1.9m、1.6m、1.6m、1.6mと不揃いであることから、2棟以上の掘立柱建物



第 37 图 SB4023 · 4025 · 4026 · 4027 平面图 · 断面图 (1 : 100)



第38图 SA5082·5080·5079、SB5083·5081平面图·断面图 (1:100)



第39图 SB5084 平面图·断面图 (1:100)

の可能性がある。梁間は西側の柱穴で北から1.2m、2.2mとなるが、どちらが柱穴かは不明である。SB4001のような梁行の柱間が狭く長細い掘立柱建物になる可能性がある。建物方位はN20°Eである。尾張型第6型式の山茶碗や中野6a型式の常滑産莖、南伊勢系第2段階の土師器鍋が出土している。

SA5082 (第38区) 区画2で検出した遺構である。柱間は西から1.5m、2.0m、2.5mと揃っていないが、方位がSB5083に直行するN70°Wであること、SB5083とSD5057の間に位置することから、SB5083の目隠しのような柵の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

SB5083 (第38区) 区画2で検出した遺構である。桁行4間(西から1.0m、1.6m、1.2m、1.2m)、梁行3間(北から1.7m、1.7m、2.2m)の建物で、西側の梁行がやや広いことから庇の可能性が考えられる。桁行は柱間がやや不揃いであり、総柱の掘立柱建物になる可能性もある。建物方位はN20°Eで、SA5082と関連すると考えられる。小破片であるが、尾張型第5型式の山茶碗が出土している。

SB5084 (第39区) 区画3で検出した遺構である。多くの土坑群と重なっており、Pitも多数存在することから、本来は複数の掘立柱建物が切り合っており存在したと思われるが、掘立柱建物としてまとめられたのは1棟のみである。また、大型の土坑の上部の埋土は後世の耕作土であるため、土坑とPitとの切り合いも明確にできなかった。桁行6間(1.6m、1.8m、2.4m、2.2m、1.6m、2.7m)、梁行3間(2.5m、2.5m、2.5m)で、桁行がやや不揃いであり、複数の掘立柱建物である可能性もある。総柱建物と考えられ、建物方位はN20°Eである。尾張型第6型式の山茶碗が数点出土しているが、注目すべき遺物として、尾張型第6型式の墨書山茶碗(87・88)が出土している。柱穴からの出土遺物は鎌倉時代と考えられるが、SK5046やSK5063を南東隅土坑と捉えると、その出土遺物から室町時代の遺構である可能性もある。また、複数の建物が存在すると考えた場合、南側は調査区外のため不明であるが、SK5069・5047・5068・5042なども建物内土坑となる可能性がある。

SB5151 (第40区) 区画5で検出した遺構である。検出できなかったPitもあるが、桁行3間(西から2.0m、2.0m、2.3m)、梁行2間(北から1.6m、1.7m)の側柱建物で、建物方位はN20°Eである。遺物は出土していない。

SB5152 (第40区) 区画5で検出した遺構である。調査区南端で検出したため、南側の状況は不明である。桁行2間以上(北から2.5m)、梁行2間(西から1.8m、1.8m)の側柱建物の可能性もあるが、建物方位はN18°Eで、SK5109を建物内土坑とする桁行2間以上(2.5m)、梁間4間(西から1.8m、1.8m、2.4m、2.7m)の建物と考えた。総柱の掘立柱建物の可能性がある。北側の東から2番目のPitは検出できていない。遺物は土師器片が出土したのみであるが、SB5153と方向を揃えており、建物内土坑と考えられるSK5109から出土した土師器皿(77・78)から、室町時代の遺構と考えられる。

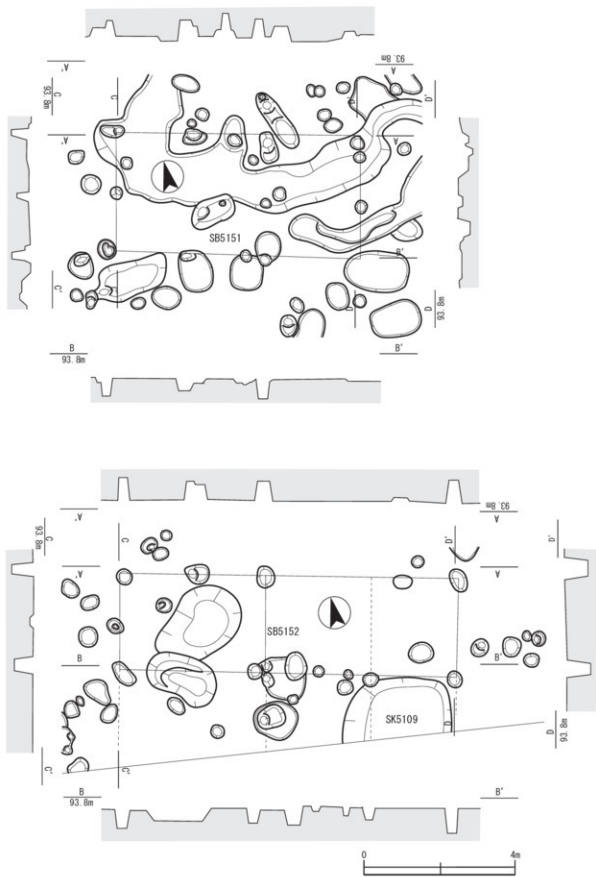
SB5153 (第41区) 区画5で検出した遺構である。桁行4間(2.0m、2.5m、2.0m、2.7m)、梁行2間以上(1.7m、1.6m)の総柱建物になると考えられる。SK5155は痕跡を残す程度の浅い遺構であるが、建物内土坑になると考えられる。尾張型第8または9型式の山茶碗が出土している。

SB5154 (第41区) 区画5で検出した遺構である。柱間は2間(2.5m、2.5m)、2間(2.6m、2.6m)で、建物方位はN2°Eである。遺物は出土していない。

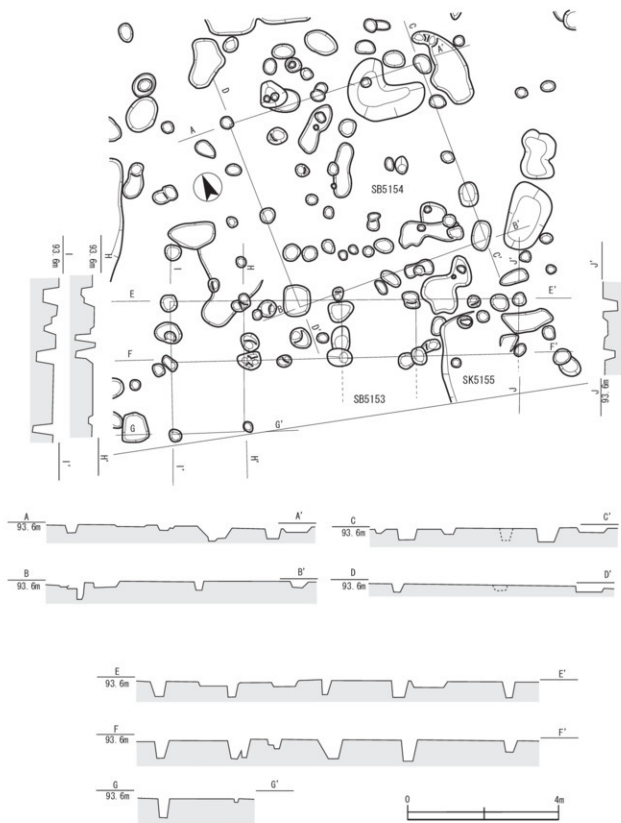
SB6028 (第42区) 区画9で検出した遺構である。桁行4間(西から2.5m、2.5m、2.5m、2.2m)、梁行2間(2.0m、1.6m)の側柱建物である。出土した土師器皿(141)から、室町時代の遺構と考えられる。

4 土坑

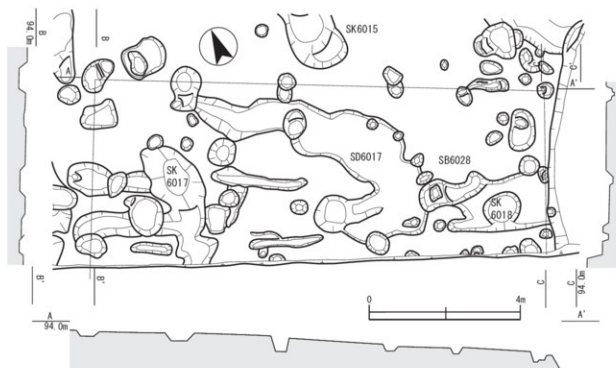
SK5046 (第43・44区) 区画3で検出した2.0m×2.0m、深さ0.3mの隅丸方形の遺構である。SB5084の建物内土坑の可能性もある。上部に炭化材と焼土が見られたが、壁面や底部に熱を受けた痕跡は確認できなかったため、廃棄土坑と考えられる。炭化材に混じり南伊勢系土師器羽釜(56~58)が出土しており、炭化材が廃棄されたのは室町時代と考えられる。しかし、炭化物・焼土などが見られるの



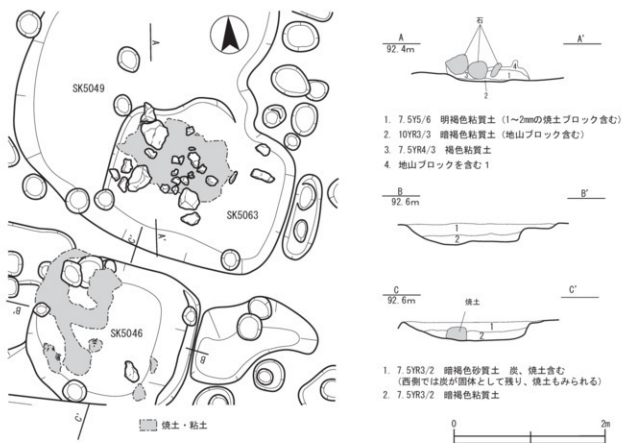
第40圖 SB5151・5152 平面圖・断面圖 (1:100)



第41圖 SB5153・5154平面圖・断面圖(1:100)



第42図 SB6028、SD6017、SK6015・6017・6018 平面図・断面図（1：100）



第43図 SK5063・5046 焼土・粘土検出状況 平面図・断面図（1：50）

は上層のみであり、下部からは第5・6型式の山茶碗小片が多く出土していることから、SK5046自体はSB5084の建物内土坑として鎌倉時代に掘削され、室町時代には凹地となっており、炭化材が捨てられたという可能性も考えられる。

SK5049 (第44図) 区画3で検出した遺構である。7.7m×3.5m、深さ0.3mの大きな土坑として掘削したが、いくつかの土坑が重なっている可能性が考えられる。特に北部ではSF5077からの崩落と思われる粘土が多く見られ、関連のある施設であった可能性がある。鎌倉時代から室町時代にかけての山茶碗や土師器の小破片が多数出土しており、廃棄土坑と考えられる。鉄洋2点や鍛造鉄片が出土しており、周囲で鍛冶が行われたものと考えられる。

SK5063 (第43・44図) 区画3で検出した遺構であり、SB5048の建物内土坑と思われる。遺構検出はSK5049との切り合いを明確にできなかったが、土層観察の結果、SK5049より新しい遺構であると思われる。上面を削平してしまったため規模は不明であるが、約2.5m四方の方形に近いものであると考えられる。拳大～人頭大の焼けた石や粘土の塊が多数埋土に含まれており、鍛冶や厨房のような施設である可能性があるが、壁や底が焼けている様子は確認できなかった。上層から小破片の遺物が多数出土することから、最終的には廃棄土坑として埋没したと考えられる。

SK5068・5047・5069 (第45図) 区画3で検出した遺構である。3基が重なっており、SK5069が最も古く、SK5068が新しい。長辺はいずれも2.0～2.5mほどで、平面形が明らかなSK5068の短辺は約1.5mである。深さは約0.3mである。SK5068は底部から北側の所に貼床が見られるが、焼けた様子は見られなかった。形状からSB5084か、それ以外の掘立柱建物の建物内土坑になる可能性がある。

SK5042 (第45図) 区画3で検出した2.5m×3.0m以上、深さ0.2mの方形の遺構である。形状からSB5084かそれ以外の掘立柱建物の建物内土坑になる可能性がある。

SK5038 (第47図) 区画3で、SD5031掘削後に検出した遺構である。当初、粘土が底部に貼られた堅穴住居と考えたが、出土遺物が中世のみのため

粘土を断ち割ったところ、室町時代の遺構であることが確認された。3.2m×3.0m、深さ0.5mの隅丸方形の遺構で、底部から壁面にかけて粘土が貼られているが、熱を受けたような様子は見られなかった。中央と中央西・東にPitがあり、周囲にも小穴がいくつか存在することから何らかの構造物が存在した可能性が考えられる。水溜のようなものであろうか。粘土内から土師器小皿・羽釜が出土している。

SK4007・4009・4016 (第49図) 区画2で検出した土坑である。SK4007・4009はSK4016に切られているため、規模は不明である。SK4016は南北2.2m以上、東西約2.9m、深さ約0.5mで、調査区外の南へ延びている。出土遺物は、いずれも南伊勢系の土師器鍋・羽釜、青磁小片で、時期としては室町時代であり、一連の遺構と考えられる。埋土は粘土ブロックが多く混じり、掘り返した跡も見られることから、人為的に埋め戻しと掘削を繰り返しているものと思われる。

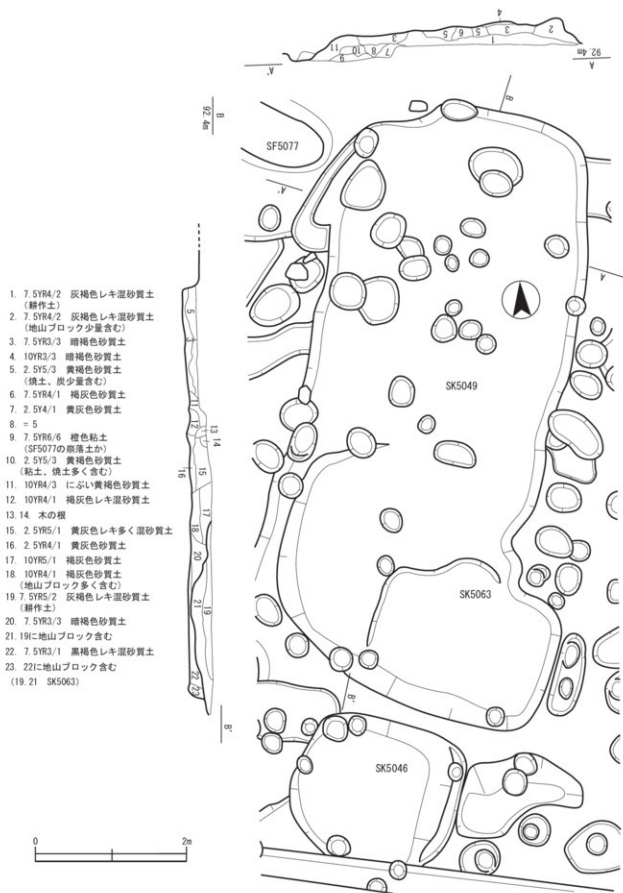
SK4017 (第49図) 区画1で検出した長径約2.4m、短径約0.8m、深さ約0.2mの隅丸方形の土坑である。出土遺物は、南伊勢系の土師器皿・鍋、青磁小片で、土壌墓の可能性も考えられる。時期としては室町時代である。

SK4024 (第49図) 区画1で検出した直径約2.0m、深さ約0.2mの円形の土坑である。出土遺物は山茶碗で、時期としては鎌倉時代である。

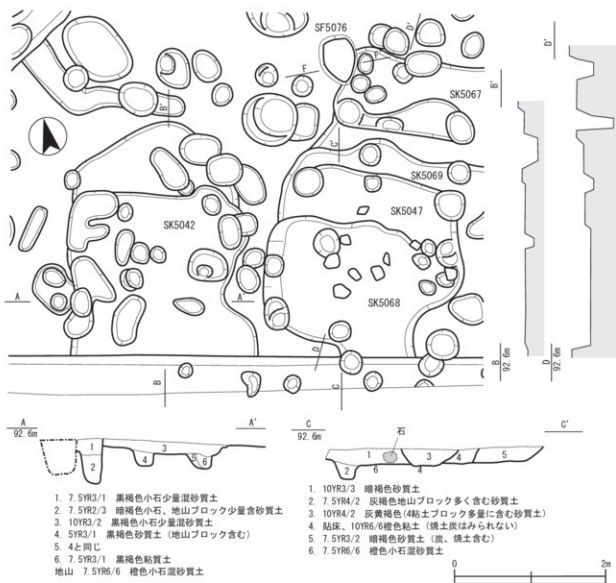
SK5109 (第48図) 区画5で検出した2.7m×1.4m以上、深さ約0.35mの隅丸方形の遺構である。南側は調査区外のため不明である。SB5152の建物内土坑になると考えられる。室町時代と考えられる土師器皿が出土している。

SK5140 (第48図) 区画6で検出した5.8m×4.0m以上、深さ0.3mの方形であるが、ややいびつな遺構である。SD5135に切られる。埋土には細かい炭を含み、下層に行くほど大量に含まれる。一部では、貼床の痕跡も見られた。埋土除去後には炭が充満して周囲が焼けて赤化した土坑(SK5149)が検出された。何らかの火を扱う行為に用いられた土坑と思われるが、性格は不明である。

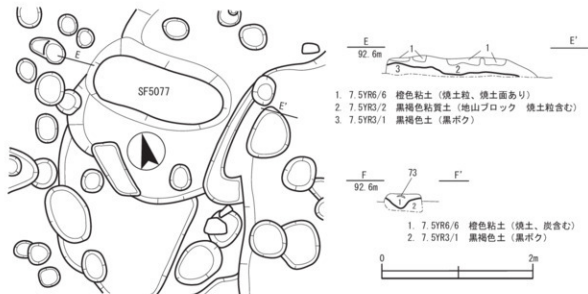
SK6015 (第50図) 区画9で検出した遺構である。3.5m×1.2mの楕円形を呈し、2段のテラスを



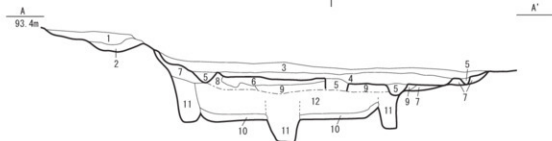
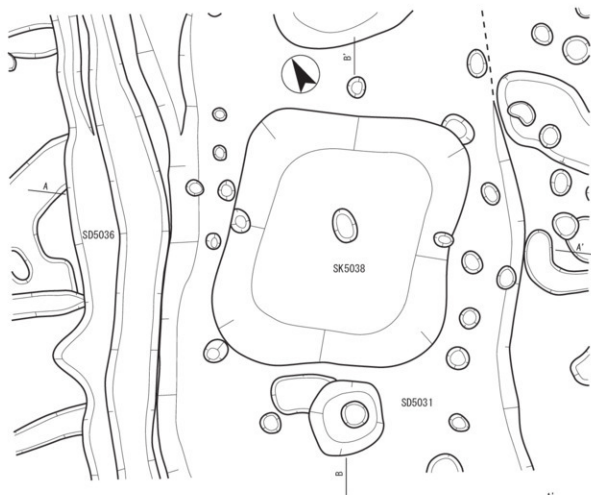
第44図 SK5046・5049・5063、SF5077 平面図・断面図 (1:50)



第45図 SK5042・5047・5067・5068・5069、SF5076 平面図・断面図（1：50）



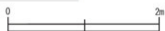
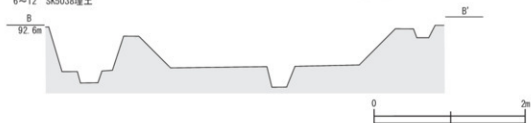
第46図 SF5077平面図・断面図、SF5076断面図（1：50）



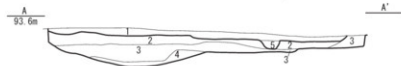
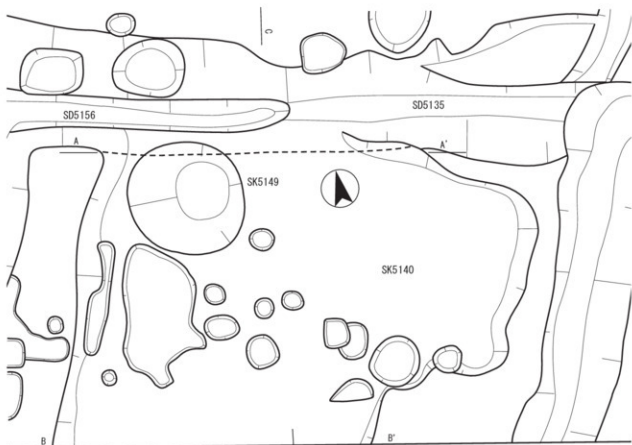
- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. 7.5YR4/2 灰褐色レキ混砂質土
(地山7.5YR/8 黄褐色砂質土ブロック少量含む) | 6. 5YR1.7/1 黒色粘質土 |
| 2. 5YR3/1 黒褐色レキ混粘質土 (地山ブロック含む) | 7. 10YR3/2 黒褐色粘質土 |
| 3. 5YR3/1 黒褐色粘質土 | 8. 10YR4/1 褐灰色粘質土
(地山ブロック少量含む) |
| 4. 7.5YR3/1 黒褐色レキ混粘質土 | 9. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
(地山小ブロックを多く含む) |
| 5. 5YR3/1 黒褐色粘質土
(地山ブロック多く含む (pit、埋土)) | 10. 7.5YR7/8 黄褐色レキ混粘質土 (粘床か) |

- 1.2 SD5036埋土
3.4 SD5031埋土
6~12 SK5038埋土

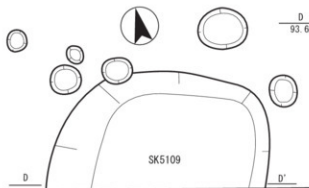
11. 7と同様の埋土
12. 9と同様の埋土



第47図 SD5036・5031、SK5038 平面図・断面図 (1:50)



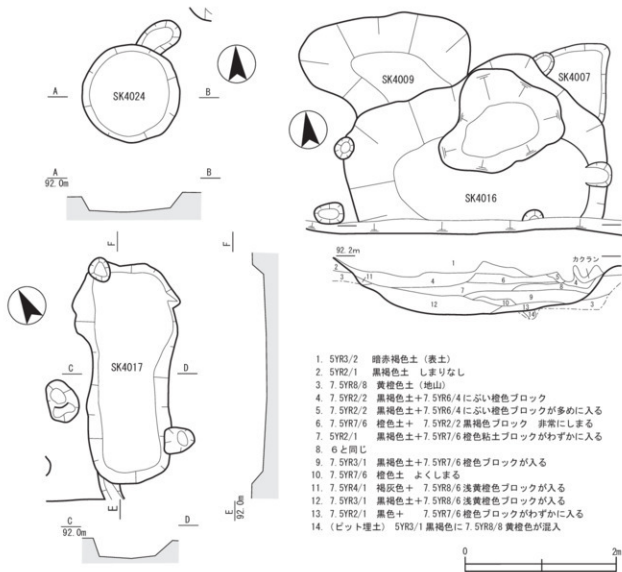
1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
(地山小ブロック少量含む) (SD5135)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
(地山小ブロック少量、炭微量含む)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (炭多く含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 炭を多量に含む
(周囲に焼土有り)
5. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土 (Pit)
6. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (地山多く含む)
7. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
7.5YR6/6 橙色粘質土 (地山) が
ブロック状に多く混じる
(畑をする際の墾地土か?)
8. 7.5YR3/2 黒褐色砂質土 (7.8.SD5135)
9. 7.5YR6/6 橙色粘質土
(炭化物含む。跡床か?)



1. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
2. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (4をブロック状に少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (包含層か?)
4. 黒ボク



第48図 SK5140・5109 平面図・断面図 (1:50)



第49図 SK4007・4009・4016・4017・4024 平面図・断面図 (1:50)

持つ性格不明の土坑である。遺物は第7型式の山茶碗(81)、第6型式の山茶碗片口鉢(82)が出土している。SR6012に切れられ、より古い遺構である。

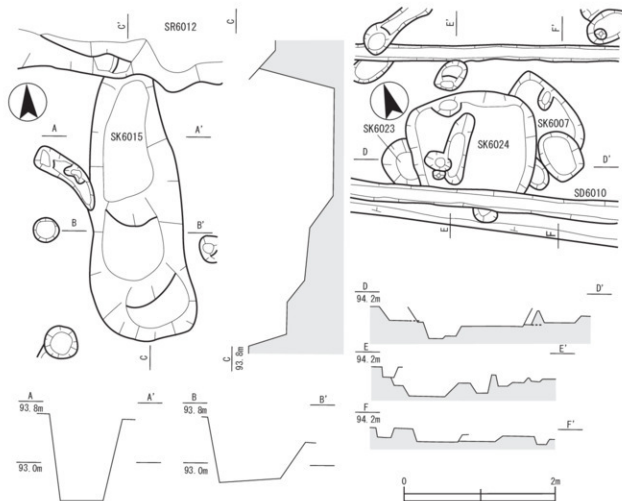
SK6007・6023・6024(第50図) 区画8で検出した遺構である。SK6024が新しく、1.6m×1.4m、深さ0.2mである。SK6007とSK6023は同じ遺構の可能性はあるが、明らかではない。深さは約0.1mである。

5 その他の遺構

SF5076(第45・46図) 区画3で検出した遺構である。本来は第III層上面から切り込む遺構の一部であるが、遺構を検出できず、周囲より0.1m粘土部分のみ盛り上がった状況で残し、断ち割り・完

掘を行った。長辺0.7m、短辺0.6mの粘土の塊で、焼けた様子が見られる。尾張型第10型式の山茶碗(73)が出土している。本来はより大きなものであり、この粘土が削平され、周辺の土坑に混入しているものと思われる。

SF5077(第46図) 区画3で検出した遺構である。SF5076と同様、本来は、第III層上面から切り込む遺構の一部であるが、遺構を検出することが出来ず、0.25m盛り上がった状況で確認し、断ち割り・完掘を行った。長辺2.0m、短辺1.0mの粘土の塊で、焼けたものである。遺物は出土しなかった。本来はより大きいものであり、これを削平したものがSK5049などの埋土に混入したと考えられる。



第50図 SD6010、SK6007・6015・6023・6024、SR6012 平面図・断面図（1：50）

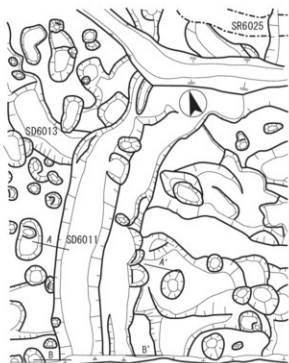
SA5001・SD5002（第21図） 第5次調査A1地区で検出した遺構である。SA5001には盛土などは見られないが、SD5002の掘削により相対的に高まりとなっている。SD5002は南端で幅約2.0m、深さ約0.2mを測り、北に向かい幅広く深くなる。今後の調査により、性格は明らかになると思われる。

SA5003・5005・SD5004（第21図・第33図） 第5次調査A1地区で検出した遺構である。SA5001と同様、SA5003・5005も盛土は見られず、SD5004により相対的な高まりとなったものであるが、SA5005の南にはSD5012・5013があり、SA5005の高まりをより意識させているのではないかと考えられる。SD5004は前述のとおり道路状遺構の可能性も考えられるが、調査区外である西側には土塁が残存しており、今後の調査により性格は明らかになると考えられる。

SD6009・6029・6030（第25・51図） 第6次調査区北東部で検出した遺構である。SD6009は地形に沿って斜面上に掘削された遺構であり、明確な規模は不明であるが、幅は5.0m以上、深さは0.9mを測る。斜面の高い側を垂直気味に、低い側をなだらかに掘削しており、やや張り出した地形のところに掘削されていることから、堀切のような施設ではないかと考えられる。SD6031・6032は、SD6009の北で検出した遺構である。幅0.5～0.6m、深さ0.1mの小規模な遺構であるが、南側を垂直気味に、北側をなだらかに掘削しており、小規模な堀切ではないかと思われる。（水谷 豊）

註

- 1 片岡香子・吉川周作「三重県鈴鹿川流域の段丘構成層の層序・編年—大山灰稀産地域での段丘編年の試み—」『第四紀研究』vol.36, No.4（日本第四紀学会、1997年）



A
94.0m

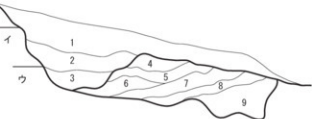


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土(地山ブロック小を含む)
4. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土(地山ブロック小を多く含む)
5. SD6013埋土 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
6. ピット埋土 4+5の斑土
- 地山 10YR6/6 明黄褐色粘質土
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土

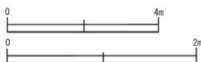
B
94.0m



C
93.6m



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土(小レキ混)
 2. 7.5YR4/3 褐色粘質土
 3. 7.5YR4/3 褐色粘質土(イ、ブロック多く含む)
 4. 10YR4/4 褐色粘質土
 5. 7.5YR5/3 にぶい褐色レキ混砂質土
 6. 7.5YR5/4 にぶい褐色レキ混砂質土
 7. 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土(6の下辺りでウを層状に含む)
 8. 7.5YR5/4 にぶい褐色レキ混砂質土(イ、ブロックを多量に含む)
 9. 7.5YR3/2 黒褐色レキ混粘質土(土坑)
- ア. 7.5YR7/8 黄褐色細砂~レキ(3mm程)
 イ. 7.5YR6/6 橙色砂質シルト
 ウ. 砂レキ(3mm~5cm程のレキ)
- (1~3: SD6009埋土)



第51図 SD6009・6011 平面図(1:100)、断面図(1:40)

連携番号	調査 次数	大 地区	小 地区	性 格	時 期	桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物面積 (㎡)	建物方 向	建物内 土坑	備 考	
S B	4001	4	J	v22, w21~23	独立柱建物	室町	3間以上(2.0, 2.0, 2.0) ×2間(1.2, 1.2)	(6.00)	2.40	(14.40)	N20° E	なし	鉄石あり。
S B	4002	4	J	U18~20, V18 ~20, W18~20	独立柱建物	鎌倉	4間(2.4, 2.4, 2.5, 2.2) ×3間(2.1, 2.1, 2.0)	9.50	6.20	58.90	N28° E	なし	総柱。
S B	4023	4	J	J20, K19・ 20, L19・20	独立柱建物	鎌倉か	3間(2.0, 1.8, 2.0) ×2間(2.0, 1.8)	5.80	3.80	22.04	N5° E	なし	南側の柱並びが悪い。
S B	4025	4	J	O20, P21, P20, 21	独立柱建物	鎌倉	4間(1.2, 1.2, 1.2, 1.2) ×2間(1.6, 1.6)	4.80	3.20	15.36	N18° E	なし	南1間が低く、更に長い建物になる。
S B	4026	4	J	T21/Q21, Z2/ V21	独立柱建物		4間以上(1.3, 1.4, 1.4, 1.5) ×2間(2.0, 2.0)	(5.60)	4.00	(22.40)	N18° E	なし	南は不明
S B	4027	4	J	P21, Z2/Q21, Z2/ /R21, Z2	独立柱建物		3間以上(2.0, 2.4, 2.0) ×2間(2.2, 2.2)	(6.30)	4.40	(27.72)	N37° E	なし	
S A	5014	5A	J	N2~04	柵		4間以上(1.0, 0.5, 1.0, 0.8)		3.30		N84° W		
S A	5079	5B	J	G12~J13	柵		6間(1.0, 1.8, 2.3, 2.5, 2.2, 1.3)		11.70		N70° W		
S A	5080	5B	J	E13, 14	柵		4間(1.0, 1.0, 1.4, 1.4)		4.80		N20° E		S D5051を切る。
S B	5081	5B	J	C19, 20~G20	独立柱建物	鎌倉	7間(2.5, 1.7, 2.4, 1.9, 1.6, 1.6, 1.6) ×2間以上(1.2, 2.2)	13.30	3.40	45.22	N20° E	不明	2種の独立柱建物の一部か。南端のため不明。
S A	5082	5B	J	I18~J18	柵		3間(1.5, 2.0, 2.5)		6.00		N70° W		S B5083の目隠しか。
S B	5083	5B	J	I18/J19~ J18, 19	独立柱建物	鎌倉	4間(1.0, 1.6, 1.2, 1.2) ×3間(1.7, 1.7, 2.2)	5.00	5.60	28.00	N20° E	なし	ややひびつ。
S B	5084	5B	IJ	IJ17~20, JA17~20, JB17~20, JC18~20	独立柱建物	鎌倉	6間(1.6, 1.8, 2.4, 2.2, 1.6, 2.7) ×3間(2.5, 2.5, 2.5)	12.30	7.50	92.25	N18° E	S K5046 5053	複数の独立柱建物の可能性あり。周辺には多数P1があり、S K5009・5047・5008・5042なども建物内土坑になる可能性がある。
S B	5151	5C	I	R16, S16, 17	独立柱建物		3間(2.0, 2.0, 2.3) ×2間(1.6, 1.7)	6.30	3.30	20.79	N20° E	なし	
S B	5152	5C	I	P17, Q17, 18, R17, 18, S17, 18	独立柱建物		4間(1.8, 1.8, 2.4, 2.7) ×2間以上(2.5)	(2.50)	8.7	(21.75)	N18° E	S K5109	総柱。東に広がらず、2間以上×2間の独立柱建物の可能性あり。
S B	5153	5C	I	M~017, 018	独立柱建物	室町前	4間(2.0, 2.5, 2.0, 2.7) ×2間以上(1.7, 1.6)	9.20	(3.30)	(30.36)	N18° E	S K5155	
S B	5154	5C	I	N016, 17	独立柱建物		4間(2.5, 2.5) ×2間(2.6, 2.6)	5.00	5.20	26.00	N2° E	なし	ほかの独立柱建物と大きく方向が違う。
S B	6028	6	G	W7, 8, V7, 8	独立柱建物	室町	4間(2.5, 2.5, 2.5, 2.2) ×2間(2.0, 1.6)	9.70	3.60	34.92	N20° E	なし	

第8表 独立柱建物一覧表

遺構番号	調査 年度	大 地区	小地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
S K 4003	4	J	X16	土坑		1.20	0.80	0.70	風倒木か。
欠番	4004	4							
S K 4005	4	J	X21、Y21	土坑		1.60	1.00	0.20	覆土か。
S K 4006	4	J	V20-21	土坑		1.20	0.60	0.10	半圓形の落ち込み、覆土か。
S K 4007	4	J	O21-22	土坑	室町	—	—	0.05	S K 4008・4009・4016と一連の遺構。
S K 4008	4	J	N21-22、O21-22	土坑	室町	—	—	—	S K 4007・4009・4016と一連の遺構。
S K 4009	4	J	N21・O21	土坑	室町	—	—	0.10	S K 4007・4009・4016と一連の遺構。
S K 4010	4	J	V23	土坑		(1.00)	1.00	0.10	南側調査区外。
S D 4011	4	J	O21	溝		—	—	—	S K 4007・4009・4009-4016と一連。
S D 4012	4	J	O21	溝		—	—	—	S K 4007・4009・4009-4016と一連。
S D 4013	4	J	L17、M17	溝	鎌倉	(4.90)	0.30	0.20	S K 4018南側溝、S D 4014と一連の遺構。
S D 4014	4	J	K17、L17	溝	鎌倉	7.90	0.40	0.20	S K 4018南側溝、S D 4013と一連の遺構。
S D 4015	4	J	V21	溝		1.60	0.20	0.10	溝状の落ち込み。
S K 4016	4	J	N21-22、O21-22	土坑	室町	3.40	—	0.45	S K 4007・4009・4009と一連の遺構。
S K 4017	4	J	S20	土坑	室町	2.20	1.20	0.20	土壌墓の可能性あり。
S R 4018	4	J	K16~T、U15	道路	鎌倉~室町		4.00~5.00	0.30~0.40	東西方向の道路状遺構。延長約200m。両側遺構を伴う。S R 5010・5058、S D 5032と同じ。
S D 4019	4	J	V17	溝		—	0.50	0.20	覆土に切られる。
S D 4020	4	J	V20	溝		1.00	0.20	0.10	溝状の落ち込み。
S D 4021	4	J	X23	土坑		(0.50)	0.40	0.25	
S K 4022	4	J	W23、X23	土坑		(0.70)	(0.30)	0.20	調査区外のため規模不明。
S K 4024	4	J	V21	土坑	鎌倉	1.00	1.00	0.20	
S D 4028	4	J	V16~V20	溝			0.4~0.6	0.10	S D 5015と約4.0m離れて平行。道路状遺構側溝か。
S D 4029	4	J	JT21.22	溝			2.40	0.50	調査時は覆土溝。区画東溝。
S D 4030	4	J	U19~T22	溝			0.50	0.15	調査時は覆土溝。S D 4029に平行。
S A 5001	5A	E	K22~L24	土塁?		—	—	—	S D 5002との比高0.4~0.5
S D 5002	5A	E	K22~M24	溝		—	2.00~	—	S A 5001とセット、北に向かい広く深くなる。
S A 5003	5A	J	O4~P3	土塁?		—	—	—	S D 5004との比高0.8
S D 5004	5A	J	O4~6~P3~6	溝	室町	—	7.60~9.00	0.80	下面3.5~5.3m幅ではほぼ平行。道路跡か。
S A 5005	5A	J	O6、P6	土塁?		—	—	—	S D 5004との比高0.5~0.6
S D 5006	5A	J	P10	溝		—	0.50	0.10~0.20	近年の溝の縮減か。
S D 5007	5A	J	P10	溝		—	最大1.0m	0.10~0.20	溝状の落ち込み。
S K 5008	5A	J	T13.14	覆土		—	—	—	覆土。
S D 5009	5A	J	V15~KA16	溝		—	0.50	0.20	4次の現品溝と3.0m離れて平行。埋土は耕作土に近いが近世以降の道路側溝か。
S R 5010	5A	J	T、U、V14.15	道路	鎌倉~	—	上面3.2 底1.4	0.50~1.20	S K 4018の続き、部分的に硬化面あり。
S K 5011	5A	J	P10	土坑		0.90	0.70	0.30	骨?出土。
S D 5012	5A	J	O6.7~P6.7	溝		—	0.60	0.10	S D 5006溝約2.8mで平行。S D 5013とは1.0m離れて平行。
S D 5013	5A	J	O、P7	溝		—	0.50	0.050~0.30	S D 5012と1.0m離れて平行。
S D 5015	5A	J、K	T15~A16	溝		—	0.30	0.20	S D 4028に4.0m離れて平行。道路状遺構側溝か。
S D 5031	5B	I	XY16~X19	溝	室町	—	4.50	0.2	区画西溝。西側は急流に落ち込むが、東側ははっきりしない。S D 5040と接続。
S D 5032	5B	I、J	W14~T15.16	道路	室町	—	3.00	0.1	道路状遺構。北部は削平。近世遺物含む。S R 5058につながる。
S D 5033	5B	I	V、W、X16	溝	近世以降?	—	0.30	0.10	溝の痕跡か。
S D 5034	5B	I	V、W17	溝	近世以降?	—	0.30	0.10	溝の痕跡か。
S D 5035	5B	I	V17.18、W18	溝	近世以降?	—	0.30	0.10	溝の痕跡か。

第9表 遺構一覧表1

遺構番号	調査 区次	大地 区	小地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
S D 5036	SB	I	X16, W17~ W19, V19	溝	室町	—	0.30	0.40	S D5031の側溝か、S D5037と4.5m離れて西に平行しており、それに伴う可能性もある。
S D 5037	SB	I	V15~19	溝	鎌倉	—	不明	0.20	S D5036の西4.5m、S D5102の東5.5m(外と外)に平行する。調査区外のため幅不明、S D5033~5035に切られる。
S K 5038	SB	I	X17, 18	土坑	室町	3.20	3.00	0.50	S D5031掘削後に検出。周囲に小さなビレットがあり、何らかの構造物があったものと考えられる。肩から底部に厚さ0.05m程で粘土が貼られる。
S K 5039	SB	I	XY19	土坑	室町	0.80	0.50	0.45	S B5084の柱穴。
S D 5040	SB	J	A~E, 14~16	溝	室町	36.00	0.30~3.00	0.10~0.30	区画溝北溝、S D5031とつながる。東側で1段下がるころはS D5060とした。直線的ではない、北西側は削平。
S K 5041	SB	J	A17	土坑	—	1.00	1.00	0.10	不整形の落ち込み、埋土除去後P1i多数検出。
S K 5042	SB	I, J	Y19, A19	土坑	鎌倉	2.50	(3.0)	0.20	埋土除去後P1i多数検出。
S K 5043	SB	J	C, D20	土坑	鎌倉	1.50	1.00	0.40	—
S D 5044	SB	J	B16~	溝	鎌倉~室町	—	2.00	0.20	S D5040と一連の溝、S B5074を切る。
S K 5045	SB	I	Y18	土坑	—	1.20	0.70	0.15	埋土除去後、S B5084のP1iを検出。
S K 5046	SB	J	B19	土坑	室町	2.00	2.00	0.30	埋土から炭化材や粘土が出土しているが、焼け締まった様子は見られない。産業土坑か、S B5084の建物内土坑か。
S K 5047	SB	J	A19	土坑	室町	2.30	—	0.30	S K5068に切られる。S K5069を切る。
S D 5048	SB	J	A18	溝	鎌倉	2.80	1.10	0.30	風倒木か。
S K 5049	SB	J	BC17, 18	土坑	鎌倉~室町	7.70	3.50	0.30	複数の土坑の可能性あり、焼土・粘土が露呈されたように見られる。数層2点あり。
S K 5050	SB	J	A18	土坑	—	1.60	1.00	0.15	不整形の落ち込み、埋土除去後P1i検出。
S D 5051	SB	J	EF13~15	溝	—	—	1.50	0.60	断面V字、北にある墓の西土層につながる。S D5032の下層の溝がL字に曲がったもの、区画溝か。
S D 5052	SB	I	Y18, 19	溝	—	2.00	0.40	0.10	溝状の落ち込み、埋土除去後P1i検出。
S D 5053	SB	J	I17, 18	溝	鎌倉	—	0.50	0.10~0.20	S D5062の東側に沿う。S D5032に接続。
S D 5054	SB	J	J18	溝	室町	—	—	0.05	調査区東隅で西層のみ検出。
S K 5055	SB	J	I14, 15	土坑	室町	1.30	1.20	0.10	—
S D 5056	SB	J	A16~J17	溝	—	—	—	—	S D5032下層で検出。S D4029と接続する溝、S D5061と接続する可能性あり。S D5057と接続。
S D 5057	SB	J	J17~	溝	—	—	2.0~2.7	0.30	S D4029と接続する溝、S D5057と接続する。区画溝。
S R 5058	SB	J	G15~	道路	鎌倉~室町	—	3.50	0.25	S D5032との切り合いは不明だが1段深くなる。両側に幅広い側溝あり、深さ0.5m、S R4018と同じ。
S K 5059	SB	J	G16	風倒木	—	3.40	1.50	0.50	—
S D 5060	SB	J	F17~H18	溝	鎌倉~室町	—	1.20	0.30	S D5040掘削後に検出した溝。
S K 5061	SB	J	FG14, 15	土坑	鎌倉	3.20	2.00	0.70	風倒木か。
S D 5062	SB	J	GH17~H20	溝	鎌倉	—	4.40	0.60	区画溝東溝、S D5040・5060につながる。
S K 5063	SB	J	B19	土坑	鎌倉~室町	2.50	2.10	0.10	S K5049を切る。1.0m近い焼けた石や粘土の塊が多量に含まれる。焼けた様子はなく産業土坑と思われる。S B5084の建物内土坑か。
S K 5064	SB	J	EF20	土坑	—	2.30	1.80	0.10	不整形の落ち込み。
S D 5065	SB	J	J20, 21	溝	—	—	0.80	0.10	S D5053と4.0m離れて平行する。底はほぼ平坦。
S D 5066	SB	J	FG19, 20	溝	鎌倉	—	0.60	0.05	埋土除去後P1i検出。
S K 5067	SB	J	B18	土坑	鎌倉	—	(5.0)	0.10	S K5049に切られて形状不明。
S K 5068	SB	J	A19	土坑	鎌倉	1.50	2.00	0.30	底に0.1m程粘土が貼られる。焼けた様子は見られない。
S K 5069	SB	J	B19	土坑	鎌倉	—	2.50	0.10	S K5047に切られ、形状不明。
S K 5070	SB	J	B18	土坑	鎌倉	1.40	0.60	0.20	P1i形状か。
S K 5072	SB	J	AB16, 17	土坑	鎌倉	1.60	1.00	0.10	埋土除去後P1i検出。
S H 5074	SB	J	D16	塼穴住居	古代	5.00	3.70	0.20	形状不明。竈・柱穴・溝溝など不明。東中央に土管が並ぶ。煙道か、S D5044に切られる。
S D 5075	SB	J	D18, 19	溝	—	—	—	0.30	不整形な溝状の落ち込み。
S F 5076	SB	J	B18, 19	粘土	室町	0.70	0.60	0.10	焼けた粘土の塊、竈の痕跡か。
S F 5077	SB	J	B17	粘土	室町?	2.00	1.00	0.25	焼けた粘土の塊、竈の痕跡か。

第10表 遺構一覧表2

遺構番号	調査次	大区	小地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	備考
S/K 5078	58	J	B17	土坑		—	—	0.15	S/K 5067と同じか。S/K 5049、S/F 5077に切られる。
S/K 5101	5C	I	T15	土坑		1.20	1.40	0.40	南西にテラスあり。
S/D 5102	5C	I	U14~17	溝		—	(0.5)	0.30	調査区東端で東道沿いに確認。S/D 5037とは外方で5.5m。道南側狭小。S/D 5104と接続。
S/D 5103	5C	I	R16~T16	溝	鎌倉?	—	—	0.20	不整形な溝状の落ち込み。
S/D 5104	5C	I	T13.15~	溝	室町	—	2.5~0.8m	0.20	東端はS/D 5032と同じ道路状遺構。南へ行くと側溝状となる。
S/D 5105	5C	I	U16~	溝	室町	—	1.50	0.10	S/D 5104とは約2.0m離れて平行。その間は平坦。S/D 5110と同じ溝。
S/D 5106	5C	I	S16	溝		1.80	0.50	0.10	L字に曲がる溝状の落ち込み。埋土除去後P1t検出。
S/D 5107	5C	I	S16	溝	室町	0.80	0.40	0.45	S/B 515のP1t
S/D 5108	5C	I	ST15	溝		3.20	1.00~1.50	0.10	溝状の落ち込み。
S/K 5109	5C	I	R18	土坑	室町	2.70	(1.40)	0.35	南は調査区外のため不明。方形土坑。S/B 515の建物内土坑か。
S/D 5110	5C	I	PQ14	溝		—	—	—	S/D 5106の上層。覆土のため形状不明。
	5111			欠番					
S/D 5112	5C	I	PQ14	溝		—	1.20	0.20	S/D 5104とS/D 5110をつなぐように検出された溝。切り合い不明。
S/D 5113	5C	I	J10.11.12~P12	落ち込み	近世	22.00	4.00~8.00	0.40	調査区北部の溝状の落ち込み。覆土か。
S/D 5114	5C	I	O14	溝		4.70	0.90	0.10	S/D 5116掘削後に検出した溝状の落ち込み。
S/K 5115	5C	I	R16.17	土坑		2.20	0.90	0.20~0.40	
S/D 5116	5C	I	W14	溝	近世	15.00	3.00	0.50	S/D 5110、5138と接続。1段深くなる。
S/D 5117	5C	I	M15~L17	溝		—	1.80	0.25	二段に分かれ。西側は幅1.1m、高さ0.1m。東側は幅1.3m、高さ0.1mとなる。
S/K 5118	5C	I	N15	落ち込み		0.90~2.00	2.60	0.10	不整形な落ち込み。
S/D 5119	5C	I	L12	溝	室町	1.20	0.30	0.10	S/D 5113除去後に検出。溝状の落ち込み。
S/D 5120	5C	I	K14~J16	溝		—	0.40~0.80	0.10~0.20	S/D 5123と同じ溝。S/D 5120を切る。
S/K 5121	5C	I	Jk15	土坑	鎌倉	1.30	1.20	0.20	
S/K 5122	5C	I	K17	土坑		1.30	1.10	0.10	
S/D 5123	5C	I	Jk10~J17	溝	鎌倉	—	0.30~1.00	0.10~0.30	S/D 5138に切られる。S/D 5131を切る。
S/K 5124	5C	I	M1.12	落ち込み	鎌倉	5.00	3.60	0.10	S/D 5113除去後に検出。不整形の落ち込み。
	5125			欠番		(12.5)	(0.7)	0.20	北側のみ検出。S/D 5135と平行。
S/D 5126	5C	I	GH16	溝	室町	4.20	0.70	0.10	S/D 5135と一連の遺構。
S/D 5127	5C	H1	HX11~IJ12	溝	鎌倉~近世	—	0.8~1.2	0.20	植林で高くなっているところの境のため、新しい溝である可能性がある。南側は削平。
S/K 5128	5C	I	Jk13	土坑	鎌倉	2.00	1.60	0.10	不整形の落ち込み。
S/D 5129				欠番		—	0.50	0.15	
S/D 5130	5C	I	G12.13	溝		1.60	0.50	0.10	落ち込み。
S/D 5131	5C	I	F12~H12	溝	鎌倉?	—	0.90	0.10~0.30	S/D 5104につながる溝。M13より西側でははっきりした形状となる。S/D 5142と同じ溝。
S/K 5132	5C	I	IJ10.11	落ち込み		4.90	2.20	0.20	不整形の落ち込み。
S/D 5133	5C	I	F10~D16	溝		—	0.70~1.00	0.10~0.30	すべての遺構を切る。現況部の溝と一致。
S/D 5134	5C		HW1~13~IE13	溝	近世	—	1.00~1.40	0.20	S/D 5133以西で検出。S/D 5138、5150を切る。
S/D 5135	5C		HW14~IB14	溝	室町	—	Y.A:1.2 B.C:2.1	Y.A:0.4 B.C:0.05	S/D 5126から途切れながら続く一連の溝。S/K 5140、S/R 5141を切る。
S/K 5136	5C	I	B14	土坑		2.80	0.70	0.10	不整形の落ち込み。
S/K 5137	5C	I	C11	土坑		1.20	1.20	0.60	底に石があるが用途不明。S/D 5127に切られる。
S/D 5138	5C	I	A13~B13	溝		—	0.80	0.30	S/D 5134に切られる。
S/K 5139	5C	I	CS~BC11	落ち込み	室町	7.00	1.0~3.0	0.20	不整形の落ち込み。
S/K 5140	5C		HX15~IA15	土坑	鎌倉	5.80	4.0以上	0.30	埋土に細かい石が多量に含まれる。南は調査区外。

第11表 遺構一覧表3

遺構番号	調査 年度	大区 区	小地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	備考
S R 5141	5C	H	WX10~XY13	土坑		—	(2.0)	0.30	南部に復元、西側部に幅0.4mの溝。東側はS D5150に切られる。S D5135より北側は浅く形平されている。
S D 5142	5C	R. I	HW12~IF12	溝	室町	—	1.2~1.6	0.2~0.4	S D5131と同じ溝で、S D5133より西側をS D5142とした。S D5143・5147とつながる。
S D 5143	5C	H	X10~W12	溝	室町	—	1.2~1.6	0.2~0.4	S D5142との合流点北側をS D5142、西をSD5147とした。
S D 5144	5C	H	W10.11	溝	近世	—	—	0.33	北西隅で一部かかるのみ。
S K 5145	5C	H	W12.13	土坑	覆乱	4.50	3.50	0.60	不整形。覆乱。
S D 5146	5C	H	W14~T13	溝	鎌倉?	12.50	0.90~1.40	0.20	S D5126・5135と一連の溝か。
S D 5147	5C	H	R12~Y12	溝		—	1.50~3.00	0.30~0.80	S D5142・5143合流点西側、崖斜面を人工的にテラスを作るためにカットされたと考えられる。西に向かって深くなる。
S D 5148	5C	H	RS12~R14	溝		—	0.20~1.50	0.10	南北方向の溝状の落ち込み。S D5134に向かって深くなっており、自然のものか。
S K 5149	5C	H	Y14.15	土坑		1.50	1.50	0.30	S K5140下層で検出。周囲被熱、内に炭光燐。
S D 5150	5C	H	X13~15	溝		—	1.00~1.30	0.40	S D5135下層で検出。S D5134に切られる。S R5141を切る。
S K 5155	5C	I	O17.18	土坑		(2.0)	(1.0)	0.10	S B5153の建物内土坑か。
S D 6001	6	H	F11~F12.13	溝		—	1.10~1.80	0.2~0.35	区画溝か道路側溝。S D6009・6006と交差するが切り合ひ不明。交差点より西では北側が砂礫層で、路面か。
S D 6002	6	H	P13~Q14	溝		—	0.60	0.10	S D5136と一連の溝。
S D 6003	6	H	L9~R12	溝	室町	—	—	—	C地区S D5147。北側が崖になっており、規模不明。
S D 6004	6	H	L9	溝		2.40	0.70	0.20	溝状の落ち込み。縄文?土層出土。
S K 6005	6	H	L10	覆乱		—	—	—	
S R 6006	6	H	J12	道路		—	2.40	0.50	硬化面が部分的に残る。S D6029を切る。S D6009に接続か。
S K 6007	6	H	I12	土坑		2.60	1.20	0.10	S K6003と同じ土坑か。S K6004に切られる。
S D 6008	6	H	JK12	落ち込み	近世?	—	—	0.1~0.2	不整形な溝状の落ち込み。
S D 6009	6	H	J9.10~K9	溝		—	(5.0)	0.90	S D6003と同じか。
S D 6010	6	H	G12~J12	溝		—	0.30	0.20	堀に伴う溝か。
S D 6011	6	GH	GX9~H47~H9	溝	近世?	—	1.2~1.4	0.4~0.5	区画溝。南・北側には東側にテラスあり。埋土は新しい土が入る。覆乱溝と重なる。
S R 6012	6	G	T6~Y6	道路	鎌倉?	—	2.80	0.05~0.3	西端から中央まで砂利が敷かれた硬化面あり。北に幅0.6m、南に幅1.2mの溝あり。
S D 6013	6	G.H	GX7~H49	溝	近世?	—	1.40	0.50	S D6011に切られる。
S K 6014	6	G	W8		近世以降	0.90	0.90	0.60	周囲に同様の穴多数あり。伐木跡か。
S K 6015	6	G	W7	土坑	鎌倉	3.50	1.20	南から0.5, 0.7, 1.1	南からテラスが2段、細くて深い。性格不明。
S K 6016	6	G	Y8	土坑	近世以降	—	—	0.50	不整形。風倒木か。
S D 6017	6	G	V7~W8	溝	鎌倉	—	1.0~1.5	0.10	
S K 6018	6	G	X9	土坑	近世か	1.00	0.80	0.50	落ち込み除去後に検出。
S D 6019	6	G	S7~U7	溝	鎌倉	—	—	0.30	区画溝か。覆乱され、不整形。南側は調査区外。
S K 6020	6	G	U5.6	土坑		2.10	0.90	0.50	S R6012に切られる。
S D 6021	6	G	T7	溝	鎌倉	—	—	—	S D6019と同じ溝。
S K 6022	6	H	K12	土坑	近世	0.90	0.80	0.30	
S K 6023	6	H	H12	土坑	鎌倉	—	—	—	S K6007と同じか。
S K 6024	6	H	H12	土坑		1.60	1.40	0.20	S K6007, 6024を切る。
S R 6025	6	H	A6~B7.8	道路?		—	0.50	0.05	硬化面のみ。厚さ0.05m。
S D 6026	6	H	A7.8	溝		—	0.60	0.30	S D6011, S R6025に切られる。
S D 6027	6	H	T6~W6	溝	鎌倉?	—	0.60	0.20	S R6012北側側溝。
S D 6029	6	H	IJ11.12	溝		—	1.50	0.40	区画溝か。S R6006に切られる。
S D 6030	6	H	L8	溝		—	0.50	0.10	堀切か。
S D 6031	6	H	L8	溝		—	0.60	0.10	堀切か。

第12表 遺構一覧表4

第5章 出土遺物

小野城跡出土遺物は、整理箱で82箱（約100kg）である。第5次調査B地区からの出土遺物ももっとも多く、他の地区からの出土は少ない。特に第6次

調査では整理箱2箱（約3kg）の出土があったのみである。遺物も小破片が大半であり、遺構の時期を決定するには根拠に乏しい。

第1節 縄文土器・弥生土器・石器

縄文土器・弥生土器・石器（1～20）

特に集中する様子は見られず、広い範囲で出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。1は押型文土器の小片で、外面内面ともにポジティブな楕円文の押型文が見られる。内外は同様の施文であるが、外面は横方向、内面は縦方向で施されている。2は突帯文土器で、素文突帯である。3・5・11はく字状口縁の甕で、3・5の口縁端部は刻みが施される。内外面とも粗いハケメが施され、5・11の口縁部内面には櫛播波状文が2段施されている。4は受口状口縁の甕で、山形口縁を呈するものである。粗いハケメ調整され、受口上部には左下がりの刺突が施されている。6は無頸壺の口縁部で、灰色を呈

する。棒状浮文を貼付け、上面に刻みを施した後、櫛播波状文・横線文を施文している。7～9は頭部から体部にかけての小破片である。10はハケメの後、線刻が施されているものと思われる。12は受口細頸壺で、外面はハケメ後ミガキ調整される。口縁部は刺突により鋸歯文が施され、口縁下端は刻みが見られる。13は広口壺で、口縁部に刺突が見られるが、全体に風化しており調整は不明である。16・17はサヌカイト製の石織である。18は石斧と考えられる。19は側面全面に刃取りが見られ削器と考えられる。20は緑色片岩系の石庖丁で、3ヶ所に穿孔が見られる。

第2節 古代の遺物

S H5074出土遺物（21～28）

21・22は土師器甕である。22は口縁部が短く端部を丸く収めるもので、体部に比べ口径は小さい。23～25は上半部のみ出土であるが、口縁部が短く外反が小さいことから、26～28と同じ土管状土製品の可能性がある。26～28は、煙道として利用していた可能性のある土器である。底部まで見つかった26・28では、焼成以前から底部が無く、土管状を呈している。甕の転用の可能性もあるが、土管状土製品とした。類例は確認できず、いずれも口縁部は甕の形

状を呈する特徴がある。口縁部は端部内面がヨコナデされることにより若干立ち上がるものの、明瞭ではない。体部も膨らみが小さく、寸胴形を呈する。25・27は外面のハケメが明瞭であるが、23・24・26・28は痕跡程度であり明瞭ではない。内面のハケメも同様で、25・28はハケメが見られず、他も痕跡程度である。26・28の底部は、ナデ・ヨコナデのより成形されている。類例の無いものであるが、甕の形状からいずれも8世紀代の遺物と考えられる。

第3節 中世～近世の遺物

S K5049出土遺物（29～48）

29～33は土師器小皿である。29～32は口縁部外面がヨコナデにより直立するもので、中北勢系と思われる。33は南伊勢系である。33は外面が風化し、被熱により赤化している。内面に油煙痕があり、外面が黒変していることから、灯明皿として使用された

ものと考えられる。34～36は土師器皿である。34・35は中世前期のものと思われる。36は内面が風化している。37・38は尾張型の山茶碗小皿で、37は第5型式、38は第7または8型式である。37は見込み部に重ね焼き痕が見られる。38は内面に厚く自然軸があり、重ね焼き痕と思われる軸着物が付着している。

39～44は山茶碗である。39は渥美型第6型式のもので、外面口縁部から内面に自然軸が見られる。口縁端部は2箇所に打ち欠きが見られ、輪花を模倣している可能性がある。40～43は尾張型の山茶碗で、40は第7型式、41は第10型式、42は第12型式、43は第7または8型式である。41は、高台が剥離している第7型式の山茶碗である可能性がある。また42は焼成があまく、全体に風化している。43・44は小破片であるが、外面底部に墨書が見られる。43は「乃」、44は「南」と思われる。45は石硯で、割れた面に沿って附着物があり、砥石に転用している可能性がある。46は鉄製品で、鍛造切片と思われる。47・48は鉄滓である。

S K5063出土遺物 (49～51)

49・50は土師器小皿で、口縁部は幅広くヨコナデされる。共に歪みがある。51は高台が剥離した尾張型第7型式の山茶碗で、高台が剥離した後に底部外面に墨書がされている。ハネの痕跡が確認できるが文字は確定できず、花押の可能性もある。

S K5038出土遺物 (52～55)

52は中北勢系の土師器小皿、53は南伊勢系の土師器皿、54・55は中北勢系の土師器羽釜である。54は使用により外面が剥離しているのか、ハケメが見られない。55は鏝部・口縁部が短く、口縁部外面のヨコナデにより口縁部が内傾するものである。小野城跡では同様のものが数点出土している。

S K5046出土遺物 (56～59)

56～58は南伊勢系の土師器羽釜である。いずれも外面鏝部下には煤が厚く附着している。59は常滑産陶器甕である。10型式に属するものである。埋土及び周辺では同一個体と思われる常滑破片が多数出土したが、大半が体部であり、接合はしなかった。

S K4007・4008・S D4016出土遺物 (60～69)

60は土師器小皿で、成形時のナデの痕跡が明瞭に残る。61は尾張型第10型式の山茶碗である。62～65は土師器羽釜で、62～64は南伊勢系、65は中北勢系のものである。いずれも外面口縁部と鏝部下に煤の附着が見られる。66～68は土師器鍋の口縁部小片で、68は三河産の内耳鍋の可能性もある。69は瓦質の鍋で、外面はナデ、内面はミガキが施されるが煤附着のため不明瞭である。

S K4024・5070出土遺物 (70・71)

ともに、尾張型第6型式の山茶碗小皿である。70は口径10.0cmで実測したが、口縁部は歪みが大きく、不確定である。

S K5048出土遺物 (72)

京都系と考えられる土師器小皿である。歪みが大きい。内外面に煤が付着し、口縁端部に油煙が付着していることから、灯明皿と考えられる。

S F5076出土遺物 (73)

尾張型第10型式の山茶碗である。S F5076断ち割り時に粘土内から出土した。

S K5074・5055出土遺物 (74・75)

74は南伊勢系の土師器羽釜、75中北勢系の土師器茶釜である。75は焼成前の穿孔が口縁部下に2箇所残っている。

S K5109出土遺物 (77～79)

77・78は土師器皿で、77は京都系、78は南伊勢系と考えられる。79は南伊勢系の土師器鍋である。外面にはあまり煤が付着していない。

S K5123・6023・6015出土遺物 (76・80～82)

76は第6型式、80は第3型式か4型式、81は第7型式の尾張型山茶碗、82は尾張型第6型式の山茶碗片口鉢である。76の内面は磨耗している。80の内面には自然軸が付着している。

S B4001出土遺物 (83・84)

83は京都系と考えられる土師器皿で、内外面とも丁寧にヨコナデされている。84は古瀬戸後Ⅱ期の銅皿である。

S A5153出土遺物 (85)

尾張型第8か9型式の山茶碗である。

S B6028出土遺物 (86)

南伊勢系の土師器小皿である。

S B5084出土遺物 (87・88)

87・88は尾張型第6型式の山茶碗で、外面底部に墨書が見られる。87は下半部だけであるが、上の文字は「仏」、下は「阿」「門」「條」などが考えられる。88は判読できない。

S D5032出土遺物 (89～98)

89は中北勢系の土師器小皿である。口縁部の一部が成形時の歪みか意図的なものかは不明であるが、内側に押さえられたようになっている。90は尾張型

第7型式の山茶碗、93は尾張型第6型式の山茶碗片口鉢で、93の内面は使用により磨耗している。97は古瀬戸後IV古段階の天目茶碗の高台部を加工したもので、側面を打ち欠いて成形している。91は美濃登窯第10か11小期の灯明皿、92は瀬戸登窯第8か9小期の刷毛目茶碗である。94は瀬戸登窯第2小期の描鉢で、使用による磨耗が激しく、軸は剥げ、描目の単位は不明である。95は瓦質の碗である。96は近世のものと思われる土人形。怒ったような顔の表情から明王ではないかと思われる。98は鉄製品で、鏡と考えられる。

S R5010出土遺物 (101~103)

101は第3型式、102は第6型式の尾張型山茶碗で、101は外面底部に重ね焼き痕が、102は内面に自然軸が見られる。また、外面の割れ口と高台部に漆かと思われる付着物が見られる。103は瀬戸美濃登窯11小期の磁器端反碗で、S R5010を切る攪乱に伴うものである。

S D5105出土遺物 (104)

土師器小皿である。外面と内面底部近くまで丁寧なヨコナデが施され、京都系かと思われる。

S D5142出土土器 (105)

尾張型第10型式の山茶碗である。外面口縁部から内面にかけて厚く自然軸が見られる。

S D5134出土遺物 (106~108)

106は尾張型第6型式の山茶碗である。107は砥石で、全面に使用痕が見られるが、特に一面をよく使用している。108は先端部が面取りされており、石斧を再利用して砥石としている可能性がある。

S D5116出土遺物 (109~112)

S D5116が、方形に一段深くなるところから出土しており、近世以降の土坑出土の可能性があり。109は登窯第1小期の陶器鉄絵皿である。外面底部に墨書が見られるが、文字は不明である。110は火打金で、結着している石英は火打石と考えられる。111・112は鉄鎌である。111は破片であり、これも火打石になる可能性がある。

S D5054出土遺物 (113)

南伊勢系の土師器小皿である。

S D5126出土遺物 (114)

尾張型第11型式の山茶碗である。外面口縁部から

内面にかけて自然軸が付着している。

S D6019出土遺物 (115・116)

113は尾張型第5型式の山茶碗である。外面に煤が付着している。114は尾張型第6型式の山茶碗片口鉢である。

S D6011出土遺物 (117)

瀬戸登窯第11小期の描鉢口縁部小片である。

S D5143出土土器 (118)

中北勢系の土師器羽釜である。鏝部下は煤が厚く付着しており、調整不明瞭である。口縁部は直立に立ち上がり、端部上面はヨコナデにより面を持つ。

S D5004出土遺物 (119)

常滑産の片口鉢で、内面は使用により磨耗している。10型式である。

S D5135出土遺物 (120)

青磁碗の側面と高台部を打ち欠いた加工円板である。

S D5060出土遺物 (121)

121は古瀬戸後IV古段階の持懸形香炉である。貼り付けた脚部が1箇所のみ残存している。全体に重ね焼き痕と思われる軸着痕跡が多く見られる。

S D5031出土遺物 (122~125)

120は陶器椀皿で、瀬戸大窯II期のものである。全面に鉄軸が施されている。見込み部にトチン痕が見られる。121・122は中北勢系の土師器羽釜である。123は55と類似しており、口縁端部外面はヨコナデにより内傾している。体部外面にはハケメの痕跡は見られず、ミガキ調整されていると思われる。125は砥石で、2面は表面が剥離しており、残り2面には使用痕がある。

S D5040出土遺物 (126~132)

126は古代の土師器甕である。S H5074からの混入と考えられる。内外面とも風化しており、調整は不明である。127~131は、いずれも中北勢系の土師器羽釜である。いずれも口縁端部内面が強くヨコナデされ、面を持っている。129以外は、端部が外に突出している。130・131の外面にはハケメが見られない。132は常滑産の片口鉢である。焼きは軟質で、12型式または11型式と思われる。内面は使用により磨耗している。

S D5044出土遺物 (133)

常滑産陶器の加工円板である。側面打ち欠き後研磨している。

第4次調査区Pit出土遺物 (134・135)

134は尾張型第4型式の山茶碗である。内面に自然釉が見られる。133は意祐通宝(北宋、初鋳1056年)である。

C地区Pit出土遺物 (136・137)

134は中北勢系の土師器小皿、135は尾張型第6型式の山茶碗である。

第5次調査B地区Pit出土遺物 (138~141)

138は南伊勢系の土師器小皿、139は中北勢系と思われ、外面のヨコナデにより口縁部が直立気味になる。140は京都系と思われる土師器皿で、内外面に丁寧なヨコナデが施されている。141は尾張型第5型式の山茶碗である。全体が風化している。

第4次調査区・第5次調査A地区包含層など出土遺物 (142~149)

142は中北勢系と思われる土師器皿である。口縁部は直立気味で、断面は箱形を呈する。143は尾張型第6型式の山茶碗で、見込み部は磨耗し、内外面に墨が付着していることから、転用碗と考えられる。143は尾張型第7型式の山茶碗で、見込み部の磨耗は顕著ではないが、墨と付着物が見られることから転用碗の可能性はある。145は常滑産の片口鉢である。10型式または9型式と考えられる。146は加工円盤で、伊万里を加工したものであり、近世以降のものである。147・148は砥石である。147は2面が割れているが、割れた部分も使用されていることから、使用時に既に割れていたと考えられる。他の2面も使用されている。148は全面使用されている。149は開元通宝(唐、初鋳621年)である。

第5次調査B地区遺構検出中出土遺物

第5次調査B地区では黒ボク掘削中に遺物がまとまって出土しており、本来は遺構に伴うものであったと考えられる。小地区に分けて遺物を記述する。

I V ~ I Y 検出中出土遺物 (150~161)

150・151は南伊勢系の土師器小皿で、150は内外面に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。152は京都系と考えられる土師器皿で、外面に煤及び付着物があり、灯明皿と考えられる。154は唐津産の陶器小皿である。155は龍泉窯の青磁碗である。156

~158は信楽産の陶器甕である。小破片のため、傾きは不正確である。口縁部はN字状を呈し、内面の凹線も残ることから、14世紀後葉~15世紀前葉の遺物と考えられる。157と158は接合しないが、同一個体の可能性がある。159は常滑産陶器12型式または11型式の片口鉢で、内面は風化し、外面に煤が付着している。160は砥石、161は近世の軒丸瓦である。

J A・J B15、16 検出中出土遺物 (162~165)

162は信楽産陶器甕で、内外面が被熱しており、煤が付着している。163は真鍮製の煙管の雁首、164は青銅製の小皿で、輪花風の装飾が見られる。内面に黒色付着物があり、お歯黒の可能性はある。165は鐵製の鉄製品である。

J A17~20 検出中出土遺物 (166~181)

166~170は土師器小皿である。168は中北勢系で、それ以外は南伊勢系である。168の内面には付着物が見られる。171は京都系の土師器皿で、内外面には黒斑が見られる。内面に墨が付着している。172・173は尾張型第6型式の山茶碗小皿で、共に内面に自然釉が見られる。174~176は古瀬戸後IV古段階のもので、174・175は平碗、176は直縁大皿である。共に灰釉が施される。177は常滑産陶器甕の肩部小片で、押印が見られる。178は古代の土師器甕で、外面は被熱により剥離している。179~181は中北勢系の土師器羽釜である。

J B17~20 検出中出土遺物 (182~198)

182は須恵器蓋で、壺蓋になると考えられる。頂部はナデ調整されている。183・184は中北勢系の土師器小皿、185~187は土師器皿である。186・187は京都系と考えられる。186は内外のヨコナデが雑なためか、大きく歪んでいる。188~191は山茶碗である。189~191は尾張型第6型式のもので、189は内面に墨と思われる付着物があり、191は底部外面に「α」状の墨書が見られる。188は尾張型第10型式のもので、外面下部に煤が付着している。192は石硯で、使用の際にはほとんど見られない。193は鉄製錠である。194は南伊勢系の土師器鍋、195~198は土師器羽釜である。195は南伊勢系、196~198は中北勢系で、197・198は口縁部がヨコナデにより内傾するタイプである。

J C17、18 検出中出土遺物 (199~206)

199は不明土師器小片で、甕かと思われる。SH5074に伴うものか。200は中北勢系の土師器小皿である。201～204は山茶碗である。202は尾張型第10型式で、焼成時に底部が割れている不良品でありながら、消費地まで持ち込まれている。煤が付着している。201・203は尾張型第7型式で、203の底部外面には「田」状の墨書がある。204は尾張型第5型式のもので、外面底部に「□門」「□阿」と考えられる墨書が見られる。205は南伊勢系の土師器鍋で、外面は煤が厚く付着し、調整不明である。206は石碇で、よく使用しているようで、摩滅している。

J D 以東検出中出土遺物 (207～221)

207・208は中北勢系の土師器小皿、209は南伊勢系の土師器皿である。210・211は第5型式、212・213は第6型式の尾張型山茶碗小皿で、212の内面には墨と思われるものが付着している。214は尾張型第7または8型式で、底部外面に墨書が見られるが判読できない。215は尾張型第6型式の山茶碗で、外面に油煙、煤が付着している。216は錯軸の施された徳利で、近世のものである。217は土師器鍋小片で、三河産内耳鍋と思われる。218は土師器羽釜で、中北勢系のミニチュアである。219・220は加工円板で、219は尾張型第7型式の山茶碗の底部側面を、220は唐津碗の高台部の高台と側面を打ち欠いたものである。221は瓦質土器で、長方形ですった痕跡があることから、碇と考えられる。

第5次A地区包含層出土遺物 (222～224)

222は、攪乱から出土した須恵器壺である。底部内面に付着物が見られる。224は軒平瓦である。223は麗美5型式の山茶碗で、内面見込み部が磨耗しており、転用碇の可能性もある。また、割れ口に漆かと思われる付着物が見られる。底部は墨書があり、「龍承」「龍委」などと読める。人名の可能性もある。

第5次C地区検出中出土土器 (225～236)

225は京都系と思われる土師器皿である。口縁端部内外面に油煙が付着しており、灯明皿と考えられる。226は尾張型第7か8型式の山茶碗小皿である。227～230は、尾張型第6型式の山茶碗である。229の底部外面には「井」と考えられる墨書が見られる。231・232は青磁碗である。233は陶器鉢で、瀬戸登窯第1小期のものである。内外面とも錯軸が施さ

れ、掃り目は9本1単位で施される。234は砥石で、2面が特によく使用されている。235・236は内面見込みが磨耗し、墨痕も見られることから、転用碇と考えられる。237は軒丸瓦である。

第6次調査検出中出土遺物 (238～240)

238は尾張型第7型式か8型式の山茶碗小皿、239は尾張型第6型式の山茶碗である。240は中北勢系の土師器羽釜である。55や123と類似する。

第5次B地区表土出土遺物 (241～245)

241は中北勢系の土師器小皿である。242・243は山茶碗で、242は尾張型第5型式、243は尾張型第6型式のもので、外面底部に墨書が見られる。244は中北勢系の土師器羽釜である。245は鉄線である。

第5次C地区表土出土遺物 (246～249)

246～248は尾張型第6型式の山茶碗である。243の底部には「α」状の墨書がある。249は近世信楽産の灯明皿で、底部に付着物が見られる。

(水谷 豊)

山茶碗・施軸陶器については藤澤良祐氏に、常滑製品については中野晴久氏に小破片を含めすべてを見せたい。また、それぞれの遺物については、以下の文献を参考とした。

山茶碗・古瀬戸・大窯

- ・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター、1994年)
 - ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X(瀬戸市歴史民俗資料館、1991年)
 - ・藤澤良祐「中世瀬戸窯の研究」(吉志書院、2005年)
- 常滑製品
- ・志羽一郎・中野晴久「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』(小学館、1996年)

信楽製品

- ・畑中英二『信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版、2003年)
- ・伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1(三重歴史文化研究会、1990年)
- ・伊藤裕偉「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」『研究紀要』第8号(三重県埋蔵文化財センター、1999年)
- ・伊藤裕偉「東海西部(伊勢・志摩・伊賀)『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』(中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—)実行委員会、2007年)
- ・『市場遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2003年)

墨書土器については、倉富歴史博物館復元館之・松田珠美・星野利幸氏に実現のうえご教示いただいた。